
掃除屋幽香

黒犀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

掃除屋幽香

【Nコード】

N8329V

【作者名】

黒犀

【あらすじ】

風見幽香を始めとした幻想郷の住人。彼女達が外敵と戦う物語。

一話 越境者

結界で囲まれた土地、幻想郷。

そこには人間、妖怪、神、妖精など多種多様な種族が共存している。

そんな幻想郷の北部森林地帯。めったに人が立ち寄らない場所に、チエック柄の洋服に畳んだ日傘という、夜の森には場違いな格好の女性の姿があつた。

風見幽香。花を操り、花と共に在る妖怪。

彼女は月明かりもまばらな森の小道で、迷うことなく歩を進めていた。

森の最深部。木々のない開けた空間に三人の人間がたき火を囲っている。

彼らは幻想郷の人里ではあまり目にすることのない、白のシャツと黒のズボンを身に着けていた。

「どうなってるんだよ、ここは……。こいつがなければ、この犬っころどもにやられていたぞ」

手の中で無骨な拳銃を弄っている男の視線の先に、息絶えた野犬が積み重ねられていた。

「それよりも、こんな土地でこれからどうするんだ？ 食い物だつてすぐに無くなるぞ」

「それなら心配ないな。こんなファンタジーな世界の住人なんて、文明の遅れた土人に決まってる。こいつを見せてちよつと『交渉』すれば、食料ぐらい喜んで差し出してくれるだろうよ」

「ついでに金目の物もってわけか？ ハッ、ハハハッ！」

闇の中、火を起こしたことで安心しきっていたのだろう。談笑していた彼らが幽香の存在に気付いた時には、既に目と鼻の先まで接近を許していた。

彼女の正面、最初に目を合わせた男は、声を上げる間もなく光弾に貫かれる。

「！？」

「こつ、この女……！！」

状況も満足に理解できないまま、怒り狂って拳銃を乱射する男達。だが幽香は最初の光弾を撃った直後に上空に浮かび上がっていた。宙を舞う人型に銃弾を当てるなど、そうそうできることではない。お返しとばかりに日傘から閃光がほとばしった。

銃器のように派手な音は生み出さないが、力強く、正確に放たれた光線が闇夜を翔ける。

仲間が倒れ、最後の一人になって、男はようやく冷静な判断がで
きるようになった。

（この化け物に関わってはいけない）

恥も外聞も、生命を繋ぐ荷物まで捨てて、男は走る。木の枝や葉
にぶつかり顔を傷つけるが、構わずに走り続ける。

しかし結局この判断がもたらしたものは正面から貫かれるか、背
中から貫かれるか、という結果の違いだけであった。

翌日、一面に向日葵が咲き誇る『太陽の畑』、その一角にある幽
香宅は来客を迎えていた。

境界を操る大妖怪、八雲紫。幻想郷成立に関わった妖怪の賢者。
彼女こそ、希少な植物の種や日用品などを報酬にして幽香を北の
森に送り込んだ張本人である。

「越境？」

「そう。ただの人間が、何かの拍子で世界の境界を越える力を得る。単純に迷いこんで来た人間とはまた別物なの。先日の目標もそういった類の存在よ」

「そういえば昔、幻月が似たようなこと言ってたわね……」

ふと、故郷の旧友のことを思い浮かべる。

「確かに、この手の人間は昔から存在していたわ。でも、最近はやっと多すぎる」

「……………」

「あ、そういえば貴方が回収してくれた銃だけど、おかしな力とかは感じられなかったわよ。何の変哲もない、ただの工業製品」

幽香が興味無さそうにしている様子を見て紫が尋ねる。

「あら？ やっぱり合成樹脂の塊はお気に召さなかったかしら？」

「ええ。あれは大地に還り難い。大地に還れないと、世界は回らないし、本当の意味で何かを生み出すことはできない」

外に広がる向日葵に、草花に、「じっ」と視線を送りながらそう答えた。

庭先のテラスで話をしていると、幽香はシャツの裾が引っ張られていることに気付いた。

金の髪にゴシック調の服。お隣、無名の丘に住む、小さな人形を

連れた小さな人形妖怪。

「？ メデイスンじゃない。……そうね。一緒に花を植える約束だったわね。先に行つててちょうだい」
「ん！」

裏庭の方に勢いよく飛んでいくメデイスン。
紫はそんな二人のやり取りを黙って見ている。

「おかしいかしら？ 私がこんなことしてるのが」
「まさか。おかしいことなんて何も無いわよ。今はもう、そういう時代ですもの」

そしてそんな時代を維持するため、これからも彼女達古い妖怪は、『わるだくみ』を続けていくのだ。

二話 過去の清算

どんよりと曇ったある日の早朝。

夜を活動時間とする妖怪なら、まだくつろいでいるようなこの時間帯に、幽香の元を訪れる者がいた。

憂鬱な天気を感じさせない快活さを持ち、白の水兵服をラフに着こなした少女。

しかし、その外見とは裏腹に、かつては人間達の多大な恐怖を一身に集めた妖怪。

人里近くの妖怪寺、命蓮寺の一員である村紗水蜜だ。

彼女はある依頼を持ち込んで来た。

「妖獣キメラの退治ねえ……。キメラ、西洋の神話に出てくるあれかしら？」

「それは、何とも言えないわ。私達が気づいた時にはもう日本に居たのよ」

水蜜によると、敬愛する主、聖白蓮が人間達に封印される前、彼女が妖怪を密かに保護していることを知ったその妖獣は、これ幸いと聖の元に逃げて来たのだという。

もちろん彼女はこれ以上殺生を繰り返さないよう説得し、妖獣も表面上は従っていた。

だが、妖怪を庇っていたことが明るみになり聖が法界に封印されると、それまで溜めていた不満を晴らすかのように大勢の人間を殺害していったのだ。

「それで、今そのキメラが幻想郷にやって来たと」

「そういうこと。昨日、山の哨戒天狗が何者かにやられたんだけど、たまたま現場の近くに居たうちのナズーリンが、あいつの妖力を探知してたのよね」

奴は聖に、ひいては幻想郷に災いをもたらすに違いない。

かつての、聖と出会う以前の自分と似ているところがあるからこそ、水蜜はそう確信することができた。

だが、あの妖獣は恐ろしいほど用心深い面を持つ。

実際、あのナズーリン 索敵に特化した妖怪ネズミが追跡しきれなかったほどだ。

その上命蓮寺の所属である水蜜達は顔が知られているため、闇雲に捜し回ったところですぐに逃げられてしまうだろう。

だからこそ、わざわざ寺と無関係の幽香に依頼しに来たのだ。

「話は分かったわ。……それにしても、”退治”とはね」

「まあ、言いたいことは解るわよ。聖には話してないし。でも、こういった汚れ役は私かナズーリンが適任なのよ」

自嘲する風でもなく、どこか吹っ切れたような顔で答える。

「ふふつ。安心したわ。日本屈指の亡霊妖怪が腑抜けているんじゃないかと、ちよつとだけ思ってたのよ」

そう言われて素直に喜んでいいものか、困惑の苦笑いを浮かべる水蜜であった。

哨戒天狗が殺害された事件現場。

身内が被害にあったため、そこでは当然のごとく妖怪の山の一隊が警戒態勢を敷いていた。

手掛かりを捜しに来たのはいいものの、幽香に何かの当てがあるわけではなかった。

狭い狭いと言われる幻想郷だが、身一つで逃げ隠れされたら見つけるのは決して容易なことではない。

（船長は用心深い性格だと言ってたけど。その割には天狗の哨戒ラインなんかに侵入してるのよね。偶然入り込んだだけなのか、それとも　　）

慌ただしく飛び回る天狗達を遠目に、幽香はゆっくりと思考を巡らせていった。

それから一週間後。山の妖怪達が事件現場を引き払った翌日の明け三つ時（明け方）。

この地に空から一つの影が近づいていた。

獅子の頭部に山羊の胴体、蛇の尾を持つ異形の獣、キメラ。

地面に降り立つとすぐに周囲を警戒するが、急にある一点を凝視し始めた。

「なるほど……。なかなか鼻が利くのね」

何も無いはずの空間から、感心した声を上げつつ、幽香が透明化の術を解いてその姿を現す。

「貴様、それを……」

「ああ、これ？ 巧妙に隠していたみたいだけど、私の知人が一発で見つけてくれたわ」

キメラの視線の先、幽香の隣にあるのは空間の歪み。幻想郷と外部を行き来する結界の亀裂である。

これこそが、キメラが危険を冒してまで”山”のテリトリーに接近した理由であった。

幽香は知人　八雲紫に亀裂の位置を教えてもらうと、時が来るまで、その場で待ち続けていたのである。

「それにしても、神代の妖獣ともあろう者が随分と情けない真似をするのねえ。手下を引き連れ、攻め入って、畏怖を集めて幻想郷の神獣にでもなるつもりかしら？」

あきれたように言う幽香の周りを、いつの間にか十を超える妖怪が遠巻きに取り囲んでいた。

人狼『ウェアウルフ』。高い身体能力を保有し、集団戦を得意とする西洋妖怪である。

「フツ、ぬかせ。見られたからにはこのまま帰すわけにはいかん。のこのこと一人でやって来るなど、平和ボケした己自身を恨むんだな」

キメラは首を振り、部下達に愚かな邪魔者を排除するよう指示を出す。

幽香に襲いかからんとする人狼達。

しかし、数歩前進しただけで歩みを止め、あろうことが、呻き声と共にその場で倒れてしまった。

その光景に動揺するも、すぐに状況を理解する。

「！？ これは、毒霧か！ 事前に土の下に仕込んでおくとは、姑息なことを！」

「どの口で言うんだか」

幽香の突っ込みも聞かないうちに、鈍重そうな体からは想像もできない速度で飛びかかる。

だが幽香は、上半身の動きだけで妖獣の鋭い爪をかわすと、さかさず右の拳を相手の顔面に叩き込む。

激しい衝撃を受け宙を舞うキメラ。何度も地面にバウンドした後、大木に衝突してようやく動きを止める。

そこに間髪入れずに追撃しようと詰め寄る幽香。

その時、ふいに、地に伏していたはずのキメラが顔を上げる。

「！」

幽香の視界を一瞬にして火炎が覆う。

神話の中で、幾多の戦士を焼き払ってきた業火の炎、『キメラの火』。

万全を期し、至近距離で繰り出された炎は塵も残さない。そう確信した後、キメラの両目に映ったものは

「…………お話に違わぬ炎ねえ」

燃え盛る自身の右手を眺める幽香であった。

「ところで、お話通りなら次に私がどうするか、分かるわよね」

その言葉に本能が警鐘を鳴らし、咄嗟に空に逃げようとする。

だが、一足飛びに懐に入って来た幽香に捕らえられ逃げ場を失ってしまふ。

「悪いけど、溶けた鉛は持っていないの。私の腕で我慢してもらうわ」

そう言つと、幽香は未だ燃え続ける右手を、腕ごとキメラの口に突き入れた。

本来、精神の生き物である妖怪は”謂われ”に弱い。

しかし、十字架をもともしない吸血鬼が存在するように、案外本人の気の持ちようでどうにかなってしまうものだ。

今幽香は異なる部分こそ多々あるが、神話に記されたキメラ退治の構図を再現した。

彼女の覇気に気圧された妖獣は、この謂われを振り払うことが出来なかった。

喉を腕で塞がれ、共倒れ覚悟で火炎を吐くこともできない。

そんな無防備な状態の腹に、幽香の左拳が放たれる。

再び宙を飛び地に落ちるキメラの体。

しかし、今度は立ち上がった反撃する余力は残っていなかった。

（ぐうつ！ この地の、妖怪がつ、これほどまでとは……………話が違う！）

戦いを忘れ、決闘ルールなどというくだらない物を決めて争っているふりをしている。それが彼の幻想郷に対する認識だった。

ゆつくりと、しかし確実に敵に近づいて行く幽香。その体に溢れんばかりの妖力が満ちていることが、遠目からでもうかがい知れた。

「ま…………、て。…………待てえ！」

幽香は足を止め、誰にともなく言葉を発する。

「ルールを守らないものは、ルールに守られることもない」

花符「幻想郷の開花」

宣言もなしに放たれたその奥義は、幽香を中心に無数の光弾を生み出し彼女の周囲を埋め尽くしていく。

その様子はまるで、地上に咲いた一輪の巨大な花であった。

「　　と言っわけで、頼まれた通り”退治”しておいたわ」

数日後、事の顛末を聞くため、水蜜は再び太陽の畑に来ていた。

あれから生き残った人狼達は、八雲と妖怪の山の決定により地底に収容され、結界の亀裂も無事に修復された。

いくつかの懸念を残しながらも、事件は収束に向かっている。

「あの妖獣が寺に、あなた達の前に現れることは二度とないでしょう」

「……そっか。終わったのか。……なんだか、肩の荷が下りた気分ね」

水蜜は最初に訪れた時よりも、幾分か軽い足取りで仲間の待つ命蓮寺へと帰っていった。

その後、水蜜と入れ替わるようにしてメディスンがやって来る。
何を隠そう、あの時人狼を昏倒させた毒霧は、彼女の毒を操る能力と幽香の花を操る能力を組み合わせた物だったのだ。

鈴蘭の毒をその場にあつた別の花に仕込んだ、即席の毒霧噴射装置。

幽香を始め”花の異変”に関わつた者ならある程度耐性が付いているのだが、幻想郷に来たばかりの外来妖怪にとってはそうはいかなかったようだ。

「ねえ幽香。さっきお仕事のお代に魔界の種を貰つてたけど、あんなの植えて大丈夫？」

「もちろん。ちゃんと管理して野放図に増やそうとしなければ、共存できるものなのよ」

ここ幻想郷では日本の植生を基盤にして、外では絶滅した種や幻想郷独自の種など多様な植物が存在する。

このような環境が成り立つのは、豊穡の神を筆頭とした自然の神が、意識的、無意識的に自然を調整しているからだ。

『幻想郷は全てを受け入れる』

受け入れた結果、共存に向かうのか排除に向かうのか。それは住人次第である。

二話 過去の清算（後書き）

弾幕の描写については独自解釈が入っています。

三話 身死して残るもの（前編）

様々な妖精達が集まる霧の湖。その畔には、吸血鬼の姉妹が住まう真紅の洋館、紅魔館が建っていた。

当主レミリア・スカーレットと、その妹フランドール・スカーレット。強大な力を持つが妖怪としてはまだ若いこの二人に、数多くのメイドが仕えている。

フランドールはその能力の危険性から外に出てくることはめったにない。しかし、概ねそこは平和であった。

幽香はそんな紅魔館と、ちょっとしたきっかけから付き合いがあった。

きっかけと言っても、「レミリアに頼まれて狂気で暴走したフランドールを八つ裂きにした」などという物騒なものではない。（そもそもフランドールは館に閉じこもってはいるが、スペルカードルをよく理解して守っているし、意外に理性的な性格をしている）幽香が人里に卸している花の種や香辛料が紅魔館のメイドの目に留まったことが両者の交流の始まりであった。

この日、幽香はいつものように取引を終えた後、レミリアと紅茶を楽しんでいた。

「……そう言えばこの前、面白いことがあったのよね」

「面白いこと？」

「そう。あの時、ちょうど出かけようと思って咲夜と門に向かってたんだけど」

館の門前でレミリアが見たのは、己の家臣である門番が一人の男と口論している場面であつた。

聞けばこの外から来たと思しき男、自分を紅魔館で執事として雇えと主張しているらしい。

だがそんな要求をしておきながら、言葉づかいは悪いわ、態度は横柄だわ、とても職を求めに来た人間とは思えない。これには普段温厚な門番も顔を引きつらせていた。

「また怖いもの知らずな話ね。それで、結局どうしたの？」

「もちろんその程度のことδειいちいち腹を立てたりしないわよ。適当に口を閉じさせた後、近くの森に住んでる大妖精にあげたわ」

「ああ……、彼ね……」

余談だが、紅魔館一帯の地域には三人の大妖精が住んでいる。

霧の湖周辺に住む『湖の大妖精』。

紅魔館のメイド長　十六夜咲夜の部下である『鋼の大妖精』。
そして件の『森の大妖精』。

妖精は基本的に好奇心が強く悪戯好きだが、大妖精にもその傾向がある。

もつとも、悪戯の内容についてはかなり個人差があるのだが……。

「今頃どうなっているのかしら？ ……………プッフ、クククッ」

「やれやれ」

紅魔館から帰宅した幽香を待っていたのは、テラスで勝手にくつろいでいる紫の姿であった。

「なにやら厄介事の予感がするわね」

「御名答。またあなたに一働きしてもらいたいのよ」

紫はそう言って、言葉の割には嫌がっているように見えない幽香に依頼の内容を伝える。

妖怪の集団による襲撃、略奪。下手人はまたしても西洋妖怪らし

い。

「今のところ被害に遭っているのは妖怪だけで、人里に影響は出ていない。それ故、巫女や妖怪退治屋の人間はまだ動いていません」
「でも被害の規模と範囲から、暴れてる連中は結構な数だと予想出来る。だから里に近づかれる前に叩いておこうってことね」

「そういうこと。それと、相手が多くて骨が折れるだろうから助っ人に来てもらったわ」

幽香の言葉に頷くと、紫は能力を使用して空間に”スキマ”を開く。

その中から現れたのは、白と青のゆったりとした服にウェーブのかかった髪 of 少女。

「もー、いきなり何なのよー。まだいいとは言っていないわよー」

冬の妖怪、レティ・ホワイトロックは気の抜けたような声で紫に抗議した。

「そう言わずに。ちゃんとお礼もしますから」

「冬以外はあんまり動きたくないのだけど……」

そう言っ て 渋る レティ だったが、

「あなたと肩を並べて戦うなんて何年ぶりかしら？ ふふっ、楽しくなってきたわね」

「もう、幽香までそんなこと言っ て……。分かった、分かったわよ」

と結局承諾するのだった。

レティは紫や幽香ほどではないが長命な妖怪であり、この二人とは腐れ縁の関係なのである。

「それじゃあ準備はいいわね？ さっそく現地まで行っ てもらっ たいよ」

そう言っ て紫は先ほどよりも大きな、二人分のスキマを開く。

（いつ見ても奇妙な空間ね）

得体の知れない能力にある種の感慨を抱く幽香であった。

幻想郷南西部の丘陵地帯。小高い丘に囲まれ周囲から死角となっている平原に、板金鎧に身を固めた集団が陣を張っていた。

大義のために剣を取るも、政治によって目的を捻じ曲げられ、志半ばで異郷の地にて命を落とした騎士達。その魂が妖怪化したものが、彼らの正体である。

彼らは幻想郷にたどり着くと、出来る限りの手段を使って情報を集めた。

その中で知ったスペルカードル。闘争から殺し合いの要素を遠ざけたその理念は騎士達を憤らせた。

この地の人妖は命を奪う覚悟も奪われる覚悟も持たない、脆弱者の集まりに違いない。

手に入れた情報からそう判断したのだが、実際に遭遇してきた妖怪は全て叩き伏せてきた。

そして

「来たか……。手はず通りに」

指揮官らしき騎士が合図を送ると、鎧の軍団が俄かに動き出す。近づいてくる妖力は今までの妖怪とは明らかに格が違う。しかし、戦いを侮る者達に敗北することは許されない。

死して尚も、騎士に安息が訪れることはなかった。

四話 身死して残るもの（後編）

「ん、狭い所にたくさん集まってるのねえ。窮屈じゃないのかしら？」

と言いつつ、掌に妖力を使って三叉の氷槍を作り出すレティ。彼女達の眼前に広がる空には三十もの敵が姿を見せていた。

敵は投射攻撃を警戒しているのか、盾を構え散開隊形のまま進軍している。

「では、少しばかり見晴らしを良くしましょうか」

幽香のその言葉が戦端を開く合図となった。

レティ・ホワイトロックの寒気を操る能力は、冬場の大規模環境操作にその真髄がある。

しかしだからといって、彼女が直接戦闘能力に乏しいというわけではない。

「気合いを入れて着込んでいるけど、そんなのじゃ冬はしのげないわよ」

レティの氷弾は着弾したものを氷結させ動きを封じてしまう。

「なっ……体が……重……い」

重厚な鎧も盾も意味を成さない。騎士の誇りたる武具も、この時ばかりはただの重荷にすぎなかった。

一方、幽香は敵全体に届くよう大量の光弾をばらまいていた。一見、無駄弾ばかり撃っているようにも見える。

しかし同時に、光弾で体勢を崩した者、氷弾で隊列から落伍した者を確実にレーザーで撃ち抜いていく。

牽制弾と本命弾。

その両方に惜しみなく妖力を注ぎ込めるだけの地力が、幽香にはあった。

弾幕で大地が傷つき、戦友が倒れていく。それでも騎士の隊列は前進を続け、遂には二人を半包囲するに至った。

騎士達は同時に槍を構える。

本来、足場のない空中での白兵戦には様々な制約が課せられる。

彼らはそれを、妖力を姿勢制御に応用することで克服していた。

多方向からの一斉突撃。それを見て、

「幽香。私が」

「ええ」

レティは焦ることなく幽香の前に出ると、氷弾を形成するための力を拡散させた。

寒符「コールドスナップ」

一瞬にして、辺りに氷粒でできた霧が広がっていく。

そして視界を奪われた騎士たちに、霧の向こう側から弾幕の群れが襲いかかった。

「……まだ、少し残ってる」

幽香が冷静な声で警告した通り、霧が収まった途端、生き残った三人の騎士が躍り出た。

妖力で作られた騎士槍と氷槍がぶつかり合う。
激しく響き渡る金属音。

妖怪としての戦闘経験には雲泥の差があるものの、そこはさすがに本職。レティと互角以上の槍さばきを見せる。

しかし所有者の妖力に差があったのか、五回ほど穂先を交えると、騎士槍は先端から粉々に砕け散ってしまった。

別の二人の騎士は幽香を優先目標と捉えて、正面と側面から攻撃を仕掛けた。

体重を乗せた槍の刺突を日傘でいなして光弾を浴びせる。だが、それでも倒れず食い下がる。

（好機……その状態では対応できまい）

正面に手こずっている隙に、横から回り込んで来た騎士が渾身の力でメイスを振るう。

それを幽香は

「!？」

自身の頭で受け止めた。

正確には、頭をわずかにずらしメイスの柄の部分を受け止めたのだ。

敵が動揺した隙を見逃さず、腕を横薙ぎに払う。

騎士は咄嗟に後退して難を逃れるも、鎧の表面が飴細工のように引き裂かれた。

「これが、本物の………モンスター妖怪か！」

目の前の存在に戦慄しながらも、剣を抜く間も惜しんで手甲を叩きつける。

だが岩をも砕く正拳突きは、女性にしては頑健そうな腕に防がれた。

反撃に繰り出された拳がめり込み、鎧の体が崩れ落ちる。

「妖怪に本物も偽物も、あまり関係ないと思うのよね。実際」

最後の組み討ちに満足したのか、どことなく機嫌がよさそうに、
幽香はそう独りごちた。

断続した射撃音の後の、数瞬の剣戟。
騎士隊長は自分の部隊が、たった二人の妖怪によって壊滅してい
く光景を信じることができないでいた。

い
数々の実戦を戦い抜いた我々が、戦の素人に後れを取るはずがな
い
そこでふと、自身の生前の記憶が曖昧であることに初めて気づい
た。

『今まで戦ってきた敵は本当に戦士だったのか。力のない市民では
なかっただろうか』

『自分達は本当に栄光ある”騎士”だったのか』

今となつては眞実を知る術はない。

確かなものは、剣と鎧に刻まれた、武人としての矜持のみ。
流れ弾で折れた槍を投げ捨て、剣を抜き、絶叫と共に突貫する。

「我らは、戦で糧を得てきたのだ。このように生ぬるい、平和な世界が
認められるものかあああああつ！」

そんな敵の姿に興味を失くしたのか、幽香は無表情で右手をかざすと、一際巨大な光弾を放った。

深夜の静寂に包まれた戦闘跡地。不気味なほど静まり返ったこの

地には、人や妖怪の気配は全く感じられなかった。

そこに一人の妖怪がやって来る。赤いおさげに黒のリボン。猫と人の耳を持つ火車の少女、火炎猫燐。

愛用の猫車を押しながら、一通り周囲を見て回るのだが。

「うーん……大きな戦いがあつたつて聞いたんだけどねえ。やっぱり期待するもんじゃないね」

お目当ての物がないことに軽く落胆する。彼女は地底にある灼熱地獄跡の火力を調節するため、火にくべる死体を探しているのだ。大抵の妖怪は死んでも死体を残さない。ここで散った者達も例外ではなかったのだろう。

あきらめて地底に帰ろうとした矢先、ある物が目に留まる。それは騎士の存在の証

「ありや？ 剣……妖力でできてる。珍しいね。持ち主が消えても形が残ってるなんてさ」

アンティーク代わりにはなるかな？ と思い拾おうとするのだが、

「あ、あれえ？」

手で握った途端、ボロボロと崩れ消え去ってしまった。

「あー、あー、……………うん。帰ろう」

バツの悪い顔になる憐だったが、すぐに何事もなかったかのよう
に来た道を引き返して行った。

形を持たないはずのものが形となって現れる幻想郷。
そこで形を失うと、いったいどこに行くのだろうか。

四話 身死して残るもの（後編）（後書き）

レティの武器は某イラストを参考にしました。

五話 憩いの地

幻想郷における人間達の拠点、人間の里。

とは言え里というのは名ばかりで、周囲は巨大な壁で囲まれ、中心部では和風建築と洋風建築が混在し、さらにはカフェまでも。明治期のちよつとした地方都市の様相を呈している。

そこでは人間のみならず、酒場や買い物目的の妖怪達の姿も見られた。幽香もその一人である。

彼女は里の中心部、商業区の片隅にある行きつけの小料理屋に顔を出していた。

「ねえ、女将さん。最近里で何か変わったことはなかった？」

客のいない時間帯。店を切り盛りする四十歳ほどの女主人に問いかける。

「変わったこと……そうだねえ。少し前にその大通りで揉め事があったんだよ。最近外から来た男が、里に来ていた妖精のメイドの子を襲おうとしてねえ」

「……」

「返り討ちにあったあげく、すぐに自警団に取り押さえられたんだけど。制裁がどうのこうのと、訳の分からないことを叫んでたねえ」

おそらく幻想郷縁起の妖精の項、「捕まえて鬱憤晴らし」の記述

を真に受けたのだろうが、まさか大の男が……。それにしても理解に苦しむ行動だ。

『昨今の越境者の増加には作為的なものを感じる』
紫はそう言っていた。

しかし、もし彼らが意図的に送り込まれているとするならば、それは徒に犠牲者を増やすだけの無意味な行為だと、幽香にはそう思えてならなかったのだ。

そのようなことを考えていると、店の入り口から一人の客が入ってきた。

白いシャツに黒いスカート。手には比較的コンパクトなカメラ。

「失礼しまーす！ 毎度お馴染み、文々。^{ぶんぶんまる}新聞の射命丸です！」

妖怪の山に所属する烏天狗の新聞記者、射命丸文である。

「いや、秋が来たせいかわつかり涼しくなりましたねえ。女将さん、とりあえず一杯……。あつ、取材に行かなきゃ」

幽香と目を合わせた途端、踵を返そうとするのだが、回り込まれて組み伏せられてしまった。

「なっ……やめてください！　いったい何なんですか！　まだ何もやってないじゃないですか――！――！」

「あなたが何なのよ」

どこかずれた問答を始める二人だったが、女将さんに窘められるとあっさりと仲良く席に着く。

そして、いつものように自身の記事を宣伝する文。その内容とは、

「『特集！　密着妖精の園24時　〈秋季編〉……何これ」

「ソフフ……妖精はいいですよ。素直で、あるがままに生き、そして何より可愛い」

げんなりする幽香と聞いてもないことを熱く語りだす文、最後の「可愛い」に深く頷く女将さん。

「それよりも他に記事にすることがあるんじゃないの？　例えば、哨戒天狗が襲われた事件とか……」

その言葉に、文は急に真顔になり淡々とした口調で答える。

「もちろん伝えるべきことは伝えましたよ。でも、それだけです。何度も特集を組むようなことじゃない。………殺人（妖）事件なんて、書いて面白いのじゃありませんから」

茶屋に花屋、洋食店に大衆酒場が建ち並び喧騒に包まれた商業区。二人は小料理屋で食事を終えた後、なんとなく辺りを散策していた。

ここも昔に比べて変わったな。と幽香は思う。妖怪退治を目的として作られた山間部の小さな村。外と切り離されると人間の文明が停止し、代わりに人妖の文明が少しずつだが着実に発展してきた。閉鎖された土地でそれが成せるのも、幻想郷の豊かな自然や水資源のおかげだろう。やはり美味しい食べ物があるからこそ、活力が湧いてくるというものだ。

「そうだ。知ってましたか？ 今度寺子屋で歴史以外の授業も始めるそうですよ」

しばらく歩いていると文がそんなことを言いだした。

寺子屋とは里を守護する半人半獣、上白沢慧音が開いている寺子屋のことだ。

元々歴史を教えることを目的としていたのだが、別に彼女が他の教科を教えられる訳ではない。読み書き算術など、必要な事は各家庭で学ぶのが一般的だったからだ。

「歴史以外の授業も教えれば、家の苦労も減るだろうし寺子屋に興味を持つ子供も増えるでしょうからね」

「……やけに情報が早いよね」

訝しがる幽香。

「いや、実は氷精さんがたまに寺子屋に遊びに来ることがあるんですよ。そうなれば、私が取材しない訳にはいきませんからねえ。うんうん」

そう言って写真を渡し、腕を組んで自慢げに頷く文。だがしかし

「これって寺子屋の中で撮ってるみたいだけど、当然先生に許可を取ってるんでしょうね？」

「……………え？」

「……………」

「……………」

「……………ちょっと出るところ出ましようか」

「なあ、文^{ぶん}の字。私も何時までもこんなことを続けたい訳じゃないんだ。……………カツ井とってやるから、吐け」

「違うんです慧音さん！ この手が勝手に！ この手がっ！」

寺子屋の職員室に、阿鼻叫喚の声が木霊する

五話 憩いの地（後書き）

無謀にもギャグ回に挑戦しました。

こんな扱いですが、文はかなり好きなキャラです。

六話 苛烈な洗礼

悪魔の館、紅魔館の朝は賑やかだ。主の吸血鬼に合わせて夜に活動するメイドもいれば、朝から動き出すメイドもいる。

そんな多くの妖精メイド達を、メイド長を補佐して取りまとめている少女。肩まで届く茶髪を持つ大妖精。

彼女は周りから『鋼の大妖精』などという、本人にとっては甚だ不意な異名を付けられていた。これは彼女が上司の真似をして鋼鉄製のナイフ（さすがに銀製は高価過ぎた）を集めていることに由来する。

妖精は人間や妖怪の影響を受けやすい生き物なのだ。

せっかくお嬢様に瀟洒な名前をもらったのに……。こんなことから、もつと瀟洒な響きの素材にすればよかった。

そんなことを考えながら、整然とした庭の中を歩いていた。

「あのー、どうしたんですか美鈴さん？ 誰かお客様でも来たんですか？」

門の近くを通りかかった際、ふと頭を捻っている門番が目に残まった。

門番 紅美鈴は大陸風の衣装を着た妖怪だ。体術に優れ、”気”を使う能力を応用し離れた場所にいる者の気配をある程度察知することもできる。

「……ああ、うん。どうもこっちを探ってるみたいで、気になって

ね。」

「へ？」

「これはひょっとすると、大事になるかも……」

この日、空は雲一つなく晴れ渡っていた。

日が沈み、月が輝く妖怪達の時間。紅魔館からほど近い森の中を多数の人影が蠢いていた。

まだら模様の制服に丸みを帯びた兜。そして余計な装飾の無い黒の小銃。互いに距離を取りつつ、警戒しながらも足早に目的地を目指している。

彼ら、実弾演習中の歩兵小隊が幻想郷に迷い込んだのは昨晚のことだ。一見すると代わり映えのない風景。しかし異変に気付くのに時間はかからなかった。

羽が生え、空に浮かび、奇怪な光弾を放つ生き物達の存在。

仲間の死により、彼ら是否応無しに行動に移らざるを得なかった。

（当面の拠点とするための洋館の確保、か。確かに、これ以上こんな土地を当てもなく動き回るのは危険だが　　）

隊の先頭に行く男、小隊でも最先任の曹長は、顔には出さないものの懸念を抱いていた。

人員の大幅増強による兵質の低下。若い兵の中にはゲーム感覚で銃器を扱う者、規律を軽んじる者が増えていた。……この部隊も例外ではない。

まあ、自分も決して褒められた人格ではないためそれはいい。問題は、実戦で使い物になるかどうかだ。

やがて部隊は裏手の門から洋館の庭に侵入することに成功した。

ここまで、昼間に散々見てきたあの生き物には出会っていない。館の敷地に入ってもその気配は感じられなかった。

（あまりに上手くいきすぎている。夜襲とはいえ、早まったか）

そもそも”あれら”は、夜だからといって休息するような生物なのか……。

そう考えた後、曹長はほとんど無意識の内に空を見上げる。

月を背にした一つの影。

ゆつくりと地上に降りてくるそれは、人間のようにも見える。…

……翼があることを除いては。

誰が最初に引き金を引いたのかは分からない。いくつもの銃口からフルオートで吐き出された銃弾が飛び交い、曳光弾の光が夜空を照らす。

しかし猛烈な金属弾幕の中を、影は瞬時に上昇すると再び月を背にして停止した。

紅い光、紅い霧が空を覆う。

そして紅く輝く瞳

天罰「スターオブダビデ」

一瞬にして、光の束が地上を襲った。

退路を塞ごうとするかのように網目状に広がるレーザーが男達をなぎ払っていく。

閃光と銃声と怒号と、爆ぜる血によって創出されたこの世の地獄。

このまま退いても上から狙い撃ち、なぶり殺しだ。もはや選んでいる状況ではない。

そう判断した曹長は周りの部下に本来の目的　紅の館を指し示した。

「『生き残った狩人たちは、自ら虎穴に挑んでいった』か……」

男達が横たわる中、地に降り立った影、レミリア・スカーレットが呟いた。目前には弾の切れた拳銃を手にする半死半生の指揮官。彼は息絶える直前に怨嗟の言葉を投げかけた。

「こんなことを……してっ、許されると………ただでは、済ま
んぞ………」

それに対してレミリアは不敵に答える。

「そいつは楽しみだな。けど、もしも次があるなら夜の舞台は選
ばないことだ」

館内に突入した先、広間の中でメイド服の集団が曹長達を待ち構えていた。

小隊長の姿は見え、その場にいるのは自身を含めて十人足らず。三分の二があそこで果てたということになる。

通路から、扉の向こうから光の弾を撃ちながら集まって来るメイド達。膝立ちの姿勢で三点射撃を叩き込むのだが

おかしい……。確実に仕留めたはずなのに、殺したという実感が湧いてこない。

それだけではない。光弾と、光弾に紛れて飛んでくるあのナイフ。投擲に使うような物ではないし、軌道や射程が明らかに普通ではない。

今更ながら異常な土地に迷い込んだものだ。

そう冷静に分析しながらも小銃に取り付けた擲弾を射出、爆破

敵を怯ませ強引に道を切り開く。

「走れ！ 別の出口が必ずある！ 小部屋にはかまうな！」

長い長い廊下を駆けていく。進路を遮る障害は無く、端の扉にも注意を向けるが何かが出てくる様子はない。

しかしこちらが手薄である訳を、次の瞬間思い知ることになった。

突如として前方から飛んできた大量のナイフ。

先ほど見てきた物よりも速く鋭い刃が襲いかかる。

全身を突き刺され倒れていく兵達。その姿は地獄の針山を彷彿とさせた。

曹長は咄嗟に、横にいた部下の体を掴み盾にすると、そのまま近くの部屋に転がり込んだ。

ドアを突き破ったその部屋は特に広くもない物置部屋。他に通じる扉もなければ窓も見当たらない。完全に追い詰められていた。辺りを見渡し一呼吸した後、壁を背にして銃剣を銃に着剣する。この期に及んで、彼の心を支配していたのは恐れではなく戦場での高揚感だった。

傭兵時代、自分が狩ってきた敵達はいったいどんな心境だったのだろうか？ 自分と同じか、それとも恐怖に襲われていたのか。初めて彼らの立場になった今、そう考えずにはいらなかった。

足音はない。しかしピリピリとした殺気が嫌でもこちらに伝わってくる。間違いなく、外で見たあの優雅で、禍々しい怪物だ。

気配が部屋の前に来たその瞬間

真紅の槍。

血よりも紅い切っ先が壁ごと腹を貫いていた。

「がはっ……………。こちらの動きはお見通しか。最初から、狩られていたのは我々だった訳だ」

無能な小隊長や増長した兵達と同じく、彼もまた敵の力を見誤っていた。

横にある扉が開き、翼を持った少女が中に入ってくる。
殺気は既に感じられなかった。

「……………最期に、言いたいことはあるか」

そう問われ、静かに銃を手放し目を閉じる。

「今まで好きに、殺してきたんだ。……………こんな、結末にも……………なる……………」

闇が薄れ、空が白み始める。

紅魔館の庭では多くの妖精メイド達が後始末に追われていた。指揮しているのは銀髪の少女　メイド長の十六夜咲夜。主であるレミリアは戦闘の後二、三指示を出すと、すぐに眠りについたのだった。

その咲夜のもとに腹心の部下である茶髪の大妖精が報告にやって来た。

「美鈴さんは念のため館の外を見回りに行ってます。それから内装はともかく外壁の方は修理にちよつと時間がかかるかと。その……お嬢様のスペルで……」

「そう。外の方は時間をかけてやるしかないわね」

館の一部の壁は砲撃でも受けたかのようにバラバラに飛散しており、銃痕が戦闘の生々しさを際立たせている。

「それにしても、どうしてわざわざ夜に攻めて来たんでしょうか？
それも、この紅魔館に」

「そうね……。『自分達に出来ることを相手も出来るとは思っていなかった』……こんなところかしら」

「は、はあ」

そう答えた咲夜の視線の先には回収された襲撃者の装備。緑の兜に黒い筒状の物体がくつついていた。

「さあ、少し休憩してから続きに取りかかるわよ。いつもの仕事もあるんだから」

「うつつ……。はい」

こうして悪魔の館は普段通りの、少しばかり騒がしいが平和な日常に戻っていった。

七話 地上の悪魔と地底の覚

巨大な空間に見渡す限りの書架と書物。

ここは紅魔館地下の大図書館。レミリアの親友、魔女パチュリー・ノーレッジの根城である。

彼女は日頃から紅魔館に知識と魔法を提供しているが、それ以上に重要なことに、技術担当者としての側面を持っていた。

『魔法も科学も本質は同じ』

とは彼女の言である。

この日パチュリーは図書館の隅の作業スペースで、メイド達が拾ってきた襲撃者の所持品を調べていた。

「……………Type 89アサルトライフル……………可視光増幅による暗視装置」

作業机の上には傷ついた小銃と黒い筒状の物体が置かれている。

「これだけの代物があれば、気が大きくなって良からぬことを考えるのも分からなくはないわね。……………もっとも、河童に見せたら苦笑されるかもしれないけど」

「それにしてもレミイったら、朝早くからこんなことさせて。困ったものね」

庭園横に設けられた大きなテラスにて、レミリアは二人の妖怪と会っていた。

「幽香はともかく、珍しいわね。こんな時期に雪だるまの妖怪がやって来るなんて。冬にはまだ少しだけ早いんじゃないかしら？」

そう言われて苦笑いするレティ。

「雪だるまなんて失礼ねえ。どうせなら、雪うさぎぐらい言って欲しいわね」

いつもゆつたりした服を着ていることから誤解されがちだが、実際彼女は華奢な部類に入る。少女にしては長身で体格のいい幽香の横に立つとそれがよく分かった。

ふと、館の方に目を向けると壁の一部が抉れているように見えた。辺りには大勢のメイドが修復工事に取りかかっている。

そういえば、紅魔館は以前ロケットなんて物も作っていた。ああ見えて妖精メイド達は力仕事が得意なのかもしれない。

「やっぱり、たいしたことなかったのね」

「心なしが幽香の顔が残念そうに見えるのは私の気のせいかしら」

どこからか聞きつけたのか、幽香とレティは紅魔館が襲われたと知って様子を見に、冷やかし半分で訪ねていたのだ。

二人の予想通り、レミリアもその館も変わることなくそこに在った。

「おやおや？ フラワーマスターに冬妖怪に吸血鬼に、随分と物騒な面子ですね。カチコミの相談でもしてるんですか？」

そこに現れたのは新聞記者の文。彼女もまた事件を知り取材しに来たのだが、本来の目的は別にある。

「あら、配達にでも来たの？ 例のブンブン丸新聞の」「スポーツ紙みたいに言わないでくださいよ！」

紅魔館は文の発行している文々。新聞を大口で購読しているのだ。……読み終わったら油污れの掃除に使えるし。

そのため幽香に聞かれた通り、文は定期的に結構な量の新聞を持つてここに配達に来ていた。

「それじゃあさっそく中に届けにいきますね！ え？ メイドにやらせるって？ いやいや、お気遣いなく！ では！」

「え、ええ？ ちよつと……おい」

レミリアの話も聞かずに捲し立てると、あっという間に幻想郷最速の速さで飛んでいってしまった。

妖精溢れる紅魔館。

そこは文にとって、まさしく優しさに満ちた地上の楽園なのである。

「本当に大丈夫なの？ 中に入れて」

「……そう言われると不安になってきたわ」

館の地下、大図書館のさらに奥。堅牢な壁に囲まれた大きな部屋があった。普段は部屋の主しかいないこの場所から、何やら話声が聞こえてくる。

「それでその人間、門の前で何て言ったと思う？ 『フランちゃん、お兄さんと一緒に遊ぼう』 だってさ」

「うわっ、気持ち悪い！」

「あまりにおかしかったから、その辺を飛んでた毛玉をたっぷりごちそうした後、メイドに言って近くの森に捨てに行かせたわ。代わりに門番の仕事をしたんだから、美鈴には感謝して欲しいものね」

一人は部屋の主である金髪の吸血鬼、フランドール・スカーレット。

もう一人は黒い帽子にフリルをあしらった服の少女。覺妖怪の古明地こいし。

フランドールはいつもは自室に籠り気が向いたら館の中や庭を歩き回る、といった毎日を過ごしている。

そんな彼女にとつて、地上を放浪しているこいしの話はなかなか新鮮なものであった。

レミリアも咲夜もこの無意識を操る少女の存在に気づきながらも、どんな意図があるのか、あえて黙認していた。

やがて二人のおしゃべりは、それぞれの姉の話題に移っていく。

「お姉様は自分も子供のくせに、すぐに保護者ぶろうとするのよ？
ほんとバツカみたい」

「うちのお姉ちゃん異変が終わった後、たまに地霊殿の外に出かけるようになったんだよ。あんなにどんくさいのに」

酷い言われようである。

もつとも、二人とも他人に同じことを言われたら怒るのだが……。

絢爛豪華な客間の中、レミリアはこの日三組目となる訪問者に相対していた。

古明地さとり。こいしの姉であり、地底の灼熱地獄跡を管理する地霊殿の主だ。

レミリアの横には従者の咲夜が、さとりの横にはペットの燐がそれぞれ控えている。

「わざわざ地上に上がって来て、何の用かしら？ 例の西洋妖怪が暴れたことなら、たいしたことは知らないわよ」

覚妖怪には隠し事も駆け引きも通用しない。
そう考え率直に本題に入ったレミリアだが。

「いえ、今日はその件で伺ったではありません。……妹の、こいしの件です」

彼女の妹であるこいしは、フラツと地霊殿に帰って来たと思ったら、行き先も告げずにまたフラツと出て行ってしまう。

いつものこととはいえ、心配してないかと言えば嘘になる。

「あの子がそちらの妹さんに仲良くしてもらっていると聞いて……。感謝、しています」

さとりの表情は、以前の、人を見透かしたような態度からは想像できないほど暖かだった。

そんな時、自身の妹、フランドールが話題に出たことで、レミリアの様子にわずかな変化が見られた。

それに気づき何となく心を読み取ろうとする。

その時

「!？」

さとりに衝撃走る。

(フランフランフランフランフランフランフランフランフランフ
ンフランフランフランフラン)

この吸血鬼……………同志！

「随分妹さんを可愛がっているみたいですね。実は、私も妹語りに
は一家言ありまして……………」

「……………それは、ぜひとも詳しく聞きたいわね」

「……だから、フランはいつもははねつかえりだけど素直じゃないだけなのよ」

「……という訳で、たまに家に帰って来た時のこいしの笑顔がまた眩しくて」

「フランが」

「こいしが」

「フラン」

「こいし」

「フ」

「こ」

あれから四時間、姉二人は延々と似たような話を繰り返していた。既に日は傾いている。

寿命の長い妖怪には時間の感覚が長い者も多いが、これはちよつと異常だ。

（お嬢様……）

（うわあ……こいつはたまげたなあ。我慢弱いお空を置いてきて正解だったよ）

さすがの忠義者二人もドン引きである。

この日、この出会いによって、吸血鬼は自らの運命に感謝し、覚
は他者と理解し合えることの喜びを知ったのだった。

七話 地上の悪魔と地底の覚（後書き）

かっこいい文はもうしばらくお待ちください。

八話 叛乱

人里から少しばかり離れた林道の脇。そこに一軒の小さな屋台が開かれていた。営むのは夜雀の妖怪、ミスティア・ローレライ。決して商売が上手い訳ではないのだが、妖怪や腕に自信のある人間がちらほらと訪れるためそこそこ繁盛していた。

そんな屋台に真つ昼間から酒をあおる者が。

さらさらとの長髪と絹のようにきめ細かく白い肌、整った容姿を持つ鈴仙・優曇華院・イナバ。彼女は何やら一人で管を巻いている。その原因は冥界の白玉楼に仕える庭師、魂魄妖夢だ。

鈴仙は元々人付き合い（妖怪付き合い）が、嫌いではないが苦手であった。専門的な、他人がよく分からない言葉を多用してしまうことが大きな理由なのだが、彼女に月の住人としての意識が抜け切っていないことも少なからず関係していた。

だが、冥界の住人で穢れが少ないところが月を思い起こさせたからか、妖夢とは初めて会った時から不思議と気が合った。今では里で買物に付き合ったり、たまに、本当にたまにだが上司の愚痴をこぼし合ったりしている仲だ。

では何故鈴仙が今こんなことになっているのかというと、それは数日前まで話が遡る。

博麗神社のいつもの宴会。

この人妖集まるどんちゃん騒ぎで、鈴仙と妖夢はささいなことから口論に及んでいた。酔いが深くなるにつれてだんだんエスカレートしていき……。

「　だいたい何なのよ！　そんな破廉恥なスカートはいて！」
「んなつ！？　破廉恥って、前は可愛いつて言ってたのに……」
「昔のことは忘れたわね」
「！　むぐぐぐぐぐ……表に出なさい！　このへっぽこ侍！」

そこから先はよく覚えていない。が、最後には紅白巫女にまとめて頭を冷やされた気がする。

しかし改めて思い出すと……うん、やっぱり妖夢が悪いに違いない。

そう結論付けて酒瓶を取ろうとするのだが。

「はい、どうぞ」

と横から差し出されて……目が合った。

「きゃあああああー！ー！ー！」

「そんな人を妖怪みたいに……いや妖怪なんだけどね」

隣に居たのは鰻の蒲焼を手にする幽香であつた。

「そんなことより、何か悩みがあるようなら話ぐらいは聞くわよ？」
「い、いや、もう行きますんで！」

そそくさと屋台を後にする妖怪鬼。

しばらくその後ろ姿を眺めた後、ボソツツと言。

「ふむ………こいつは面白いことになりそうね」
「お客さん、白目むき出しで笑うと怖いよー」

幻想郷には時折外の世界から物だけでなく人間も迷い込んでくる。彼ら外来人は下級の妖獣や妖怪に襲われたり、慣れぬ土地で道に迷い行き倒れになったりして命を落とすこともあれば、運良く人里にたどり着くこともある。

その運の良い外来人達が、外に帰ることを選ばなかった場合に定住することになるのがこの人里だ。

そのような残留者の中には色々な人間が存在する。

少年は義憤に駆られていた。

ここには民主主義も憲法もなければ権力も分散していない。まるで未開の野蛮人の土地ではないか。

このようなことが現代の世にあつていいはずがない。

そう憂えた彼は、人里の人間に教育を与えようと考えた。
アボカリプス

文明や制度が遅れているのは人間の程度が遅れていることに原因がある。ならば意識改革を促し啓蒙してやるまで。

だが、善意はあつけなく打ち砕かれた。寺子屋の教師が、信用ならないというふざけた理由で彼を雇うことを拒否したのだ！

やはり女が力を持つ社会はろくなものではない。

この悪しき体制を打破するために、少年は武力解放に踏み切る決心をした。
エクスターシア
自分と同じ外の人間を集めて、協力と呼びかけ、遂には計画の実行段階に漕ぎ着けた。

聞いた話では最近になつて外来人の数が増えてるという。きっと、
ウラノス
天もこの革命を後押ししているのだろう。

問題は人里にも少なからず存在する妖怪という名の化物共だ。
ディアボロス
連中が酒場に集まる夜を避け昼間に決行するのだが、油断はできない。しかし、勝てない相手ではないはずだ。

何故なら化物を倒すのは、人間の役目なのだから……。

そこまで思索を終えると、銀色の長髪と生白い肌を持つ女顔の少年^{かみやきょうが} 神夜恭牙は家宝の魔剣『冥府を齎す者』^{シエオルプリンガー}を手に取り、この世界の摂理に敢然と立ち向かっていった。

人里中心部、商業区の端にレンガ造りの大きな建造物がある。

自警団本部。里の治安の要となるこの建物が今、危機に瀕していた。

十数人からなる暴漢達の襲撃。彼らは小銃や刀で武装しており、自警団の団長以下数人を小競り合いの後に拘束してしまった。

普段里の中ではたいした事件もなく酔っぱらった妖怪が現れるのも夜のため、手薄にしていたところを奇襲されたのだ。

本部を落とした次の目標は稗田邸。名家で、里中に影響力を持つここを押さえる意味は大きい。

暴漢達は残った部屋を手早く制圧していこうとするのだが……。

「なっ！ 弾幕だとお！？」

扉の先から大量の光弾が飛んでくる。

「お前達……好き勝手やってくれたな」

上白沢慧音。教師にして守護者。
自警団の活動にも協力している彼女が、偶然本部を訪ねていたのだ。

狭い室内では数で攻めることもできない。手を出しあぐねている間に次々と弾幕に打ちすえられていく。

だがそんな暴漢達の中に、一人だけ明らかに動きが違う者がいた。
光弾を紙一重でかわし、危険を顧みず前に踏み入る。
そして構えた軍刀を振り下ろし、

「くっ！」

国符「三種の神器 剣」

慧音の霊力剣とぶつかり火花を散らした。

弾幕を撃つため距離を取ろうとしても、そうはさせまいと巧みに詰め寄られる。

男の姿はカーキ色の上下の制服に帽子。

「その軍服……どういう事情があるか知らないが、よりによって、こんな連中に与するとは……！」
「……………」

静かに怒気を発する慧音。

それにも動じず、男は黙してひたすら刀を振り続ける。

夜雀の屋台から飛び出して、鈴仙がやって来たのは人里だった。

この日は休みをもらっているので別段早く帰る必要はないのだが、今の自分の様子を師匠やてゐに見られたら何か勘繰られそうで気が引けた。

ハア……とため息を吐く。その長い兎の耳もいつもよりしおれて見える。

沈んだ面持ちで歩いている鈴仙だったが商業区の近くを通りかか

った際異変に気づいた。

大剣を振りかぶった人間が猛然とこちらに走って来る。その狙いは……

「えっ……私!？」

そうと分かれば悠長にはいられない。すぐさま手を拳銃に見立てて人差し指を前に突き出す。その先から銃弾形の弾幕を撃ち、相手の動きを止めようとするのだが。

「嘘、弾幕が……」

命中する寸前に煙のようにかき消えてしまった。

あわてて狂気の瞳を発動させ精神操作を図るも、こちらも効果がない。

これこそ大剣を持った人間 恭牙が幻想郷に来て覚醒した力。

イレギュラーヴァニッシュ
『異能を無効化する程度の能力』だ。人外ひしめくこの地において、自身の能力はジョーカーになるだろうと、彼は予感していた。

だがそれだけではない。もう一つの力、魔剣『冥府を齎す者』シエオルプリンガー。

近くを通りかかったこの不運な化物で、切れ味を試させてもらう

……!

弾幕を放つ鈴仙に恭牙の刃が迫る。

「化物め……。あまり人間を、舐めるな!」

横に空を切る剣。後ろに跳んでかわされ、反撃の斬り込みが瞬時に飛んでくるが、それを激しい衝突音と共に弾いて防ぐ。

このような攻防が既に何十回も繰り返されていた。

恐るべきは、己の剣技のみで慧音と渡り合う男の胆力。だが激しい回避運動のせいで、さすがに息が上がってきた。それにこれ以上時間をかけると態勢を整えた自警団の反撃を受けてしまう。

男は軍刀を正中線に構えて動きを止める。勝負に出るつもりなのだ。

次の瞬間、床を蹴り弾丸のように繰り出される突き。下方から剣を斬り上げ迎え撃つ慧音。

すれ違い、そして……。

男が膝を突き、腕を押さえて倒れ込む。

手練れがやられたことで戦意を喪失したのだろう。建物内の暴漢達が我先にと外に逃げ出そうとする。

しかし悲鳴と鈍い音と共に、気絶した状態で転がり込んで戻って来た。その方向、玄関から姿を見せる者が。

「何やら取り込んでるようだけど、勝手に参加させてもらってるわよ」

「……あなたか。とりあえず、助かった」

閉じた日傘を肩にかけている幽香であった。

振り下ろされた恭牙の大剣。だがそれは、鈴仙には届いていなかった。大上段からの強烈な一撃を受け止めたのは

「邪魔をするとは。貴様も化物の仲間か」

銀の短髪、銀の長刀。

「……よー……む？」

半人半霊の剣士、魂魄妖夢。

兎の少女に背を向け、狂気の前に立ち塞がっていた。

新手の敵の出現に若干の焦りを感じ、恭牙は一旦後ろに退くと懐の拳銃を取り出す。その引き金がかかる前に、妖夢は固まっている鈴仙を小脇に抱え跳躍した。

回転式の弾倉が回り四発、五発と発射される鉛玉。家屋の上を飛び跳ねて避ける妖夢の姿は、華奢とはいえ妖怪一人担いでいるとは思えない。

屋根の上に鈴仙を降ろして地面に降り立つと、長刀　楼観剣を構え鋭く睨む。

「誰が化物だつて？ ……取り消しなさい」

「ふん、いきなり大きな口を叩く。女子供だから容赦すると思っただら大間違いだ」

拳銃をしまい再び『冥府を齎す者』^{シェオルプリンガー}を振り上げ烈風^{アエーマ}となって斬りかかる恭牙。

漆黒の凶刃^{テイルウイング}が、獲物の血を求めて唸りを上げる。

大振りの斬撃を、妖夢は横に軽く跳んでかわすと一太刀、相手の大剣を打ち手を痺れさせる。

そして手首を返し、

「フッ！」

短いかけ声と共に、刀の峰を流れるような動きで脇腹に叩き込んだ。

魂魄流とは数百年単位で研鑽していく剣術である。未熟とはいえ、数十年は鍛錬してきた妖夢の境地に、通信教育で剣をかじった程度の人間がついていけるはずがなかった。

異能の力に勝ち、剣の力に負けるとは……。敗北感に包まれ、意識が失われていく。その直前に彼が見たものは化物などではなく、短髪の剣士に駆け寄る一人の”少女”の姿だった。

八話 叛乱（後書き）

慧音と妖夢と鈴仙を書きたくて全部詰め込んだら幽香の出番が無くなってしまった……。

それにしても、オリキャラの名前や武器を考えるのって楽しいですよ。時間が経つのも忘れそうになります。

九話 叛乱終わって

夕日に染まりゆく里の中を大勢の人間が慌ただしく動く。

あの後、解放された団長によって自警団は統制を取り戻し、今は残党の捕縛に当たっている。

自警団本部の占拠と時を同じくして里長の自宅も襲撃を受けたのだが、こちらは巡回中の自警団と居合わせた妖怪によって鎮圧されていたようだ。

今回の騒乱の元凶ともいえる少年、恭牙も意識を失ったまま取り押さえられたのだが。

「うへえ……なんじゃこりや」

その銀髪、長く伸ばしているにもかかわらず、まともに手入れをしてこなかったため傷んでいた。正直言って不潔である。

彼を運んでいる自警団員の男性も顔をしかめていた。

家屋もまばらな里の外れ。ここには里の中を流れる川に木造の橋が架かっている。

その橋の上で、鈴仙と妖夢は欄干に身を寄せながら遠くの茜色に変わっていく空に目を向けていた。中心部の捕り物騒ぎの見物に集

まっているせいか、辺りに人影はない。

「それにしても何だったのかしらね？ あんな大げさな剣持ってた割りに、あつという間に妖夢にやられちゃって」

「え？ ええ、そうね」

しばらくの沈黙。

お互い、どう話を切り出したものか逡巡している。さすがにこんなことまで斬って解決する訳にもいかないだろう。

だが鈴仙が服の埃を払ってあげると、妖夢は意を決して彼女の方に向き直った。

「あのさあ、鈴仙」

「うん……」

「この間の宴会でのことなんだけど……」

再びの沈黙。

「……………」

「……………」

「……………」

「あの……何やってるんですか？ 幽香さん」

すぐ横に幽香が無言でたたずんでいたのだ。

周りには雰囲気を出するため、何時の間にやらたくさんのお花を舞わせている。無駄に本格的だ。

どうして二人は黙り込んだのかと、不思議に思っていた彼女に対して気まずそうに質問する妖夢。幽香はしれっとした顔で答える。

「私のことなら気にせずに、野花でも思っただけ。……そんなことより、さあ、続きをどうぞ」

「結構です！」

羞恥のためか怒りのためか、赤くなった妖夢は鈴仙の手を取ると、買い出しのために里に来たことも忘れて何処かに飛び去ってしまった。

一連のそんな光景を見て改めて思う。若人達を観察していると、まるで新芽の成長を見ているような気分になると。

「紫の気持ちも分かるかもね。ほんの少し、芥子粒ぐらいには」

かくして、この大きいようで小さいクーデター未遂事件は半日も経たない内に終結を見た。重軽傷者は多数出たが、永遠亭の置き薬の活躍もあつて死者をゼロにできたことは僥倖と言えるだろう。

問題となつたのは事件を主導した少年、神夜恭牙の処遇である。恭牙は首謀者といつても実際には最初に決起を働きかけたぐらいで、具体的な計画を立案したり武器を集めたりしたのは慧音に敗れた軍服の男だった。

幻想郷には外の世界のみならず、未来や過去からものが流れ着くことがある。あの男もその一人だったのだ。

歴史を識る慧音だからこそ、馬鹿なことに加担する彼を見て思うところがあつたのだろう。

そんな訳で恭牙に対して里の民会（重要な案件を討議する集会）が下した処罰は、更生を兼ねた一定期間の労役だった。16歳とまだ若いということも考慮された。

外の世界にいた時に悪法と散々蔑んできた少年法。その理念と似たような理由で助けられるとは……何とも皮肉な話である。

ちなみに彼の更生兼労働の指導を買って出たのは大工の棟梁だ。大工の仕事場、それは筋骨隆々なくましい職人達が力と技術を振るう戦場。漢の中の漢達に揉まれることで、恭牙も健全な肉体、健全な精神を育むことができるだろう。きっと。多分。

人里での騒乱の翌日。深緑の木々が鬱蒼と生い茂る妖怪の樹海。この妖怪の山をぐるりと取り囲む森を、切り立った断崖の上から見渡す者がいる。

白の髪に山伏風の頭巾を被り、いつもは後ろに背負っている幅の広い太刀を腰に差している。手につけた盾には複数の傷跡が。

その白狼天狗の少女、犬走椀が崖下を監視していると、後方に別の白狼天狗が音もたてずに降り立った。

「侵入者の撃退、完了した模様です。各隊は事後処理が済み次第通常の前警戒態勢に移行、指揮官は後ほど報告に参ずるようにと」
「分かった」

用件を伝え終わると、再び音もなく山頂の方に飛び立っていく。

この日深夜に、妖怪の山は多数の人間の侵入を受けていた。その数六十余名。広範囲に分散して進んでくる彼らの排除を、複数の警戒部隊が担当していたのだ。

彼女達は警戒部隊といっても前線での威力偵察を任務とするため、戦技に長けた要員で構成されている。

（にしても、部隊長に昇格した矢先にこんなことが起こるなんて。

間が良いのか悪いのか……)

「無事終わったようね。まあ、あの人数で森を抜けられるとは思ってなかったけど」

「……貴方ですか」

現れたのは、報道部隊に属する烏天狗の文。烏天狗といっても、千年以上の時を生きる彼女は山の中でも少し特殊な立場にあるのだが。

「しかし夜の山に喧嘩を仕掛けるとは。よっぽど自分達の道具に自信があつたのね」

「道具ですか？ それだけのことで」

「それに、向こうは敵が夜目が利いたり、森の中を自由に飛び回ったりできるなんて想像してなかったのよ。あなた達のこと空飛ぶ犬人間ぐらいにしか思ってたんじゃないかしら？」

犬人間って何だよ……。と突っ込みを入れたくなる桜。

だが文の指摘は間違つてはいなかった。

侵入者は自動式の小銃の他に文明の利器、暗視装置を個人レベルで保有していた。そんな彼らからすると、刀剣や盾ごときで武装した桜達など針を持たないヤマアラシ、あるいは神の前に引きずり出された哀れな罪人のように映つただろう。

もちろん、実際に夜間の戦闘で妖怪が不自由することはない。夜は妖怪の時間なのだ。彼らの方こそ白狼天狗達から丸見えだったのである。

さらに言えば、地の利の存在。山の修験者とも呼ばれる天狗に山地や森林で不用意に戦いを挑むのは自殺行為と言わざるを得ない。

山の妖怪を夜戦も散兵戦も集団戦もできない遅れた存在と認識しては、こんな結果になるのも当然だ。

「それよりも、重要なのはこれからよ。この侵入者達、軍服も部隊章も着けてないけど明らかに統一された意思の下、何らかの目的を持って接触してきた」

「……………」

「妖怪を退治するのが人間なら、人間を襲うのが妖怪というもの。厄介事となれば、私達”山”も動くことがあるかもしれないわね」

若干早口でそう語る文。

「……………やけに乗り気じゃないですか」

椀の言葉に一瞬キョトンとなるのだが、すぐに口元に笑みを浮かべて答える。

「確かに、争い事は好むところではありません。でも……………幻想郷を荒らされるのは、それ以上に気に入らないのよ」

その細められた瞳は猛禽類のごとく光っていた。

十話 魂移ろう先

小川が流れ木が点々と生えている草原。無縁塚に近いせいか、どこか物悲しい空気が漂っている。

この辺りには幻想郷の人間はめったに立ち寄らない。せいぜい外から入り込んできた迷い人かそれを狙う妖怪が居るぐらいだろう。

そんな寂しい場所を暢気に歩いている少女が一人。

赤毛を赤い飾りで左右に留めて和装に身を包んでおり、肩にかけた大きな鎌からは彼女が死神であることが見て取れる。

小野塚小町。幻想郷一帯の地域を担当する三途の橋渡しだ。

とても真面目とは言えない職務態度の彼女。今日もサボっているのかと思いきや、少しばかりいつもと事情が異なるようだ。

生き物は死して魂の状態になると彼岸に渡り閻魔の裁きを受ける。その際、成仏するか地獄に落ちるか、それとも冥界に行き転生を待つか、いずれかの判断が下される。

だがそんな彼岸の理を犯す存在が現れた。

己の意思で任意に転生しその行き先を選択する人間。

言葉にすれば単純だが、これは魂の行く末を管理する者達にとっては重大な問題であった。当然、彼岸で裁判を執り行っている司法集団、是非曲直庁は対処に当たろうとしたのだが……。悲しいかな、そこは人員不足に苦しむ役所組織。転生先の調査等、遅々として進んでいなかった。

小町は上司である閻魔の心労を少しでも和らげようと、その人間が幻想郷に来てはいないか確かめているのであった。もつとも、閻魔の心労の内いくらかは、小町自身にも原因があったのだが。

「ふーん、不正転生者ねえ。越境者の仲間か何かかしら？ 色々バリエーションがあるのね」

呆れ気味な声の幽香。彼女がここで小町と出会ったのは偶然……という訳ではない。

紫に「面白いことが起きるかも」と言われて、特に予定もなかったので足を運んでみたという次第である。

「で、貴方はサボるついでにその人間を捜していると」

「人聞きが悪いことを言わないで欲しいね。捜すついでにサボってるんだ……いやいや、サボってなんかいないよ」

無縁塚は外来人の遺体が埋葬されているせいか、外と幻想郷との境界が曖昧になっている。そのため仮に侵入して来るのなら、一番可能性が高いのはここだろうと当たりを付けていたのだ。

小町の予想は的中していた。

河原にたたずむ男。白のシャツに黒のズボンとジャケットを着て、両の目は黒髪で隠されていた。そのニタニタと笑う口元からは、生理的な嫌悪の情を感じさせる。

こんな所に外来人が一人で居るなど普通ではない。

「あんた、名は何ていうんだい？」

「……そんなものは捨てた。後でまたゆっくり考えるさ」

「あー、そうやって人生を好きにやり直そうって腹だろっけど、悪
いが後なんてない。ついて来てもらっよ」

そこまで小町が言うと、無名の男はわざとらしく肩をすくめて嘆
いてみせた。

「それがここのルールって訳か。何処に行ってもルール、ルールと、
本当に下らんな」

手に握られているのは黒い金属筒。

現実、幻想入り乱れるこの地にて、魂の在り様を賭した戦いが始
まろうとしていた。

背の低い草むらの上を、一定の距離を置いて二人の少女が翔け抜
けていく。
対怪物用に開発された大型拳銃。その大口径の銃弾が彼女達を襲
う。

男はただ自由に転生できるというだけで争い事を始めるほど愚か
ではなかった。

『武器を創り出す程度の能力』

瞬時に好きな武器を創出して使いこなしていく。まさに歩く凶器のような人間だ。

空を飛ばれては拳銃では埒が明かないと判断したのか、すぐさま次の武器を頭に思い浮かべて形作る。

三つの金属筒を束ねた巨大な砲身。回ガトリング転式機関砲とも呼ばれるそれは、とても個人が携帯するような物ではない。

しかし、これも能力による副次効果なのか、男は強化された腕力によって片手で軽々と持ち上げると、何の躊躇いもなく発射した。

（後先考えず無茶苦茶なことするわね……）

回転式機関砲の重低音の駆動音が鳴り響く中、幽香は日傘を開いて小町の前方を飛んでいる。

対弾仕様の傘が軋みを上げながら鉄の嵐を弾く。

小町の距離を操る能力を使えば銃火器を扱う相手にも容易に接近できるだろう。だがあの男は無闇矢鱈に弾をばら撒く上に異常な反応速度を持っている。さらに他に何か隠し球があることも考慮すると、おいそれと接近することはできなかった。

自分と幽香の位置を能力で小刻みに移動させることで回避行動を補助する小町。そんな彼女に、盾となってくれている幽香が前を向いたまま話しかけてきた。

「私がアレの気と弾幕を引き付けるから、隙ができたら近寄ってあの鉄屑を押さえなさい」

激しい銃声にもかかわらずはつきりと伝わってくる。声に一切の迷いは感じられない。

「正氣かい？ そう時間はかからないだろうけど……。一人であれに耐えることになるよ」

すると少し間を置いた後、一瞬だけ視線を送って、

「あら、何か問題でも？」

事も無げに言う妖怪を見て、死神も腹をくくるのだった。

無事転生に成功したものの、いきなり面倒な連中に絡まれてしまった。

そんなことを考えているこの無名の男、彼が幻想郷を転生先に選んだことに、これといった理由はなかった。強いて言うなら、文明が遅れている世界の方が好きに暴れることができ束縛され難い、といったところか。

（この先も似たような奴が出てくると面倒だ。……いつそのこと街を見つけて気化爆弾でも落としてやるか）

見せしめにすれば逆らう者もいなくなるだろう。

そんなおぞましい事を本気で検討し始める。自身の生を軽んじる人間が、他人の生を尊重できるはずがなかった。

不意に、空を飛び回っていた少女の片割れが真っ直ぐとこちらに向かって来た。

「馬鹿が……。近代兵器を甘く見たな」

残弾が心許なくなつた機関砲を投げ捨て、新たな凶器を創る。見た目は機関銃、しかしその極太の筒から出てくる物は40ミリの擲弾。

毎分三百発の速度で放たれる爆風が少女の日傘を襲い、飛び散つた金属片が足や肩、顔を打ち付ける。流れ弾は地上に着弾し、草原や小川の土手を掘り起こしていく。

だが、止まらない。

暴風の真つ只中、煙を纏い敵を見据え、悠然と突き進む。

そして男に生じたわずかな気後れ……。それだけで彼女にとっては十分だった。

振り返って目にしたのは、高速で回る鎌。

突風 「死出の風」が男の擲弾銃を切り刻む。

「輪廻の輪に手をつ込んで、無理やり覆そうなんてね。不死者以上の大罪だよ」

時を与えず、靈力を込めた投銭で追い打ちをかける小町。男は距離を取るため走りながら銃器を形成しようとするも、弾幕で力の集中を乱される。

「ふざけるな。他人が勝手に決めたルールに、従う義務があるものか！ 何様のつもりだ！」

それでも強引に短機関銃を創造すると自身を追って来る死神に銃口を向けた。

転生のシステムにおいても例外は存在する。

閻魔の下で労働に従事する代わりに子孫の肉体への転生を繰り返す、短い生の中で幻想郷の妖怪を、この土地を後の世に伝えてきた少女。

親しい者と幾度となく死に別れてきた彼女の精神は摩耗し続け、しかし未だ自身の命運に屈することはない。

その心中とは……………。

至近距離で火を噴く銃にも怯むことなく、小町は低空を飛び強化された男の走力にぴったりと付いていく。

「くそっ！　こんなはずじゃない……こんな世界に来たかった訳じゃない……」

当初の目論見は外れた。黙って蹂躪される弱者も、言いなりになる人形も、ここには存在しなかった。

否、本当はそんな都合のいい世界はどこにもないのだ。

鉛の弾が小町の服を傷つけ、腕を撃ちぬき頬をかすめる。付かず離れず、逃げる男に追う死神。

「あんたには、四季様の説教ももつたいない」

魂符「生魂流離の鎌」

霊力が鎌に宿って先鋭なる刃と成し、同時に距離を一気に縮める。

「こんな能力があるから、こんなことに……。好きでこうなったんじゃない！　俺は被害者だ！」

己の力を今更ながらに後悔する。けれども人の一生、リセットす

ることなどではしない。

「そいつは災難だったね……。けど、地獄行きだ」

彼岸回帰の鎌が振るわれる。

「いやー、ぶつつけ本番の連携だったけど何とかなるもんだねー」

さっきまでとは打って変わって、あっけらかんと笑う小町。

側には無名の男の魂。彼女の死神としての能力が働いているのか、それともこの状態では転生できないのか、逃げようとする気配はなかった。

「はあ……。貴方の能力に合わせるのは疲れるわ。やっぱり私はレティと一緒にが一番ね」
「あらら」

寂れていた大地は爆発で耕され、悪い意味で賑やかになってしまった。

「にしても、貴方がお迎えの死神でない理由がなんとなく分かったわ」

「ん？」

「サボリ癖もあるんだろうけど。何より少し、情が濃過ぎる」

だがそれは、幽香にとって決して好ましくないことではなかった。

人里で最も大きな屋敷といえば大半の人間がここ稗田邸の名を挙げるだろう。

妖怪について書き記した幻想郷縁起を長きにわたって編纂してきた一族。人里の政を仕切っているのが里長なら、情報を仕切っているのが稗田といえる。

屋敷の中、様々な書物が棚や机に並べられている当主の私室。空に宵闇の訪れた頃、その襖が開かれた。

「ちょっと失礼しますよ」

当主、稗田阿求を訪ねてきたのは八雲紫である。

「こんばんは。今日はまたどのような用件で？」

「先日、里で騒ぎがあったでしょう。それで様子を見に来たのです」

「ああ、それなら心配は御無用ですよ。見ての通り、ここに危害は及びませんでしたから」

あの事件、妖怪の賢者なら事前に防げたかもしれない。しかし、
『里で可能なことは里で対処する』ということに大きな意義がある。

「それに、いざとなったら強いお友達が助けてくれますしね」

そう言って悪戯っぽく笑う頭に花飾りを付けた少女。

彼女は平和になった幻想郷で多くの妖怪達と出会い、親交を結んでいる。長い寿命のため、自分が次に生まれ変わっても変わらない姿でいる友人。その存在は阿求にとって大きな支えになっている。

だが紫は彼女と向き合う度にいつも思う。

（本当に強いのは、どちらなのかしらね……）

十話 魂移ろう先（後書き）

小町は鈴仙に波長が短いと言われているため、ああ見えて熱い性格なんだろうね。

上司に似て説教好きなのもあるし。

十一話 妖怪と妖精と

秋も半ば、太陽の畑を彩っていた住人達も一部の秋向日葵を除くと、次代に命を託してその役目を終えていた。

幽香は毎年四季の花を求めて季節ごとに住居を移している。

だが今年は紫の勧めもあって太陽の畑に留まっていた。隣の、メデイスンのことも気になるし。

ところでそのメデイスンだが、彼女は今、幽香の家から小道を挟んだ向こうの草原、空の上で弾幕ごっこに興じていた。

相手は氷の羽を持つ氷の妖精チルノ。花の異変で出会って以降、二人はたまにつるむようになっていた。

青空を旋回しながらメデイスンが放つ色とりどりの弾幕。

それを氷弾で相殺し、近くに迫って来たものは諸手に握った氷剣、ソードフリーザーで叩き落としていくチルノ。その姿、意外に様になっている。

しかし弾幕の一つ、妙に色が濃い光弾を斬りつけると、中から毒々しい色合いの靄が噴き出した。

「うぎゃあああー！ ペツ、ペツ！」

毒人形の十八番、神経毒。通常弾の中にいくつか罌として紛れ込ませていたのだ。

この機を逃さずメデイスンはスペルカードを手に掲げた。

毒符「ポイズンブレス」

毒の靄と供に大量の光弾を渦のように撃ち出しながら突っ込んでいく。

至近距離で毒を浴び、体の動きと感覚を封じられていたチルノだが、相手の接近に感じて素早く体勢を立て直す。

彼女を妖精最強たらしめるもの。それは妖怪に準じた強力な能力ともう一つ、積み重ねられてきた豊富な戦闘経験である。体と羽から放出された冷気が外気を漂う。

雪符「ダイヤモンドブリザード」

吹雪のように、周囲が氷の結晶で覆い尽くされた。

「くっそー！ 負けたーっ！」

地面に仰向けに寝転んで悔しがるチルノ。結局弾幕を避け切れずに先に被弾したのは彼女の方だった。

「じゃあ約束通り、私の人形解放計画の手伝いをしてもらっわよ」

「いいけど……。何すんのさ」
「ふっふっふ」

そう聞かれて、待つてましたとばかりにガラスの小瓶を取り出すメデイスン。中には淡い色の液体が詰まっている。

「手始めに、永琳に教えてもらったこの薬。これの効果をあんだで証明してやるのよ」

彼女は永遠亭の薬師、八意永琳と交流を持っていた。

毒と薬は表裏一体。毒を操る能力を持つ身としてはそこで学ぶことも多いだろう。……本来の彼女の目的からはズレてるような気がしなくもないが。

「面白そうじゃない。このあたいが、薬なんかで倒されるなんて思わないことね！」

「倒したら薬の意味ないじゃないのーーーーー！」

幻想郷における問題解決方法、スペルカード戦。騒乱の抑止という面を持つこの決闘ルールにおいて、人間、神、妖怪、そして妖精が種族の区別なく混ざって互いに競い合っていた。

弾幕ごっことはスペルカード戦の中の一形態なのである。

『スペルカードを見ればその人となり分かる』

そのような言葉があるぐらい、スペルや弾幕には扱う者の個性がよく表れていた。

それもそのはず、元々持っている攻撃手段に名前を付けた物をス

ペルカードと呼んでいるのだ。当然ながら、カード自体はただの紙切れにすぎない。

わいわいと騒ぎながら去っていく人形妖怪と氷精。

すると、テラスで紅茶を飲みながら観戦していた幽香が後ろを向いて声を掛けた。

「もう行つたわよ」

「ええ、そうね」

ついさっきまで誰もいなかった庭の端に、レティがポツンと立っていた。

「いまいちよく分からないのよねえ。どうして避けようとするのか。あの氷精、太陽みたいな子だけど、冬にも日の光は必要なんじゃないかしら？」

「……煩わしいのよ。妖精なのに、いちいち冬の妖怪に張り合おうとして」

「それは、貴方に構って欲しいんじゃないの」
「……………」

そんなことは分かっている。と言いたげなレティの横顔に、幽香がそれ以上口を出すことはなかった。

九天の滝。荘厳な滝が流れ、険しい崖の横穴に天狗用の詰所などが設けられているこは、妖怪の樹海と共に、山を天然の要害に仕立て上げていた。

その崖の上にある小さなスペースを利用した屋外休憩所で、椅子に腰掛けた文が思案にふけっている。

先の武装集団の侵入を受けて、山の首脳部が命じたのは情報収集と警備体制の強化だった。山の対応が受動的なのは当然のことなので、この決定はある程度予想していたことだ。

重要なのは、その命令とは別に山のトップである天魔が射命丸文に下した指示。

山の外部における独自の調査と他勢力との接触……。

それは幻想郷内の山以外の勢力が戦闘状態に入った際、文個人の判断で介入、共闘できることをも含んでいた。

一見、彼女がいつもやっていることの延長のように思えるが、いざ、事が起こった時に上の許可があるかないかでは行動の幅に大きな差が生じてくる。組織単位、部隊単位では他の勢力を刺激しかないし、小回りが利かないという理由もあって、文のような者がこの任に選ばれたのだ。

天魔は慎重さを要する案件に対し、部下に広い裁量を与えて解決に当たらせる、といった手法をしばしば取る男であった。

それにしても気になるのは侵入者達の目的だ。今のところ、情報

収集のために山に入っただのではないかと推測されている。

しかし、仮にこちらのことを知った上でやって来たのだとすると、外来人が目当てにしそうなものといえば、やはり河童の技術だろう。とはいえ、あの山の神でさえ河童達の協力を得るのに結構な尽力を要した。宴席を設けたり、計画について車座となつて対談したりといったように。その甲斐あつて間欠泉地下センターの建設に漕ぎ着けたのだ。

山に押し入ったところで彼らの思い通りにはならないだろう。銃をちらつかせているなら尚更だ。

文が陶製の器に入った果実酒を転がしていると、休憩所に白狼天狗がゆつくりと降り立ってきた。彼女、椋のその顔には生気が抜けしており、目の焦点もはつきりしていないように見える。何事かと文が首を傾げていると、彼女は静かに口を開いた。

「……私の隊が……解隊されていたのですが」

「ああ、そのことね」

すると文は合点がいったとばかりに頷く。

「貴方には私と同じように、山の外部での単独調査の任が下ることになってるのよ。……手が欲しかったから私が天魔様に進言したんだけど」

途端に、青かった椋の顔色が変わる。

「……信じられない。信っじられないっ!」

怒りを押さえられない棍を、扇で口元を隠しながら宥めようとする文。

「まあまあ、ワンマンアーミーみたいでかっこいいじゃないの」「うっがあーーーーー!」

哀れ、数週間の大長職。

天魔とは目的のためなら犠牲を厭わない男でもあった。

十一話 妖怪と妖精と（後書き）

書籍を見る限り河童の協力を得るのは骨が折れそうですね。邪なこ
となら特に。

それに山自体排他的な上、天狗と神奈子が引き入れてるし。

十二話 鈍色侵食す

太陽が遠く常に薄暗い中空。大地からは緑の息吹もあまり感じることができない。

ここは結界の狭間。幻想郷と外の世界の中間に位置する空間だ。そんな荒涼たる地の大岩に妖怪の少女が片膝を立てて座っている。子供のように小さな体だが、頭に生えた二本の角は彼女が妖怪の中の妖怪、鬼であることを物語っている。彼女の名は伊吹萃香。かつて山の四天王と呼ばれた一人である。

鬼は強大な妖力と怪力を誇る種族だが、妖怪の山の組織体制を構築したり、優れた土木技術を保有していたりと、智に長けた側面も持つ。

「すみませんね、わざわざ手を貸して頂いて」
「ん？ いや、それはいいんだけどさ」

岩の下から聞こえてくる声の主は九つの尾を持つ金毛の妖獣、八雲藍。八雲紫の式神である。

二人の周りには三十を数える妖怪が横たわっている。紫の古い友人である萃香は、藍に協力してこの不躰な訪問者達をもてなしていたのだ。

実はこの少し前、萃香は文からの酒の誘いを断っていた。

鬼はかつての上司ということもあり、現在の山の妖怪からは腫れ物に触るような扱いを受けている。しかし、そんなことはどこ吹く風と、天狗の文は鬼の萃香と親しくしていた。今回のように自分から誘うことも珍しくない。

そんな彼女のことを萃香は豪胆な奴だと評し、内心では可愛く思っていた。

「何か気になることでも？」

「ああ。こいつらのことなんだが……」

地に伏している者達、硬質で灰色の体に灰色の翼、大きな嘴と黄色に光る目を持っている。長い時を生きてきた萃香でも初めて見る妖怪だったが、彼女が違和感を覚えたのはそこではない。

「人間から変じた類の妖怪だと思うんだが、その割には”個”が感じられなくてね」

「……言われてみれば、そうですね」

「これじゃあまるで一山いくらの作り物だよ」

会話の間にも、その息絶えた妖怪達の体は少しずつ塵になっていき、やがては始めから存在していなかったかのように消え去ってしまった。

紅魔館南方に位置するそこそこ大きな広葉樹林。時節柄、様々な自然の味覚が実っている。

幽香は修理のためパチュリーに預けていた日傘を受け取るうと、

この近くの空を通りかかろうとしていたのだが。

「何だか野焼きでも始めそうな勢いねえ」

一緒についてきたレティの言う通り、森の奥から無数の気配が感じられた。おそらくは妖怪だろうと、かろうじて漂ってきた妖力から判断する。

そして二人の右斜め前、森の入口付近に立っているのは、今まさに目指している館の主。

「今日は一人？ メイドも連れずに」

「ああ、あんた達ね。……一人で散歩したい気分だったのよ。なんとなく」

そう言いながら二人がレミリアの隣に降り立つと同時に、息を潜めていた気配も動き始める。

木が揺れ、空気は張り詰め、鳥達が空に向かって逃げて行く。よくもまあ、これだけの数が隠れていたものだ。

「さて、この吸血鬼を伏撃しようっていうんだ。さぞかし面白いものが見れるんだろうね」

そこかしこに生えている枝葉を気にせず、レミリアは翼を広げ、日光を遮る日傘を差したまま器用に森の中を飛び回る。

地上からの攻撃をかわし、急降下すると紅い球状の光を放り投げ、まとまっていた敵を地面ごと吹き飛ばした。

空に上がり追撃しようとする者もいたが、天狗にも匹敵する吸血鬼の飛行速度には敵わないようだ。

木々の間から垣間見える敵……全身灰色で背に翼を生やしている。三人は知る由もないが、藍と萃香が討ち果たした妖怪と同じ姿をしていた。

上はあのせつかちなお嬢様だけで十分だろうと、残った幽香とレティは地の上で迎え撃つ。

初めて目にする妖怪に興味を抱きながらも、幽香が前方多方向に弾を放ち敵を釘付けに、続いて彼女の後方から白色の光弾が飛び、止めを刺していく。

「こんな場所で待ち伏せしてたくせに、戦い方はなっていないのね。山の妖怪の方がずっと嫌らしく動いてくれるわよ」

戦闘中にも敵の展開に注視していた幽香が不満を漏らす。実際の妖怪達はいして地の利を生かすこともなく、単調な力押しばかり。正面からやって来ては、両の掌から光弾やレーザーをひたすら撃つ。

しかし彼らは数を頼りに列を成して、仲間の屍を踏み越えて射撃を続ける。

途切れることのない砲火の前に立ち、手刀を振って弾を弾き返す幽香。宙に動くその腕は唸りを上げて大気を震わせる。弾けないレーザーに対してはレーザーをぶつけて軌道を反らす。

手練手管を以て敵の攻勢を防いでいたが、背中から急激な妖力の高まりを感じ空に飛び退いた。

直後、寒気に包まれた氷弾が一直線に飛んでいき、妖怪の戦列上空で爆ぜた。

寒符「リングリングコールド」

破裂した大弾に込められていたものは大量の子弹。氷と妖力の礫が雨あられと降り注ぎ、地にいる者をなぎ倒していった。

「ふむ、冬でもないのになかなかの出力ね」

付近に動いている敵の姿はない。皆裂傷で倒れるか、体を氷結させてしまったからだ。

冬の妖怪の作りだした惨状を観察していると、その彼女が提案をしてくる。

「かばってくれるのは助かるけど、服の袖がボロボロじゃないの。先は長そうだから代わってあげましょうか？」

「結構よ。これはこれで楽しいしね。それに、雪の女王に傷をつけさせるわけにはいきませんから」

「あらそう。それじゃあもつと働いてもらいましょうか」

遠くの方では再び攻撃態勢に入ったのか、灰色の軍勢が第二波を繰り出そうとしていた。

レミリア達が未知の妖怪と衝突する少し前。彼女達の戦場とは別の森に、別の集団が豊かな自然に紛れて潜んでいた。恰好から分かることは、彼らが統率された兵士であること。一番多く見られのはこの国の人間だが、異国人の数も少なくない。

薄暗く広い森林とはいえ、百人以上の人間の集まりなどあつという間にその存在を知られてしまうだろう。

偽装を解き、作戦の発動を間近に控えた彼らの標的……それは奇しくも、かつて僚友達が迷い込んだ紅の館であつた。

緑の天幕が連なる陣の外れ、本隊から離れた場所に小さなテントがある。その下の地面には穴が掘られ臨時の弾薬保管庫になっていた。警備に当たっているのは入隊して間もない二等兵。それほど熱心な勤務態度ではなかった彼だが、さすがにこの時ばかりは不運だとしか言いようがなかった。

「このガキ……どこから入って来やがつた！ 何モンだ！」

少し目を離れた隙に、共に警備に就いていた同僚は消えており、代わりにテントの中にいたのは一人の少女。陣地の外周は味方が念

入りに固めているため、こんな所に忍び込む者がいるとは信じられなかった。

「ほう、これは驚いた。この地霊殿の真の支配者、こいしちゃんを知らないとは。無知な人間がいたものだねえ」

「んなこと知るか！ それより、その手に持つてる物、そいつをこちに寄せせ！」

こいしが握っていたのは、レモンのように丸みを帯びた濃緑の物体。端には金属製の輪っかが付いている。

「これ？ そういえばこれってどうやって使うの？」

「使わんでいい！ ピンに手をかけるな！ 抜こうとするなあ！」

目を極限まで開いた必死な形相での説得。そんな男の姿にこいしも何か感じるものがあつたのだろう。

「うん、分かった！」

彼女の顔に浮かんだのは満面の笑み。そこには邪気や悪意は一切存在しなかった。

（あ……こいつは分かってるけど分かってない顔ですね。たまげたなあ……）

「第三貯蔵庫が、爆破された、だと……」

陣地の中央に位置する指揮所。出撃命令を下そうとしていた中隊長に凶報がもたらされた。

不幸中の幸いか、被害に遭ったのは比較的小規模な貯蔵庫だったので、今すぐに弾薬不足になるという訳ではない。しかし、今後の作戦のことを考えると十分な量が残っているとも言えなかった。

「やむを得ん。……アレを投入する」

「まさか、あの新型ですか！？　しかしあのような得体の知れない技術が用いられた兵器など……」

黙考の末の決断に副官が異を唱えるのだが、もはや背に腹は代えられなかった。

「上の命令でわざわざ持たされたんだ。今使わんで何時使う」

指揮所の隣、開けた空間に大型の仮設テント。その中に、巨大な鉄の塊が静かに鎮座していた。

十三話 虹霓の翼

弾幕が舞い、爆音轟く森の中。地には多数の窪みができていた。どこか遠くの高台を占拠しているであろう敵が、幽香達に向かって砲撃を加え始めたのだ。狙いは粗いが大型、高威力の光弾により地形が変容していく。

空で暴れていたレミリアは、戦いの巻き添えでできた倒木を盾に一息ついて二人に合流した。

「やはりこいつらは時間稼ぎの駒だったようだ」

彼女は紅魔館に残してきた分身の蝙蝠を通じ、あちらの状況を察知していたのだ。

「本命はあなたの家かしら？」

「……………」

「私達に任せて戻ってもいいのよ？ 一人なら多分振り切れるでしょう」

「……………その必要はないよ。紅魔館の者達は優秀だ」

そう言つと倒木から身を乗り出し真紅の光弾を撃つ。すると避ける間もなく、迂闊に出た灰色の体が腹を打ちつけ宙に跳ねた。

「どっちにしろ、早くどうにかしないとねえ。秋の神がこんなところを見たら、鍬を担いで襲つて来るわよ」

すぐ傍に生えている大樹の周りでは、せっかく実った果実が土の上にはぐちまけられている。

光弾を釣瓶打ちする妖怪の列に、弓なりに飛翔する砲撃。この不毛な自然破壊は今しばらく続きそうだ。

紅魔館の門を守る門番と妖精メイド達。常日頃は外で侵入者を追い払おうとする彼女達が、門壁に籠つての防衛戦を余儀なくされていた。以前に見た、まだら模様の軍服を着た兵士が大挙して攻めてきたのだ。

昼間にこれだけの人間が動けば、さすがに気付かれるのも早い。メイド長の咲夜自らメイドを率いて迎撃に出ていた。

だが相手は積極的に門を抜こうとはせず、遠巻きから銃火器による濃密な弾幕を作るばかりであった。

一方、咲夜も時間を止める能力で敵中に斬り込むような真似は控えて、距離を保ったままナイフの投擲で確実に仕留めている。

乱戦における流れ弾を警戒しているためなのだが、それ以上に厄介な事があった。

八つの車輪を持つ鉄の車が、メイド達の光弾やナイフをはね除けながら、兵達の先頭に立っていたのだ。車体の上には大型の機関銃が据えられており、メイドが隠れている門壁の上部に大量の弾をお見舞いしている。

「あれに突破されたら面倒ね……美鈴」
「はい！」

度重なる銃撃で瓦礫と化した門扉を弾除けにしていた美鈴だったが、咲夜の言葉を受けると腰を落とした低姿勢のまま目標を定める。気を操り体内の妖力から、地脈から力を集め凝縮していく。色鮮やかな光を湛える彼女の両手。

「ハアアアッ！」

放たれたのは巨大な球状の気、星脈弾。地を這うように直進し、八輪車の片側、半分のタイヤを弾き飛ばした。足をやられてその場に攔座する暗緑色の車体。しかし、動きを止めるというそう激しく、狂ったように鉛の弾を吐き出し続けた。

けたたましい銃声に、時折混ざる耳をつんざくような爆音が館の中まで鳴り響く。

紅魔館正面玄関手前の大ホールにて、浮足立った居残り組のメイド達が輪になっていた。そこには咲夜に留守を任された茶髪の大妖精も。

「副長ー、私達はどうすればいいの？」
「ど、どうするったって……うー……ん。……妹様。そうよ！妹様をお守りするのよ！さっそく地下に……」

「あー」

おずおずと声を上げたのは地下の警備を担当していたメイドの人。

「さっき部屋を見てみたら、もぬけの殻だったんだけど……」
「……………はい？」

この非常時に自室から消えていたフランドール。彼女の行き先は紅魔館で最も天に近い場所、機械仕掛けの針が働く時計台。その屋根にちょこんと座り、下に広がる弾幕の光芒を眺めている。

咲夜と美鈴は敵を食い止めるので手一杯。パチュリーと小悪魔は魔法で館自体を守っている。そしてあいつは今ここにいない……。私が行って盤上を動かしてやろう。

そう思い、眼下の戦場に降りようとするのだが。

「？……………何か、来る」

向きを変え、雲が垂れ込む空に飛び立っていく。

フランドールはその空飛ぶ機械を見たことがなかった。

もしかしたらパチュリーの本に載っていたのかもしれないが、少なくとも実物を見るのは初めてだった。

重厚な漆黒の巨体。頭上には四枚の板状の翼が高速で回転しており、胴体の両側面から伸びる短翼には円形の箱と四つの筒を一まとめにした物体を吊り下げている。

ヒュンヒュンと風切音を立てて向かって来る機械の鳥に、吸血鬼は弾幕を並べて出迎えようとするのだった。

「“ハンター” 装甲ヘリ、交戦を開始しました」
「うむ……」

隊の後方、入念に偽装を施した中隊本部からの指令によって作戦は次の段階に移行し、空から一気に敵を叩こうとしていた。

毒を持って毒を制すの言葉通り、あの洋館にいた”羽付き”は例の連中が相手をしている。しかし、似たようなのが本当にもう一体居たとは。

耳の痛い情報ばかりが的確なことに憂鬱な気分になる中隊長。

（あの新型が負けるとは思えんが、それでも地上部隊の損害は馬鹿にならないだろう。組織にとっては兵も単なる捨て駒か……）

戦局も佳境を迎える中、事情を知らない部下達に指揮官として罪悪感を感じているのだった。

霧の湖上空にて、七色の光弾が黒の機械鳥　ハンターに襲いかかる。上下左右から、着弾するタイミングがずれるよう光弾の動きを操るフランドールだが、的に進路を変えるそぶりはない。

そして命中した瞬間、合金製の体は鈍い音を鳴らただけで、いとも簡単に弾幕を弾いてしまった。

「避けようもしないなんて、つまらないわね」

悪態をつきながらも、妖力を高めて新たな弾を形成しようとする。スペルカード戦以外の戦いをほとんど経験したことがなかった彼女は、この時能力を使って破壊することを咄嗟には思い付かなかった。

吸血鬼の攻撃をものもしないハンターだったが、次の手を打た

れる前に反撃に移った。

短翼にぶら下がっている円形の箱、そこから細長い棒が吐き出されて、煙の尾を引きながら敵を目掛けて迫っていく。

フランドールは高速で横にスライドしてそれをかわす。さらに四発、続けざまに発射されるが、空中で身を翻しながら回避して前方に向け突進していった。

彼女の遙か後ろでは、外れた棒が地面に当たり派手に爆発するのが見える。威力はともかく数はお話にならない。そう踏んで数瞬の内に敵との距離を詰めた。

そして大気中への妖力の解放。

禁忌「カゴメカゴメ」

光り輝く緑弾が、黒の体躯を籠目状に囲い込んで静止する。一人なら抜け出せそうな空間はあるが、この機械の巨体では無理がある。

完全に退路を断った後、獲物を押し潰さんと一斉に動き出す緑の檻。

だが閉じ込められたのは無力な獲物ではなかった。

押し寄せる大量の緑弾に対し、ハンターは正面から突破を図る。

金属が軋む不快な音が響き、装甲が傷付き、へこみ、遂には強引に脱出を果たした。

フランドールは油断せずに追撃の準備を終えていた。しかし彼女の弾幕よりも早く、機械鳥の口元が光を発する。

「！　ぐああああっ！」

機首下に搭載された一本の砲身。そこから怒涛のごとく押し寄せる砲弾。

魔法による防護障壁の上から腕と胴をかすめていった。

「っ、速い……弾を、持つてるじゃない……」

ぐらつきながら呻きを上げる小さな体。

吸血鬼はこの程度では倒れはしない。負傷した箇所がすぐさま再生能力で癒え始めるが。

「があっ！」

突っ込んできた黒い巨体が、そのままフランドールにぶつかった。

ハンターの機首、コクピットの手前に少女がへばりついている。だが飛行速度を緩めるそぶりは見えない。

「このまま下に叩きつけてくれる！」

後席で機体を操っている機長がそう叫ぶ。この地の生物を外見で

判断してはいけないことは、これまでの戦闘で嫌というほど身に染みていた。

ぐんぐんと湖の中心部目掛けて機を加速させる。湖底に沈めてこの吸血鬼の墓場とするために。

激しい風圧を浴びながら、フランドールは過去に想いを馳せていた。

495年間、自らの意思で閉じ籠っていたとはいえ、もっと外を見ておけば良かっただろうか……。今になってなんとなくもつたいたいと思うてしまう。

薄れゆく意識の中を占めていたのはお菓子を作ってくれる咲夜でも、遊び相手の美鈴やこいしでもなく、困ったように笑う姉の顔だった……。

瞳に、右手に紅が灯る。

「レーヴァ……ティン」

突如湧き上がった紅蓮の炎。

コクピットの眼前で振るわれ、四枚組の鉄の翼を薙ぎ払う。

「メ、メインローター大破ッ！」

「補助エンジンに切り替える！ 急速離脱！」

前席の射撃手が上げた絶叫に、緊急用のジェットエンジンを作動させた。一時は失速した漆黒の機体が火を吐きながら、回転翼機ではありえない速度を以て空に翔け上がっていく。

しかしそれをたやすく抜き去り、天高くに陣取るフランドール。彼女は天上に背を向け両翼を一杯に伸ばした。美しい宝石の翼が、

風にゆらめき虹色に煌めく。肩上に構えるのは燃え盛る炎の剣。刹那の間の後、宙を蹴り、逆落としに翔け地を目指す。そして天に猛進するハンターと交差する間際

「コンティニュー、出来るものならやってみるおおおお！」

炎剣の一閃が、鋼を切り裂く。

「妹様！ フランドール様あーーーーー！」

大地の上で炎上する回転翼機の残骸。重厚だった胴体は中ほどから真つ二つになり、所々で火花がほとばしっている。

その手前では遅れて地に下りたフランドールが、慌てて飛んで来る門番とメイド長に無言で目を向けていた。既に館を攻めていた敵も退いており、後に残っているのは散乱した薬莢と疲れ果てたメイドばかり。

「つ、強いからって、無茶しないでくださいよ……ぐっ、うつつ」

「ほら、お召し物がボロボロじゃないですか。早く部屋に戻ってお着替えしましょう」

感極まって、目や鼻から色々な液体を流す美鈴と、こんな時にもマイペースな咲夜。二人を見ていると毒気を抜かれて、せつかくの戦いの余韻も台無しだ。

そんなことを考えながらも、フランドールは心地よい疲労感に身を委ねていった。

十四話 疑念（前書き）

このSSに登場するものは実在の人物・団体とは一切関係ありません。

十四話 疑念

紅魔館の南、曇天の空を行く人型が三つ。先頭を進むのは洋服のあちこちに戦いの傷跡を残しているレミリアだ。

戦いの途中、太陽が雲で隠れてから、日傘を手放した彼女は高台で砲撃を仕掛けていた敵の群れを一息で制圧してしまった。上空から不意を突いた、光弾による爆撃は圧巻の一言。

そこから先は特に苦もなく事態が進み、結局敵の妖怪の正体が分からないまま決着がついたのだ。

（余計な手間をかけさせる……）

最初は幽香達の手前余裕を見せていたが、やはり内心では気が急いでいたレミリアであった。

自身の城に帰り着いたレミリアの目に最初に飛び込んできたもの。それは穴だらけの門壁と原形の面影もない門扉。掘り返された土が敷地の内外に広がり、被害は庭園にまで達している。

「これはまた派手な模様替えだこと。いっそ、全部花畑にしてみない？」

「本館が無事ならそれでいいわ。パチエ達が上手くやってくれたんでしょ」

他愛もない軽口を流しながら、今朝までは門だった物体の上を通り過ぎていくレミリア。後に続くとする幽香だったが……。

「……………」

「湖が気になるのかしら？」

「いいえ、別にー」

さっきから妙に視線が落ち着かない様子のレティがそう指摘されると、いつものような調子に戻り、すたすたと先に行ってしまった。

「ようやくお嬢様のお帰りね」

正面エントランスの先、館の主の帰りを待っていたのは七曜の魔女。彼女が図書館から出てこんな所にいるということは、それなりの重大事が起こったのだろう。

「パチエ、何かがあつたことは見れば分かるけど、いったいどうしたのよ？」

「そうね……詳しいことは咲夜から後で聞けばいいとして、差し当たって話しておくことがあるわ」

親友が”魔女として”話していることを察したレミリアは続きを促そうとする。

「なら、さっそく奥で聞こうじゃない。……あんた達も来るでしょう？」

「ん、まあ傘を受け取るついでだしね」

「私はどっちでもいいわよ」

大図書館のすぐ隣、いつの間にやら魔女の研究室と化していた小部屋で、パチュリーが子細を省いた、彼女からしたら手短な弁を振るっている。

目の前のテーブルに置かれているのは焦げ付いた金属の塊。フランドールに撃墜された軍用ヘリコプターの一部である。

「　　といったように、その回転翼機の装甲から魔力が検出されたのよ。効果は耐久性の向上と重量の軽減。これらはそう複雑な術式ではないわ」

三人の聴衆はいずれも魔法の講釈についてきている。

そもそも、魔力、妖力、霊力、神力は扱う者の種族などによってその呼称が変わるだけで、基本的には同質のものと言っている。

とは言え、魔法ほど力を生み出す過程が体系化されているものはないので、やはり魔法を研究していない者が魔法の理論を理解することは難しい。レミリアもフランドールも咲夜も魔法を使えるが、研究者と呼べるかという話が別だ。

これもパチュリーのざっくりとした説明のおかげなのだろう。

「それと、詳しく調べるまで断言はできないのだけれど、機体の欺瞞にも魔法が使われていた可能性がある。あの子が能力で破壊しようとしても、すぐに”目”を見つけることはできなかったでしょうね。」

しかしこちらはあくまで副次的な効果であり、レーダー機器から

の隠蔽が本来期待された効果ではないか、と付け加えた。

「嘘とは言わないけど、俄かには信じ難い話ね」

いつになく親友の仕事が速いことに感心しながらも、レミリアは話を鵜呑みすることができないでいた。

無理もない。

幻想が息絶えつつある外の世界。その外の武器に、幻想に類する術が使われているなど青天の霹靂であろう。

「そうは言うけどねえ。外の世界が絡むと私達ではどうしても調査に限界が出てくるでしょ」

「それもそうか。……………あゝあ、困ったなあ。誰か外に明るい奴がいないかな」

突如白々しく棒読みを始めるレミリア。腕と脚を組み、椅子の背中にもたれ掛かって天井を仰ぐ。メイド長がこの場にいたら、行儀が悪いと窘めているところだ。

すると、数秒ほどして部屋の中に変化が見られた。

パチュリーと向かい合ってる三人の横で、宙にうつすらと線が走る。線はすぐに上下に広がっていき、空間の歪みとなってその場に固定された。

「はいはい、今行きますよ。……………まったく下手な芝居までして」

「だって、ねえ？ どうせさつきから聞いてたんでしょ。私から呼ぶのは癪だし。それに結界にも関係してる話だろうから、あんたが出ない訳にはいかないでしょう？」

「汚い吸血鬼ねえ」

歪みから上半身を覗かせたのは、気だるそうな仕草をする紫だった。

彼女は改めて部屋に居る者達の顔を確認すると、レミリアの求めに応じてゆっくりと口を開く。

「メイソン、という集団をご存じかしら？」

「……まあ、一応外の出身だからそれなりには」

それは欧州における職人達と同業者組合を起源にするとされている。

宗教性、政治性を排しながらも社会に強い影響力を及ぼし得るその組織は、教会勢力との長い対立の歴史を歩んできた。そのことは東欧の吸血鬼たるレミリアも少なからず耳にしていたのだ。

「連中が『この世の神秘に手を伸ばしている』って話か。しかし軍隊を動かしたりなんなり、そこまでいくとしようもない陰謀論じゃないかと思えないね」

「そうね、実際巷で囁かれてることはでたらめばかり。動いてるのもこの国を始めとした一部のロッジ（支部）だけ」

メイソンのロッジは世界中の国や地域に存在しているが、それら全体を統括するような体制がある訳ではない。時に活動の方針や実態も場所によって変わってくるのだ。

そして紫の言う一部の者達の所業とは、神秘の探求とその過程で生まれた副産物。異能の開発、生体兵器の研究に魂のメカニズムの

解明など。

「もしかして、その魂云々には転生なんかも関係してるのかしら？」

「可能性はあるでしょうね」

幽香は何気なく聞いたのだが、これは既に人の領域を大きく超えた行いだった。

そして何より肝心要で、不審点ばかりのことが。

「結界に異常はない。にもかかわらずあれだけの人間を送り込まれるなんて。どこかの邪神の神遊びと言われた方がまだ信憑性があるわ。もつとも、遊ばれてるのは私達も人間達も同じだろうけど」

「……………」

現実と幻想を隔てる結界に囲まれた土地。ここに来る手段は同じように幻想の存在となるか、偶然迷い込むか、あるいは何らかの力で能動的に結界を越えるか。

結界が正常に機能している以上、レミリアの言うように今回の事態は最後のケースに当たるのだろう。だがそれは紫が危惧していた通り、大勢の人間を意図的に”越境”させる技術ないしは力が外の世界に存在することを意味していた。それも越境させる本人に、事前に幻想の存在を認識させる必要もなく。

「あら、もういいの？」

話が終わると、もう聞くことは無いと言わんばかりに幽香が席を

立とうとする。

「これ以上は特に分かることも無さそうだしねえ。だったら、其の位に在らざれば其の政を謀らずってね」

結局疑念は晴れるどころか増すばかりであつた。

しかし、外での情報収集など誰にでもできることではないし、結界が絡む問題であるなら尚更だ。であるならば、結界を管理する紫達に、自分が下手に口を挟んだり文句をつけたりすることはないと、幽香はそう考えたのである。

「魔女さん、傘は直ってるわよね？ 返してもらうつわよ」

「ちよつと待ちなさい。一応説明しておくことがあるから」

彼女に期待されている役割とは、管理でも予防でもなく、”掃除”なのだから。

十四話 疑念（後書き）

外の世界については色々想像が膨らみますね。

少なくとも電子化が何かで紙の類が廃れるぐらいには発達した世界のようですけど。

十五話 月に叢雲 花に風

空に光が散乱し、徐々に明りで覆われていく幻想郷。肌寒い晩秋の冷気の中で、今日も一日が始まるうとしていた。

幻想郷で最も朝が早い場所といえば農業が盛んな人里だろう。

その人里から周囲に伸びる道が何本がある。この地に動力車の類はないが、物資を運搬する荷車が通るためある程度舗装されていた。その内の一つの道に、新品同然になった日傘を手にする幽香が野に咲く花を楽しみながら歩いている。視線の先にあるのは菊、そして少し離れた所には葉牡丹が。これらは厳しい冬にもその彩りを見せてくれる数少ない花達だ。

彼女が何故一人でこんな所をブラブラしているのかというと、それはまだ空が薄暗い時のこと……。

「ちよつと。今何時だと思ってるのよ……」

幽香の家。ベッドの上で上半身を起こした状態で抗議しているのはレティ。半目で、声はいつも以上に勢いが無い。

彼女は中途半端な時期に紫によって呼び出されてから、既に冬が近く、今更北の端の自宅まで戻るのも億劫だという理由で幽香の下に転がり込んでいた。

「今日は空の機嫌も良いみたいだし、里で散歩がてら食事でもしましょよ」

幽香は古株の妖怪にしては珍しく朝型の生活を送っている。それも花好きが高じてのことなのだが、だからといってこんな時間に付き合わされてはたまったものではない。

「嫌よ、まだ日も出てないってのに。それに冬以外は里に行きたくないって前も言ったじゃない」

「冬の妖怪だから？ そのくらい気にするようなことじゃないですよ。」

「……とにかく、氷精のようにはいかないのよ。私はもう少し寝てるわ」

そう言つと寝巻代わりに借りている幽香のシャツを着たまま、再びベッドに潜り込んでしまった。

そんな訳で、幽香は一人時間を潰しているのである。

さて、しばらく道なりに進んでいると大きな建造物が見えてくる。時代を感じさせながらも、どこか洗練された風情のあるそれは命蓮寺。

寺の敷地の外、入口付近には読経しながら清掃活動に励む妖怪がいた。

「おはよう。貴方可愛いわねえ、寺の子かしら」

「へ？ えへへ……。はい！ おはようございます！」

頭に獣の耳を持ち、小さな体に不釣り合いな大きな箒を握っている。山彦の妖怪、幽谷響子だ。種族の性なのか、やたら声が大きい。元気も良い。

「ねえ、これから一緒に里のカフェに行かない？ ケーキでもパフエでも好きな物を食べていいのよ？」

「え……でも掃除がまだ」

「私が手伝ってあげるから、パツパと終わらせた後で、ね？」

「えっ、え」と……」

いきなりのお誘いに、さすがに困惑する響子。

彼女がおろおろしていると、寺の方から助け舟がやって来た。

「ちょっと！ うちの新人を拐かそうとしないでよ！」

「船長か。……残念」

「寺のことはよく知らないんだけど、繁盛してるのかしら？」

「うーん、最近は財宝目当ての人間が目立つねえ」

響子を寺の中に帰した後、幽香と水蜜が話しているのは命蓮寺の入信者のことだ。

寺に近づいてくる者が邪な目的を秘めているか否か、それを見極めているのは毘沙門天の弟子、寅丸星。彼女は聖が封印されてからも、人間の中に混ざって自身の任を果たしていた。そんな複雑な立場に置かれたためか、自然と人を見る目が鍛えられてしまったのだ。本人が望むと望まざるとに拘わらず。

「まあ、里はもともと妖怪との関わりが深いから。貴方達の融和の教えとやらも、今更な話かもね」

幽香はそう言って再び里への道に戻っていった。

人間の里、商業区から若干離れた所に位置する工業区では、朝から金属が打ち合う音が響いている。この区域では大勢の職人が集まって各々の仕事に没頭するのが日常なのだ。現代社会のように時間に厳しく管理されていない幻想郷だが、集団で作業の効率化を図ることはそれほど珍しい発想ではない。

工業区の一隅、開けた土地で作業を行う大工達の中に、ある少年の姿があった。一月前に里で勃発した反乱の首謀者、神夜恭牙である。

しかし、その姿にかつての彼を連想することは困難だろう。長かった銀髪は短く切りそろえられ、生白かった肌は日に焼けている。そしてなにより、触れた者全てに噛みつかんとするような刺々しい雰囲気が消え、労働に汗を流すその顔には清々しい表情が浮かんでいる。

「おつ、今日も頑張ってるみたいだな」

「先輩！」

恭牙に声を掛けてきたのは、青い着流しを着た体格のいい青年。仕事場において、棟梁の代わりによく恭牙の面倒を見ていた先輩大

工だ。ここに來たばかりの、まだ思い上がっていた少年を最初に叱りつけたのも彼だった。

「しかし筋がいいじゃないか。見習いになったばかりだったのに、ホイホイ仕事を覚えたんだからなあ」

「よしてくださいよ。先輩方の指導のおかげじゃないですか」
「ハハハッ！ 嬉しいこと言ってくれるじゃないの」

あの時、少女の刀は少年の虚栄心と自尊心を打ち砕いた。その結果、彼は変わろうとした。

もちろん自身の意志だけでは、短期間の内にここまで変わることはできなかつただろう。大工達の愛情のおかげでもある。

元の世界でも、彼らのような存在がいたら道を踏み外すことはなかつたのだろうか……。

いや、違う。そうではない。

向こうにも、味方は確かにいたのだ。

『世間が諦めても、お前自身が諦めても、俺は絶対に諦めないからな！』

引き籠りがちになった恭牙を立ち直らせようと、何度も家に足を運んできた担任教師。

（綺麗事を言うな！ この偽善者が！）

当時は、そう思っていた。

あの時の自分はなんと愚かで子供だったことか。

もうあの頃に戻ることはできない。今更気付いたところで手遅れかもしれない。
だが今なら言える。

「ありがとうございます」

多くの人で賑わう大通り。両脇には商店が立ち並び、買い物客には妖怪も交じっている。

こちらは里の経済の中心地、商業区。
料亭や食堂など、妖怪も頻繁に利用する外食施設がいくつもあるのだが、一番人気があるのは中央通りに面したカフェだろう。西洋風の外観に、清潔感溢れる洒落た内装。屋外のテラスでは、この日も女性客が憩いの時を過ごしていた。

「そんな訳で、ようやく師匠に売り物の調合の方も任せてもらえるようになったのよ。……ちょっとだけね」

刀を背に差した少女とテラス席で駄弁っている兎耳の少女。足元の大きな籠には製薬に使うのだろうか、採集された桂皮や芍薬が詰

め込まれている。

「けど、これが思ったより難儀でねえ」

「ふーん。でも永遠亭の薬はそれだけ強力だって有名だけどね」

「そうでしょうそうですね！　なにせ素材が同じでも製法が断然優れているの。月の技術による薬用成分の効率的な抽出が」

それにしてもこの兎、調子に乗りやすい。

（まあ、そんなとも可愛らしいんだけどね）

まさしくあばたまえくぼである。

「そう思いつつも、妖夢は鈴仙の膝と膝の狭間に手を滑らせていく。彼女の瞳に当てられた訳ではない。故にこれは狂気ではない。そう、敢えて言うならこれは」

「でたらめなナレーションを入れるのはやめてください！」

「えーっ」

「この間の事といい、二人から何故か邪険にされてる気がするのだけど」

近くの席から持ってきた椅子に腰掛けて、いけしゃあしゃあと不平を言い始める幽香。テーブルの上には、ちゃっかりと注文していた果物入りの餡蜜がある。

幽香はどちらかというと、恐怖を食べるタイプの妖怪に分類され

る。だがそれは、普通の食事によってある程度代用できることでもあった。

もっとも彼女は燃費がとても良い。日の出から日没まで、食事を忘れ花を観賞するだけで終えたこともあるくらいだ。そのため、やれ太陽光を吸収しているのだ、やれ地中から養分を吸い上げているのだ、とんでもない噂が立ったことがある。……完全に否定しきれないのがこの妖怪の恐ろしいところなのだが。

「気配を消して近づいてくるからでしょ。それに、あの異変の時……」

鈴仙の言う異変とは、かつて幻想郷に四季の花が咲き乱れた事件。厳密には異変ではなかったのだが、調査のために多くの人妖が動き、弾幕を交わした。その中にはフラワーマスターと博麗の巫女の姿も。

「何だ、あんたか」

太陽の畑に程近い緑野の上。異変の調査が済んだ巫女が出会ったのは旧知の妖怪だった。

纏っている妖気から穏やかならぬ様子であると分かる。実際、口元ではニコニコしている一方で、目が笑っていないのだ。

「何だとは御挨拶ね。向日葵達に散々流れ弾をプレゼントしてくれて、第一声がそれかしら」

「ん？ 礼なら気を遣わなくてもいいのよ？」

「……………」
「……………」

周りに浮かんでいた陰陽玉と妖弾の群れが一斉に動き出す。

「あの時は懐かしい顔とやりあえて、嬉しくなっつてつい翼まで出しちゃったのよね」
「……………」

しみじみと語る幽香。その時彼女達の暴れ回る光景を遠目で目撃していた妖夢と鈴仙は閉口するばかり。

しかしそんな二人の弾幕ごっこも決着が付く前に、さっきの話（説教）を聞いていなかったのかと、額に青筋を立てた閻魔によって中断させられたという。

「今朝の話もそうだけど、何事も上手くないものよねえ」
「はあ、そうですか」

世の中はままならない。
全くもってその通りである。

十五話 月に叢雲 花に風（後書き）

花映塚のメンバーで話を考えるのは楽しいです。
動かしやすいというのもありますが。

十六話 孤絶して猶進む

山野にひっそりとたたずむ一軒の木造屋敷。辺りには人の、科学の手がほとんど加えられていない。

それは正に日本の原風景。

この地は幻想郷のあらゆる場所と繋がっており、あらゆる場所とも接していない八雲の住処である。

「紅魔館は既に態勢を立て直したようです。やはり魔法技術に長けた者がいると違いますね」

「そう、思ってたより早かったわね」

屋敷の居間では九尾の式が主に現況を報告していた。

「しかし何故紅魔館と山が標的にされたのでしょうか？」

「簡単なことよ。こちらに來た時の痕跡を辿られたのでしょう」

「……なるほど。山の上にはあの神社がありましたね」

結界越えの捕捉。もちろんそれは、言うほど容易なことではない。

「十分な戦力のあるあの二つはともかく、他に手を伸ばされると少々面倒ねえ。萃香の予想も当たっていたようだし」

「は……？」

「人を超え、妖を模倣し、その先はいつたいどこに向かうというのか……」

背の高い樹木が密集し、大量の枝葉が光を遮る。時折聞こえてくるのは、小鳥の囀りと獣の鳴き声。

ここ常闇の森は深部に行くと日中でも薄暗く、人が立ち入るのを躊躇させる雰囲気漂っている。

そんな森の岩壁に小さな洞穴がポツカリと開いていた。入口の周りは木々で覆われていて遠くからでは気付きにくい。

そこに人間、洞穴の土壁を背にして微動だにしない若い男が居る。迷彩柄の服は土や葉で汚れており、着用者によりいつその物々しさを与えている。

先の紅魔館襲撃。男はその作戦に参加していた。狙撃班として本隊から離れての行動の際に、部隊は敗走し、混乱の中で組んでいた観測手ともはぐれ、敵地にたった一人で孤立してしまったのだ。

あれから数度、この森で夜を過ごしてきた。妖怪も野生動物も住み着いているこの森で。

これまで無事だったのも強運と潜伏技術の賜物なのだが、その間心の休まる時はなかっただろう。

しかし、それでも男の意志はまだ折れてはいない。彼を突き動かしている理由、一つは仲間達の仇を討つため。そしてもう一つは、自身のアイデンティティを取り戻すため。

男は銃という道具に対して、思慕の念にも崇拜の念にも似た感情を抱いていた。軍に入った理由の大部分もそこにある。

銃さえあれば、冥府の深淵からでも帰ってこれる、神仏でも滅ぼしてみせる。そう、信じていた。

あの時まで。

屈強な人間が不可思議な光に貫かれ、擱座した装甲車は銃座を潰され棺桶と化した。

狙撃銃のスコープ越しに見た現実。それを男の頭はすぐに理解することができなかった。自分達が敗れた相手は外国の軍隊でも、武装したテロリストでもなく、銃を持たない異能の生物。

今まで信じてきたものを、全て否定されたような気がした。

だが自分はまだ生きているし、狙撃銃も無事。あこはつ

どうせこのような、訳の分からない土地で野垂れ死ぬぐらいなら、敵に一矢報いたい。銃の力を知らしめたい。

弾には限りがあり、討てる敵はそう多くはないだろう。そんな分の悪さを飲み込んだ上で、男は静かに森の出口へ足を進めた。

「山に木に、あるのは自然ばかり。インフラの類もろくに整ってない。時代に取り残された哀れな土地だ。……だからこそ、許せん」

遠方に湖と紅の洋館を臨む森の終わりは、狙撃にはおあつらえ向きに小高くなっていた。

先日まで出入りが激しかった洋館だが現在は落ち着きを取り戻している。それどころか粉々になった門すらも、この短期間で元通りに。

「どんな魔法を使ったのかは知らないが、警戒が緩むのならこちらとしてはありがたい」

男が身に纏っているのは、短冊状の布が多数伸びており、さらにその上から無数の木の葉や小枝が貼りついた上着。グリーンスーツと呼ばれる偽装服だ。

木の裏に伏せ、周りの背が高い草の中に溶け込む。そして600メートル離れた敵を討つために、黒一色の長筒を取り出した。

この距離から伏兵に狙われるとは、あの時代遅れの、戦争の素人達には想像もできまい。

そう確信し、長筒 対人狙撃銃の先端を門前に立つ少女に向けた。

（悪いが、向かい合って戦うなど馬鹿者のやることなんでね。戦争というものを教えてやる）

スコープの照準線を標的に定め、引き金に指を掛け、

しかし弾丸は放たれない。

男の頭上、木の上に立っていたのは

「おや、こんな所でバードウォッチングですか？」

いつもは妖力で消している背中の翼を、誇示するかのように広げている烏天狗の少女。葉団扇を片手にスツと地面に降り立つ。

目の前の人間を捉えたその目に映るのは好奇心か。

反射的に飛び起きた男は黙したまま慎重に、じりじりと後ずさり

「……………」

「その割にはおかしな方を向いてましたよねえ。」

下がっていた銃口を一瞬で上げると

「クソ鳥がッ！ 挽き肉になりたいかアッ！」

一発の銃声が響く。

「私はどちらかというと魚の方が好きなんですがねえ。……………で、挽き肉が何でしたっけ？」

「あっ……………がっ……………」

地に転がったのは少女ではなく四つに分かれた自身の相棒。一陣の風に包まれて、真空の刃で銃身も銃床もスッパリと切断されてしまったのだ。

空気が張り詰め、男に冷たい汗と静寂の時間が流れる。

烏天狗は一步前に出ると、目を細めて妖しく囁いた。

「ところで話が大きく変わりますが、その昔敵国に捕えられたブリテンの長弓射手は、二度と弦を弾けないようにと、指を切り落とされたことがあるそうです。……………武人なら聞いたことぐらい、ありますよねえ？」

崩れ落ちる体。

緊張が限界に達したのか、天狗の妖気に当てられたのか、男が意

識を手放したのだ。

「ふうつ。ここいらは妖精の住処が多いというのに、いつまでも暴れられては困るのよ」

どこまでが本気なのか。烏天狗の文はそうつぶやくと、霧の湖へ飛び立っていった。

「ん……………スウ……………」

「鈴！ ちょっと美鈴！」

「……………んん、……………はっ、ハハツハハハイ！ ハイ！ 何でしょ
う咲夜さん！」

「貴方ね、疲れてるのなら交代を置いて中で休みなさいよ」

「いや、最近立て続けに色々あったじゃないですか。それで休息の方があまり……………」

「まったく」

元々光の届きにくい常闇の森は、夕暮れにもなるといつそう黑暗の侵食が大きくなる。最近の妖怪は夜型の者が減ったとはいえ、暗がり危険であることには変わらない。

そのような危険地帯を一人の人間が脇目も振らずに駆けている。
天狗の前で気絶した男。彼は生きていた。

日が傾き始める頃に意識を取り戻すと、これ以上この場に長居はできないと、拠点としていた洞穴に向け走り出したのだった。

あの化物に、現状では歯が立たないことは認めざるを得ない。

だが執念深く、諦め悪くあがいて打開策を見つける。そして最後には勝利する。軍人とは、人間とはそんな生き物なのだと、彼は歴史で知っている。

（あれは俺の慢心が招いた敗北であって、我々の戦い方が劣っていた訳ではない。中隊だって、十分な情報さえあればあんなことにはならなかったはずだ。いつまでも調子に乗れると思うなよ……。止めを刺さなかったその甘さ、必ず後悔することになるぞ）

「おー、天狗の言ってた通りね」

目に入った瞬間に分かった。『こいつも化物だ』と。

その体は闇を湛えて、否、闇その物なのか。地面から１メートルばかり上を金髪の小柄な少女がふよふよと漂っている。

迂回している余裕は、ない。

「この所入れ食い状態ねえ。ま、楽に食べ物にありつけるのは良いことね」

食べ物……確かにそう言った。だが、いちいち取り乱していられるような状況でもなかった。

男は努めて冷静に語りかける。

「食い物か。それならちょうど、いいものがある。ここいらではないものだ。興味があるだろう？」

「？」

反応した。まさかこうも上手くいくとは……。

（こんな、低次元の連中に遅れを取ったというのか。我々は）

そう思うと、沸々と言い様の無い怒りがこみ上げてくる。

「食べていいものには興味があるわね。面倒でないものなら特に」

無知とは罪、愚とは罪。罪には罰が与えられねばならない。

「そうか、なら………食うといい。鉛玉を」

極々自然な動作で拳銃が引き抜かれた。

しかし目の前に銃口を突き付けられた少女は「何をやっているんだ」と言いたそうな顔をしている。

それもそうだ。男はそのまま硬直していたから。引き金が中ほどから消失していたのだから。

天狗は武器を持たせたまま放置してくれるほど甘くはなかった。

「……この人間、食べても退治されない気がするわね」

最初は固まっていた男だが、すぐに肩を震わせ始める。

「何だ、やっぱ銃が恐ろしいんじゃないか」

7・62ミリライフル弾の通用しない相手に拳銃が何の役に立つのか。

最後の最後に、己の信条が守られたと思い込んだ彼にとって、そんな疑問はささいなことであった。

「ククッ、ハハハハハハハハハ！」

恐怖、嫉妬、怒り、狂気。

それら全ての妖怪の糧が闇の球に包まれる。

結界の外。科学が幻想にとって代わり、人口の光が暗闇を照らす世界。デジタル化された時計の数値に支配されるこの世界では、時は何物にも代え難い貴重なものとなっている。その前では昼も夜も関係ないのだ。

この国の都は日付を跨いでも眠りに付くことがない。

そんな街中を所狭しと並ぶ魔天楼の一角、とある応接室のソファに黒のスーツ姿の男性が腰を下ろしている。見たところは初老の西洋人。

「遠路はるばるパリから御足労頂き恐れ入ります」

彼を迎えているのは背広を着た長身の東洋人。年の頃は西洋人と同じぐらいかそれより下か。

「しかし思うように状況が進捗せず申し訳ない。せつかく欧州の兄弟達からも御支援を頂戴しているというのに……」

「それは構いません。総本山を気取る、あのロンドンの者達を出し抜くためでもありますから」

二人ともこのようなやり取りには慣れているのか、会話は儀礼的に、しかし穏やかに進んでいく。特に東洋人の方は終始笑みを浮かべており、人の良さが窺える。

「“被検体”はともかく、ハンターまで落とされたのは想定外でした。今後も資金の捻出には苦勞させられるでしょうな」

この東洋人にとってはどちらかというと後者の方が大きな問題なのだろう。それでも、そこまで深刻そうな様子ではないが。

「ふむ、金とはいったって頭の痛い問題ですな。まあそちらの件も含めて、これからよろしく願いしますよ………総理」

十六話 孤絶して猶進む（後書き）

文はここぞという時に敬語を止め素の口調になりますが、敬語のままだと慇懃無礼さが出て、それはそれでいいと思います。

十七話 永遠に溶けない白銀の花（前編）

普通、一年草である向日葵が冬を越すことはない。そのためこの太陽の畑も随分と寂しくなってしまった。夏には黄金の絨毯が敷き詰められた壮観な姿をしていただけに、余計に寂寥感が強調される。秋風の吹く物寂しい大地の上にしゃがみ込んでいる妖怪二人。

「この子達も来年まで見納めね」

それが自然のサイクルであり、生き物にとっては決して避けられない理である。それでもこうして感慨を覚えるのは、「もののあはれ」ということなのか。

「んー、やっぱり向日葵って不気味かも。特に枯れてるのは」

幽香の隣から覗きこんできたメディスン。彼女は子供らしく、思ったことをそのまま口にした。

「またこの子はそんなこと言って。いいじゃないの、向日葵」

「私はスーさんの方が可愛いと思うわ」

「まあ、鈴蘭が可愛いのは同感だけどね」

メディスンは少し前まで、無名の丘の鈴蘭畑から外に出たことがなかった。そんな彼女が今、人間からの人形の解放を成就するために世界を知ろうとしているのだ。

と言っても、今もって人形解放のための具体的な方法や筋道は浮かんでこない。それ以前に人間と妖怪の違いすらもよく分かっていないところがある。

だがこれに関しては、彼女の周りの年長者が人間として暮らそうとしている宇宙人だったり、強い者には人間・妖怪区別なく弾幕を仕掛ける戦闘好きだっバトルマニアたりするので、理解できなくても無理はないのかもしれない。

そもそも種族の線引きが曖昧になっているのは幻想郷全体の傾向でもある。

例えば幻想郷縁起。里の人間が語る妖怪の目撃談にはどこことなく暢気な雰囲気がある。妖怪退治にしてもそうだ。ここに記されている”退治”が、殺生を目的としたものではなく、儀礼的な面を多分に含んでいるのだと誰もが心得ている。

ただし、当然のことだがそういった暗黙の了解を外部の人間までもが把握している訳ではない。

以前、妖怪退治の真似事をしようと、ある外来人の男が夜雀の屋台を襲ったことがある。『とりもちを使って退治しよう』などと書かれているのを見て、「自分にもやれるに違いない」と魔が差したのだろうか。

だが退治に入ろうとした際、酒の席で暴れられてはたまらないと、屋台の客達に羽交い締めになされてしまった。その中には、妖怪のみならず里の人間の姿も。

これも分不相応な英雄願望と根拠のない自信が招いた結果というわけだ。

もっとも、現地のルールや慣習を知らずにとんでもない失敗を犯してしまうというのは、幻想郷に限らずどこにでも起こり得る話ではある。

「朝から元気ねえ。本当に花みたい」

窓際に肘をつき外を眺める少女。幽香が早起きなのは事実だが、彼女は彼女で正午前に床から動き出す生活を送っている。本来春から秋までの間は冬の妖怪にとってまどろみの季節なのだから、何らおかしいことではないのだが。

「ん？ 幽香、新聞なんかとってたかしら？」

部屋の中に視線を送った際、ふと目に止まった紙の束。無造作に床の上に放られているが、幽香が里から持ってきたのか、天狗が勝手に置いていったのだろう。

『霧雨道具店冬の新作。防寒具と護身武器と健康器具を組み合わせた全く新しい』

『妖怪？ 巨人？ 霧の湖周辺部での巨大な影の目撃情報。酒に酔った妖精の与太話という指摘が』

『驚愕、荒神と化した秋の神！ 季節の移り目には往々にして感情を発露するあまり』

「ネタに見境が無くなってきてるわね」

いつもの文々。新聞である。

（……でも、取材相手にも見境が無い）

それは確かに人間、妖怪、妖精と区別がない。この新聞を読んでいる側についても同じだ。

だからといって著者である文が天狗として、妖怪としての意識に乏しいのかというと、そうではない。むしろ種族の誇りを強く確信しているぐらいだ。

妖怪としての顔と記者としての顔。その二つを使い分けているのだろうが、ああも切り替えが上手いと見ていて感心してしまう。

それに比べて自分はどうだろうか？ あ的那天ほど柔軟にやってくのはさすがに無理があるが、もう少し器用にできないものか。守るべき種族の線引きとは……。

「はあ……考えてもしょうがないわねえ。もう一眠りしましょ」

いずれにしても冬は近いのだ。それまではただ、何事も無い日々をまどろみの中で過ごしていよう。

自身の内でどこかにしこりを残しながら、レティは再び眠りに就いた。

「木っ枯らし、木っ枯らし、空っ風え〜。秋の夜長に
「お邪魔するよー、っと」

夕暮れの稼ぎ時に向け下準備が進められていく林道の屋台。暖簾をくぐって顔を出したのは、青の着流しを着た、がたいのいい人間の男だ。

「あー、安部のところの坊か。早いわね。まだ日も落ちてないのに」
「最近は改築やら何やらの依頼で忙しかったんだが、やっと落ち着いてきてね。今日は工期前に仕事が終わったんでブラブラしてるのさ」

彼の言葉通り、人里の大工はこのところ使える人間を総動員して仕事に当たっていた。

この土建ラッシュの背景には、建築資材の一つである鉄の大量流通がある。その出所は紅魔館。武装勢力を撃退した際、戦利品である火器類の多くを鉄に変じて売り払っていたのだ。パチュリーが、不得意な錬金術を使って。

ところで、周囲を壁で囲まれている人里は外から見ると拡張性が無いように感じられるが、実は遊ばせている土地がかなりあるのだ。元は妖怪退治の前哨基地。使える空間は多いほど良いと、昔の人間は考えていたのだろう。

「そうだ、女将さん。いい加減その坊つてのやめてくれよ。もういい年なんだしさあ、俺も」

「そうは言っても、今でも坊は坊よ」

「参ったね、こりゃ」

妖怪としては若手の彼女、ミスティアだが、それでも見た目以上には年を取っているのである。

「坊、あまり外をうろうろしているとガブリとやられるかもしれないよー。何だか物騒になってきてるからね」

「おいおい、いきなりだなあ」

出された焼酎に手を付けていると、ミスティアが料理の仕込みをしながらそんなことを言ってきた。普段妖怪と交流があっても怖い時は怖い。思わず身が引き締まる。

「そっぴいや勘の鋭い獵師連中もピリピリしてたなあ。……こいつの出番が来なきやいいんだが」

目を落とした先にあるのは腰に差した木剣。それなりに年季が入っているのが見て取れる。

彼の本職は大工だが、同時に自警団の一員でもあったのだ。

気温が下がると、温度変化に強い妖怪ならともかく、大抵の動物達はその動きを鈍らせる。また、自然の具現たる妖精の場合、その反応は様々だ。寒冷の到来に喜ぶ者もいれば、そうでない者もいる。

湖から離れた、葉がすっかり枯れ落ちた木。その下には氷の妖精、チルノが座り込んでいる。冷気を操り、物を凍らせるのが好きな彼女は冬を歓迎する側だ。本来ならば。

しかし今の彼女は丸めた膝を抱え、俯いている。普段の様子との

ギャップのためか、氷の羽まで覇気を失ったように思えてくる。

「どうしたんですか？ やけに元気がないようだけど」

ぼんやりとした氷精の前に、空から降りた文が声を掛ける。湖にいないチルノを捜してここまでやって来たのだ。

「んー？ 文かぁ」

顔を上げて馴染みの天狗の存在に気が付くが、いつもみたいに弾幕ごっこを挑んだり記事に文句を言ったりはしない。これはやはり、何かある。

「おかしいですねえ。もうすぐ秋が終わり、冬が、あの妖怪の季節がやってくるというのに」

「……………」

少し考えた後、チルノは視線を下に戻して口を開ける。

「だって、レティ、あたいのこと嫌いだもん」

「ふんふん」

「いつもあたいを避けるし。だから、冬がきたって何とも思わないよ」

すると文は、チルノの隣に同じように膝を丸めて座り込む。

「妖怪というのはですねえ、一見自由気ままなようで、結構縛られるものなんですよ。自身の性質とか、立場とかに。我々は人間とは違った意味で難儀な生き物ですから、形にもこだわらなければい

けないのです。ですから……」

「文の言ってることよく分かんないよ！　いつも分かんないけど！」

長くなりそうだと思ったのか、チルノが声を大きくして話を遮る。少し困った顔で、「うーん」と頭を捻って、しかしすぐに言葉を選び直す文。それはいたってシンプル、明快なものであった。

「つまり何が言いたいのかというと、本人でもないのにそんなこと気にしても仕方がない。貴方は貴方が思うように接していればいいのですよ。いつも通りにね」

答えになっているのか微妙なところだが、今の氷精にとっては十分効果があったのだらう。またすこし考え込むと、すくつと立ち上がる。

「最強のあたいが悩むことなんてなかったわね！　弾幕で最強を証明すれば、誰だってあたいを見直すんだから！」

立ち直るのが早ければ、その後の行動も早い。両の拳を空に振り上げると、湖に向けて勢いよく飛び立っていった。

「やはり、妖精とはこうでなくてはね」

ただ、そこにあるがままに。自然の具現は日々を生きていくのである。

「あれ？もしかして今の私、凄く輝いてるんじゃない？あやや
やや」

十八話 永遠に溶けない白銀の花（後編）

名前の通り深い霧が覆いかぶさる霧の湖。水を求める獣だけでなく、たくさんの妖精と妖怪が集まる場所だ。ここをよく遊び場にする氷精はすぐに水面を凍らせてしまったため気付いていないが、湖中には大型魚を含めた魚も棲んでいる。

「ねえ、次は何しよつか。また人間でも脅かしてみる？」

湖上の空に浮かぶ妖精。青のワンピース身に着け、髪をサイドにまとめている彼女はこの湖に住む大妖精である。

「そうね、近頃面白そうな奴が増えてきたからね！」

隣りを飛ぶチルノが悪戯の提案に乗る。

人間、というのは主に外から来た人間のことを指している。迷い込んで来たばかりで、幻想郷や妖精のことをよく知らない人間は悪戯の絶好のターゲットになるのだ。

悪戯といっても彼女達ぐらい力の強い妖精になると、正面から弾幕を仕掛けることも少なくないためなかなか侮れない。それに妖精というものは単純そうに思えるが、意外に多芸なのである。

「あつ！ でもでも、新聞に載ってた巨人を捜してみるのもいいかも」

「うん？ あれ？ あたいあんなの見たことないけど、でも本当に居るんなら調査する必要があるね！」

意気揚々と湖の上を並んで飛んでいく妖精。いつだって彼女達妖精を動かすものは、尽きることのない好奇心なのだ。

「　　ねえ、貴方はいつたい何の妖怪なのかしら？」

「知らないわ」

「知らないって……」

「考えたことなかったわね。生まれた時から」

「……だったら、貴方は妖怪として何を拠り所しているの？　何を律にして生きてるの？」

「さあ？　ただ、私に分かるのは花が好きなことと、今日出会ったばかりの貴方がとても強い妖怪だったこと」

太陽の畑から北に広がる平野。遠くに竹林の入口を臨むこの場所で、所在無げなレティが木陰の下で姿勢を崩している。

「ん、やっぱり幽香に悪かったかしら」

今朝も彼女の誘いを断っていたのだ。お互い生活リズムがずれていると、こんなことがよく起こってしまう。

実は幽香もレティも、そこまで睡眠を必要としている訳ではない。

しかし、いつもの習慣、生き方をさしたる理由もなしに変える気にもなれなかった。

「ま、いつか。」

そう、理由なしには。

「あら？ あの子は、湖の……」

眼前の空、風に乗って猛然と突っ込んでくるチルノの親友の大妖精。そのまま見ていると、徐々に高度を下げてレティの手前で転がるように着地した。

「ち、ちっ、ちっ、ちる、チル！」

体勢を崩しながらもすぐにレティの腕を掴んで訴えかける大妖精だが、舌が上手く回らず話の要領が得られない。

短、中距離のワープ能力を持つ彼女にとって、霧の湖からここまでの距離はたいした問題にならないはずだが、それでも肩で息をしていることから相当焦っているのが窺える。

「とりあえず落ち着いて、ちゃんと喋りなさい。いい？」

両肩に手を乗せられ諭されると、小さな体は次第に息を整えて今度のはつきりと声を上げた。

「はあ、はあ……っ！ チルノちゃんが、チルノちゃんが！」

霧の湖の畔にて、互いに間隔を空け輪になっている人型が三つ。

胴体から生える二本の足と二本の腕という外形こそは人を模しているが、身の丈は4メートルを超え、濃緑の角ばった体は金属で出来ている。そして目を引くのは四角形の頭部。顔のパーツがあるべきそこには長方形のスクリーンが暗黄色の光を灯していた。

そんな異様な三体が、周囲を警戒しつつ氷の妖精を取り囲んでいる。彼女はうつ伏せにぐったりと倒れぴくりとも動かない。辺りに散らばる大小の氷塊は、抵抗の跡。

ついさっきまで、彼女は突如現れた巨人達に対して、その小さな体からは想像できないほど健闘していた。

殺生が目的ではないからなのか、相手が飛び道具を使ってこなかったため、あちこち飛び回ってあの大きな敵を翻弄していたのだ。だがチルノも機械の巨人が飛ぶことは予想できなかったのだろう。しまいには不意を突かれ地面に引き摺り下ろされてしまった。

やがて巨人の一体が倒れ伏すチルノに近づいていく。

ところが別の巨人がある一点に顔を向けると、続いて他の者達もそちらに注視した。

霧の向こう。視界不良のため今まで気付かなかったが、薄らと伸びる影が風に吹かれる度にゆらゆらと揺れている。

巨人達の中で何らかのやり取りがなされたのだろうか。彼らの内

の一体が前に出ると、脚部に装着された小型の車輪を駆動させる。するとその大きな体に似合わぬ速度で、唸りを上げて平らな地面を疾走していく。

数十メートル足らずの距離を瞬時に駆け抜け、影の前に立ち塞がる巨体。そして有無を言わず機械の右手を伸ばそうとした。

……が、何者かを掴む前に動きを止めた。

肘から先が凍り付き、その機能を完全に停止させてしまったのだ。

しかし怯むことなく凍った腕を引っ込めると、すぐさま腰に着けていた軍用ナイフを左手で抜く。巨人にとっては小剣だが、人間サイズの者からすれば大剣同然のそれを、頭上に振り上げ影に向かって叩きつける。

だがこれもまた止められてしまう。

今度は腕は凍り付いてはいなかった。しかしナイフを下げようとしても、動かない。押しても引いてもびくともしない。

そんな異常な状況の中、影の周りを覆う霧が風に流され消えていく。

凍結した大地。

その上に立つ白と青の少女。

彼女の握る三叉の槍が巨大な刃の侵攻を塞ぎ止めていた。

あつけにとられる巨人の体が激しい衝撃に襲われる。少女の発した巨大な光の弾に正面から打ち据えられたのだ。

鋼の体が大きくよろめき、転倒しまいと二本の足で踏ん張りを入

れる。

そうしている間にも少女の体が純白の気体を撒きながら、ゆっくり音も無く浮かび上がる。

巨人の頭部、無機質なスクリーンは、その幻想的な光景に息を呑んでいるかのように、じっと眼前の少女を見つめていた。

頭を槍に貫かれるまで。

仲間が向かった霧の先を、能面のような顔が窺っている。

実際にはわずかな時間だった。しかし仮に、鋼と機械の身に時間を体感することができたなら、それは永遠に感じられていたかもしれない。

そして閃光の後の、爆発

もはや氷精の時とは完全に事情が変わっていた。

残る二体が、背負っていた機関砲を両手に構える。

精細な狙いをつけずに影が立っていた一帯を襲う弾幕。砲弾が地を穿ち爆煙をまき散らす。霧は煙にとって代わられ草木の匂いは鉄火の臭気に制圧された。

（私は、大きな思い違いをしてたのかもしれない）

種族の、立場のけじめをつけることと、自らの思うがままに生き
ることは衝突するとは限らない。あの博麗の巫女や幽香を見ていれ
ば分かるはずだった。

自然の歪から生まれ落ちた妖精と自然に生きる妖怪。

同じ存在にはなれないが、決して凍てついた関係でいる必要もな
い。

内に閉ざした氷は溶ける。

ほんの些細な切っ掛けで。

照準の狂いも無視して弾幕を張っていた巨人達が砲火を止める。

霧が晴れ、煙が消えて、代わりに辺りを覆ったのは天より降り注

ぐ白の結晶。

「機械人形ゴーレムの鉄の肌は、痛みも寒さも感じないか。ならば、中から
凍え果てるといいわ」

吹雪の中、冬の妖怪が宙を進む。

前に差し出された彼女の掌が淡く輝くと、まるで意志を持っているかのように、雪風が巨人達目掛けて殺到する。白い靄が幾重にも纏わりついて巨体を搦め捕っていく。

退こうとしているのか、それとも視界すら覚束無いのか。機械の脚が敵とは見当違いの方へ向かおうとするが、やがてはその動きも止まる。

そして四方に充満した妖力が大気を震わせた。

鋼の鎧を、機械の殻をすり抜けて襲ってくるもの。

それは古来より、数多の命を脅かしてきた原初の恐怖、寒気。白の結晶は何よりも柔らかく脆く、しかし無慈悲に終わりをもたらししていく。

「テーブルターニング」

「……こんな時期に雪なんて。これも自然の歪みになるのかしらねえ」

「紫様？ 一体」

「何でもないわ。ただ、道から少し外れてみるのもいいものだと、そう思っただけ」

雪が止み雲の合間から光が覗き始めた湖畔。岸边には二体の巨大な氷像が直立している。彼らが再び動き出すことはもう、ない。

「んっ、んんっ、あれ？」

気を失っていたチルノが目を開ける。彼女はいまいち状況が飲み込めないでいる。

変な連中がやってきて、一緒に遊んでいた大妖精を逃がして、戦って。しかし気が付くと、敵の姿は無く自分は木の根元で寝転んでいた。

そんな彼女を傍らで横座りになり見ている者が。

「あ、レティ……。んーっと、えっと、あたいは」

口を開いたチルノの顔に両手を伸ばすレティ。小さな頬を優しく包み、

「いつ！ いふあいふあいふあいふあい！」

思いつき引つ張った。

「あんな機械の人形なんか随分と遊ばれてたみたいねえ。この調子なら、お茶くみ人形とでも戦ってた方が良い勝負になるんじゃない

いのかしら？」

「あつ、あつ、あつ、ああああ」

にこやかに笑うレティを前に、ほっぺたを赤くして飛び起きる。

「あたいと勝負しろーーーーー！」

降り積もった雪の上を妖精と妖怪が舞う。

少しばかり勇み足となってしまうが、本当の白銀の季節はすぐそこまで。

「ねえ、おねーちゃん」

「なあにー」

「まだ秋だよねえ」

「そうねー。まだ冬ではないわねえ」

「それなら何で雪が降ってるの？」

「分からないわー」

「私達は、ただ平和に芋を掘って暮らしてただけなのに……どうしてこんな目に……」

偶然近くを通りかかった二柱の神が涙していたことを、知る者はいない。

十八話 永遠に溶けない白銀の花（後編）（後書き）

オチを入れずにはられない……！

十九話 秋霜烈日

人里に続く道……からは外れた脇道を、チェック柄の洋服の少女と寒色系の薄着の少女が歩いている。

結局レティはこれまで通り冬意外には里に姿を現さないようにしていた。だが、前より活動的にはなった。この日も特に目的も無く、幽香に付き合っただけを楽しんでいる。

「夜雀の屋台でいいわよね？　ここから近いし」

「こんな早くからやってるの？」

「まあ、つまみぐらいはあるでしょう」

彼女達が目指すのは昼間人気の少ない雑木林。あそここの屋台はこの冷え込む時期に備え、おでんやどて焼きなどメニューの増強に励んでいた。

それから数分歩き、紅く染まり落葉し始めた木々が視界に入った時。

行く手の路上に二人の少女が立っていた。

片方は紅葉の髪飾りを、もう片方は帽子に葡萄を象った飾りをそれぞれ着けている。そしてその髪は共に、豊穣なる稲穂の如き黄金色。

「来たわね」

姉、秋静葉。

「今年の秋は何かおかしいと思ったら……やっぱりあんたの仕業だったか」

妹、秋穰子。

妖怪の山の麓に住まう、秋を司る幻想郷の姉妹神である。

「唐突ねえ。ん〜、でも心当たりが無いことも無いんだけど」

レティが少しだけ「困ったな」といった様子で頬に手を当てた。
それに構わず、穰子が前に出てきて話を続ける。

「御託はいいわ。何にせよこのまま、秋を舐められたまま終わる訳にはいかないのよ」

ここに来てから、秋神のものであろう濃密な神力がちくちくと肌を刺している。どうやら始めから一戦交えるつもりだったようだ。

「ふ〜ん。じゃあ私が勝ったら、その時は甘くて美味しいものでも御馳走してもらいましょうか。体を張って」

「……は？」

「そうね、ちょうど砂糖を切らしてたのよ。……絞ったらシロップでも取れないかしら」

「!？」

にこにこ笑うレティと、真顔で品定めを始める幽香。

「こいつら人間じゃないよお姉ちゃん!」

「人間じゃないんだってば」

お互い様である。

「なによ〜ちよつとした冗談じゃないの。ねえ幽香」

「えっ……………ええ、そうよ」

何やら不穏な間を無視し、気を取り直してレティに指を突き付ける。

「とにかく！ 私と決闘してもらわよ、雪女。舞台はもう整ってるんだから」

その直後、二人の間の空気が震え、歪み、激しく明滅する。

そして明りが一際強くなった後、収まったと思ったらその場に残っていたのは静葉と幽香だけであった。

一連の光景を静葉は平然と眺めていた。

「……で、貴方は私の相手でもしてくれるのかしら？」

「不肖の妹一人働かせて傍観を決め込むのもアレだしね。お願いするわ」

「ルールは？」

「先に一つ、大技を決めた方が勝ち。というのでどう？」

先程の妹に比べ、幾分も穏やかな声で答える姉。

「見かけによらず豪快なのね。まあ、こちらとしては望むところだけど」

幽香がそう言って空に上がると、静葉も地を軽く蹴って後ろにふわりと舞い上がる。そうして20メートル程離れた位置で止まると、手でスカートをつまみ、上品な仕草で会釈をした。

先に仕掛けたのは弾けるように飛び出した幽香だ。突進しながら右の掌に一瞬で妖力を溜めると、一条の光を撃ち出した。

牽制とは思えない正確な射撃。静葉は体を横に捻ることで、レーザーの射線をずらして回避した。と同時に、彼女の体から大量の光弾が生み出される。一つ一つ、紅葉のような形と色を持つそれが静葉の周りを取り囲み、姿を隠してしまった。

相手の手を見るため勢いを落とし防御体制に入った幽香に対し、スペルが発動する。

「葉符『狂いの落葉』」

宣言と共に、秋神の纏っていた光弾の大群がばら撒かれた。

一発の威力は大したものではなく幽香の防御を抜くには至らない。だが彼女の跡を執拗に追いかけて、周りで飛び回り、不規則な動きで襲いかかってくる。その様はまさに、つむじ風に吹かれて舞い上がる落ち葉。

光弾で撃ち落とそうとしても、数が多い上に次から次へと後続の弾が追加され切りが無い。

（これは、目くらましか。隙を見て本命を撃ってくるわね）

そこまで見抜いた幽香だったが、さすがに次の一撃には面食らった。

「……む」

弾幕に紛れた急速接近からの拳打。何とか反応できた幽香は右拳を放ち迎撃する。

拳と拳の衝突。

互いの体が衝撃に打ち震え、後ろにのけ反り再び両者の距離が開

いた。

「やっぱり、力比べだところが不利みたいね」

今しがた打ち込んできた手を握り開きしながら静葉が言う。

彼女の弾幕は穰子に比べると見劣りするが、だから妹よりも神力で劣っているのかというと、そうではない。彼女は戦闘の際に、力の多くを身体能力の強化に回しているのだ。

幽香は右側面から小さく回り込むように飛んで、今度は自分から拳を打ちにいく。先ほどの静葉のものよりも速く、重い正拳が放たれる。

だが、当たらない。

凶器と化した右腕が虚空を切り風を鳴らす。

間髪を入れずに空いた左腕を下方から突き上げるが、これも紙一重でかわされた。

舞い落ちる柔らかい木の葉を思い切り殴ろうとするとどうなるか。それと同じ現象が二人の間で起きているのだ。

至近距離で撃った光弾も、ひらひらと舞うように避けられてしまふ。

「これじゃあ、糠に釘を打ってるようなものだわ」

あちらが接近してくるのを見計らって、肉を切らせて骨を断つ、という戦法もとれないことはない。

けれどもスペルカード戦とはそういうものではない。特に今回決めたルールでは、単に力の強さや体の頑強さを誇示しても、独り善がりの自己満足にしかないだろう。

戦いにしろ競技にしろ遊びにしろ、相手があって初めて成立し得

るものなのだ。

「紅葉の紅は、血の色、終焉の色。花を咲かせることはできても、衰え枯れゆくのを止めることが、貴方にできるかしら？」

両手を開いて神力を放出すると、静葉はまたもや紅と黄の弾幕の渦を作り出す。

空間の歪みに巻き込まれたレティ。気付いた時、彼女は見慣れぬ場所に立っていた。

天は赤に染まり、一面に広がる草原は殺風景で何者かの気配も無い。ここの主を除いては。

「妖怪一人相手に大げさなことするわねえ」

レティの眼前にある小高い丘に、夕日に照らされた豊穡神が一人たたずむ。

「ここは、私の神力によって生み出された疑似空間、仮初めの世界。この世界が顕すものは私の、”秋”の心象風景」

ふと彼女の下に目を向けると、地の下からたくさんの蔓が生えていた。よくみればそれはサツマイモであることが分かる。

「心象、ね。やけに寂しいことになってるようだけど」

「それは、秋が嘆き憤っているからよ」

宙に浮くと、レティに向けて伸ばした手を開き弾幕の構えをとる。彼女、穰子はいつまでも猛る感情を抑えていられる性質ではなかった。

「冬の妖よ！ 恵みの秋が秘めたる荒魂の顔、思い知るがいいッ！」

弾幕の合間合間に飛んでくる拳に対し、幽香は自身の腕を盾にした。しかし静葉の細い腕は鞭のようにしなり、腕のガードを外側から、内側からすり抜けて、幽香の体を確実に打ちつける。

その上厄介なことに反撃しようと踏み込むと、すかさず距離を取って弾幕の射撃に切り替えるのだ。

しつこく付きまとう紅葉弾幕。まずはこれをどうにかしようと、幽香はぐつと高度を落とす。そして何を思ったのか、地面に一発の光弾を叩きつける。

光弾は数秒下に掘り進んだ後、爆発した。すると掘り起こされた土塊が飛び散り、幽香の周りの弾幕を弾き

飛ばしてしまったではないか。

さらに飛散して細くなつた土砂は、彼女を追つて低空に下りてきた静葉にも降りかかり、その動きを鈍らせる。

「……これは使えそうね」

その様子を視界の端で捉えていた幽香が、自らも土まみれになりながらも姿勢を直してスペルカードを取り出した。

「幻想『花鳥風月、嘯風弄月』」

人一人分ほどの大型の光弾が列を成して放たれる。点の攻撃が避けられるのなら、面の攻撃で圧しよというのだろう。

「でも、少し遅いわ」

さっきまでの弾よりも低速の大弾を、静葉は危なげなくかわしていく。

7発目が後方を通り過ぎ、8発目が彼女に近づいたその時。それまで下に下げられていた幽香の手が、不意に前を向いた。

そこから発射された細身のレーザーが大弾の中心部を貫いて、

「くっ！ うっっ！」

静葉の目前で大弾を爆破した。

散弾となつて拡散した妖力の礫。その全てを避けることは到底できず、腕や脚に被弾する。

そしてそんな状況で9発目と最後の10発目の大弾をともに受けて、彼女の体は地に落ちていった。

「今更聞くのも何だけど、結局何がしたかったのよ。狙いはレティなんでしょ？」

決着がつき、その場に腰を下ろしてくつろいでいる静葉に問いかける。

「ええ、まあ、穰子がどうしてもって言うから。私はあの子が目的を果たせばそれでいいわ」

動いて体が暖まったからなのか、それともそういう性格なのか、弾幕でやりあった直後でも穏やかなまま。

すると道の中央、レティと穰子が消えた場所で、背景がぶれ空間がねじ曲がり始めた。どうやら向こうも終わったらしい。

「ふう。ここまでしたんだからそれ相応の結果を……………キャ
アーーーーッ！ 穰子ちゃあーーーーん！」

そこに現れたのは、両手を空に広げたまま氷の彫像となった豊穰神。どことなく自慢げな表情で固まっている様が、余計に哀愁を誘っている。

静葉はそんな妹を抱えると、何のために用意していたのか、路傍に置かれた大八車の荷台に乗せて、幽香や遅れて戻ってきたレティが口を開く前に猛スピードで去っていった。

「まったく、予定がすっかり狂ったわ」

二人が屋台に着いた時には既に日が傾いていた。
予定といっても、取り立ててするべきことはなかったのだが、それとこれとは話が別である。

「いいじゃない。急ぐ用事もないんだし。また他の日に付き合ってあげるわよ」

「……妙に機嫌がいいのね。何かあったのかしら」

「さあね。ただほんのちよつと、幽香に感謝してるだけ」
「？」

訝しがるが、レティはそれ以上答えない。

しかしこちらに寄り添う彼女の笑みをみると、そんな細かいことは気にならなくなる。なんと現金な幽香であった。

夕暮れの道なき道を、二つの車輪がガタガタと音を鳴らし進む。

「満足した？ 穰子」

前を向いたまま声を掛けると後から返事が帰ってくる。

「ま、あね。思いつきり暴れたらす、つきりしたわ」

荷台の上にある氷塊がギチギチと動き、中からくぐもった声が聞こえてきた。

ちよっとしたホラーである。

「もう、この子ったら」

「なぐによー。お姉ちゃんだって結構ノリノリだったくせに」

「それにしたって、最初のあの演出で力を使い過ぎて戦う時に燃料切れって……ないわねー」

「演出とか言うなあっ……！」

色々と騒動が絶えないが、それでも今年も来年も、幻想郷の季節は回っていくのである。

十九話 秋霜烈日（後書き）

世にも珍しい静葉弾幕SS

やはりスペルカードの描写を考えるのは楽しい。本当はロストウィンドロウとかも書きたかったのですが、断念しました。幽香にしる静葉にしるスペルカードの枚数が少ないのはネックですね。

二十話 後生畏るべし

真昼の陽光に照らされてかすかに土の匂いが香り立つ。

紅魔館の裏庭に張られた大きな天幕の下、全長4、5メートルほどの金属の物体が横たわっている。レティによって氷漬けにされた機械人形を、魔女の転送魔法によってここまで運んでいたのだ。今ではすっかり解凍されて、汚れも取り除かれている。

「もう一体は紫が山に送ったようね」

「そう。でも、今回もこっちで調べるのが正解のようだけどね」

天幕に入ってきたレミリアに、機械人形を見上げたまま言葉を返すパチュリィ。どこか確信めいた口ぶりだ。

「そこまで言うってことは、また魔法が関係してるわけ？」

「少なくとも装甲と四肢の駆動制御あたりは純粹な科学だけでは説明がつかないわ。それに、外の兵器体系では人の形を模することに利点がないのよ。機械工学の分野ではまた別かもしれないけれど」

「いまいちはずきりしないわね。もっと突っ込んだことを聞きたかったのに」

「無茶言わないで。内部機器まで凍りついてお釈迦になってたのに。アグニシャインで直火焼きしてやろうかと思っただわよ」

そう言うのと、今度は隅の机で人形の調査結果をまとめていた赤毛の少女に声を掛ける。

「小悪魔、ここはもういいから、貴方は本の整理に戻って頂戴」
「はいはい」

指示を受けた少女はタイプライターと紙の束を片づけると席を離れ館に帰っていく。

彼女、小悪魔は召喚された後も居心地がいいからと紅魔館に住み着き、大図書館で仕事を与えられている悪魔である。

さすがに妖精に書類作業を任せるのは不安だったため、この場に呼んで手伝わせていたのだ。

「んんっ、なーんか引つかかるのよね」

「何がよ？」

パチュリーの隣に並んで、同じように目の前の機械仕掛けの人形を見上げたレミリアが疑問を口にする。

「いくらメイソンの連中でも、外で幻想になった技術をそう簡単に科学で分析できるものなのかって」

「科学で………そうね、そろそろアプローチを変えて調べるべきなのかもしれないわね。だとすると、ふむ………」

「パチエ？」

「ああ、助かったわレミィ。やっぱり一人籠って頭を捻ってるばかりじゃだめね。お礼に明日から私の分の納豆も食べていいわよ」

そう言っこの場から去ろうとするパチュリーだが

「どさくさにまぎれて好き嫌いしようとするんじゃないよ」

「む、むきゅっ………」

幻想郷は最初から今の姿をしていた訳ではない。

例えば、竹が鬱蒼と生い茂る迷いの竹林。ここはその昔、別の土地から洪水で流されてきたものだと言われている。

伝説にある話なのでどこまでが事実なのかは分からないが、この竹林が不思議な場所であることには変わりない。名前の通り、一度足を踏み入れた者はたとえ妖精だろうと迷わずにはいられないのだ。竹自体の急激な成長や、竹林を覆う霧も原因だろうが、それだけでは説明がつかない。

それに加えて妖怪や妖獣が住み着いているのだから想像以上の危険地帯だと言えるだろう。

このように危ない場所ではあるのだが、人間からも十分重宝されている。

食材である筍が採れるのはもちろんのこと、竹はざるや箸などの日用品、塗り壁や床材などの建材にも利用できるのだ。

それになにより、竹林の中には幻想郷で最も優れた薬師が居を構えている。

日本建築の巨大な屋敷。永遠と須臾の住処、永遠亭。

そこには今日も患者が訪れていた。

「メデイスンが反抗期になった。鬱だ」

「貴方ねえ」

来客用の椅子の背もたれにだらしなく寄り掛かる幽香。

青と赤の特徴的な服を着て長い銀髪を編み込んでいる女性、永遠亭の八意永琳は妖怪の診察も手がけている。というより、そもそも

場所的な問題からわざわざ受診しに来るのは人外の方が多いというのが実情だ。

さて、今回患者を自称している幽香だが、彼女が永琳にこぼした愚痴とはメディスンについて。

ある日幽香が無名の丘で薬の勉強に没頭していたメディスンの様子を窺おうとしたところ

「あーっ！ もうっ！ 勝手に見ないでっって言ったでしょっ！」

と追い出されてしまったのだ。

「冗談はいいから、わざわざ竹林を抜けてまで何しに来たのよ？」

段々どうでもよくなってきたのか、机の上で書類仕事をしながら永琳が尋ねる。

「こつちでの様子を聞こうと思って。最初は空の上から見ようとも思ったんだけど、それじゃあ中のことがよく分からないじゃない」「（ヘリコプターペアレント……）」

メディスンは確かに見た目相応の年齢だが、それでもただの子供ではなく妖怪なのである。現にこれまで無名の丘で一人暮らしを続けていたのだ。

それなのにこの行動はいささか過干渉ではないか。

（単純な好奇心もあるんでしょうけどね）

面倒ではあるが、いつまでも居座られたらもっと面倒なので、手

で万年筆を回しながら答える。

「様子って言っても、取り立てて教えるようなことないわよ。いつも通り、薬を知り毒を知り、力の操り方を学ぶ。そんなところかしら。まあ、よくやってるとは思うわよ」

永琳の言うように、メデイスンの学習意欲と速度にはなかなか目を見張るものがある。妖怪は基本的に長命でゆっくり変化していく生き物であるため、より一層そのように感じるのかもしれない。

「そう。それなら尚更詳しく知る必要があるわね」

「だから止めときなさいって。あまり構い過ぎるのは」

「そう言う貴方のところは野放しにしてるだけじゃない。あれは良くないと思うわ」

それを聞くと、永琳の顔が心外だと主張する。

「そんなことないわよ？ 現にうどんげだって喜んで新薬の試験を手伝ってくれるもの」

「……なるほど。一度貴方とゆっくり話がしたくなつたわ。酒でも飲みながら」

妖怪の山上流から下流へと流れる幅広の川。穏やかな流れの中で

はイワナを始めとした川魚が回遊する。

「また大荷物だな。今日はどんな物作ってきたんだ？ 全自動きゅうり早食い機とかは無しな」

川辺の岩に胡坐をかいているのは金髪で白黒衣装の魔法使い、霧雨魔理沙。彼女の前でリュックサックを下ろしているのは河童の技師、河城にとりである。

「いいや、これは違うよ。外来人の落し物。一通り調べ終わった後、いくつか私がいじれることになったのさ。それときゅうりは手で折って食べるのがいいんじゃないか」

にとりは同族内でもまだ若いが、そこは技術者集団の河童だけあり実力主義的なのだろう。……彼女達が奔放なのも理由の一つかもしれないが。

「おつ、そいつは大筒か」

「ああ。後ろから高压のガスを出すことで、弾の発射による反動を抑えられる武器だよ。その分余計に火薬が必要だけどね」

リュックサックから取り出された、照準眼鏡や銃把のついた円筒状の物体。それに魔理沙が食い付いた。

魔法使いは理系知識に強い者が多いのだが、中でも魔理沙はマジックアイテムの収集、開発に力を入れているため、それに応用できそうな化学知識や道具にも興味を持っているのだ。その結果、魔法実験の廃棄物を利用した産廃爆弾なる物を作ってしまったこともある。

「んー、他に面白そうなのは？ トウモロコシ早食い機も無しで」

「そう言えばそんな物も作ってたね。あれは歯が欠けるかと思ったよ……」と、あと目ぼしいのはこの暗視鏡ぐらいかねえ」

「暗視、か。魔法使いやお前達妖怪にとっては月夜の提灯だな。…」

「月夜と言えば、夜雀の能力には通用するのか？」

「こいつは月光とか星明りとか、自然の光源を増幅するだけだからね。残念ながら、あの手の能力とは相性最悪なのさ」

かつて、月に異常をきたした事件があった。

その途上で弾幕を交わした敵を鳥目にする妖怪。夜間限定とはいえ、こちらの暗視魔法の上から視界を奪ってくる厄介な相手だった。道具でどうにかなるのなら、とも考えたが、やはりそう都合良くうまい話が転がってはいないようだ。

「弾幕に応用できそうなのがあるかと思ったんだが」

「そんなのそう簡単に手に入る訳ないだろー」

「まっ、無ければ作るまでだな！」

魔理沙はそう言っただけで岩の上から飛び降りると、その場でアイテムの詰まった袋を広げた。

このように、排他的な山に所属するにとりが人間である魔理沙と堂々とするんでいられるのには、「射命丸が匿っている人間だから」という理由があったりする。

平素の振る舞いからは想像し難いが、有形無形の影響力が彼女にはあるのだろう。

「将来有望な若い才能同士が交流を繰り返すことによってなんとらんかんたら……」

と、文本人はいかにもそれらしいことを語っていたのだが、もち

ろんそんな話を信じている者は皆無である。

「ふんふん、ふふーんふん」

太陽の畑へと伸びる道を楽しそうに進むメディスン。少し遅れて幽香が続く。

遠くからだと微笑ましい光景のようだが、よく見ると幽香の顔は福笑いのように引きつっている。

いったいどうしたのかというと、永遠亭を出た後、早速メディスンを見守ろう（観察しよう）としたのだが

「このっ！ このっ！ このっ！」

「ちよっ、まっ、ブフッ」

毒を顔面に受け続けてこの有り様である。

今は食べ物で釣ることで何とか機嫌を直したところなのだった。

「あら？」

「おー、幽香達が帰ってきたぞー」

帰宅した幽香とメディスンを待っていたのはチルノだった。彼女は椅子の上で足をブラブラと揺らしている。それを横目に自身も席

に着こうとしたところ、台所からレティが姿を見せた。

「今日は私が作っておいたわ。有り難く食べなさいね。」

そう言いながら手にした大鍋をテーブルの上に置く。

長い付き合いになるが、レティが料理をしているところを見たことが無かったなと思い出して、鍋を覗き眉を上下に動かす幽香。

「普通の、クリームシチューね」

「え？」

「いや、冬の妖怪だけにシャーベットライスでも出てくるのかと……」

雪のように白い肌に青筋が浮かんた。

隣では我関せずと、チルノとメディスンが鍋をつついていてる。

「…………ふーん、へーえ。分かった、幽香は冷凍お粥ライスが食べたいのね。それじゃあシチューは三人で分けましょうか」

「軽いジョークでしょ！ もー！」

「あたい、じゃがいもたくさんがいいー！」

「幽香はお馬鹿だなあ」

若者を観察するのはいいのだが、幽香がメディスンを上手く言い包めるにはまだ時間が掛かりそうである。

二十一話 正しき欲望

妖怪の樹海入口近辺には山への侵入経路を見張るための監視施設が設けられている。物見櫓、哨戒天狗の待機小屋、更には丘の斜面をくり貫き作られた堡壘など。

秋に侵入者の集団を撃退して以降は駐留する哨戒天狗も増員されていた。

「はあ……」

たまたまここに立ち寄った犬走栲は、厳戒態勢に入った現地の守備に駆り出された。

通常の哨戒任務から離れていた彼女からすると、運悪く今回の件に巻き込まれたことになる。

（ここで手柄を立てれば元の哨戒任務に……いやいや、下手したらそれを口実にまた面倒事を押し付けられるかも）

悶々と悩みながら歩哨に立つ。

だがそんな栲の思考と対照的に、彼女達の置かれた状況は緊迫していた。

天狗の陣地から雑木林を隔てた反対側に、四輪の装甲車が二両停

車している。その後には迷彩服を着た七、八人の渋い顔の、あるいは無表情の男達。

上によると『突然変異の生物とそれらに囲まれ長年孤立してきた人間』というのがこの地で暮らす住民らしい。

言うまでもないが、それを真に受けている者はいない。彼らの国にそのような未開の地が存在するはずがないからだ。

異世界 そんな言葉すら脳裏をよぎる。

しかしだからと言って、軍人である彼らに任務を遂行しないという選択肢はあり得なかった。

「要求は拒否されました。『教えるようなことは何もない』と」

一人の兵士が男達の下にやって来ると、中央で腕を組んでいる大尉の階級章を着けた男に報告する。

彼らに下された任務とは現地住民の集落を搜索、保護することだ。とはいえ、渡された地図にはこの巨大な山の麓の一部しか記載されていない。戦闘行為が想定される状況で、まともな地図も無しに隊を動かすのは危険極まる行為だ。

それ故に、期せずして接触してしまったあの者達と交渉を図ったのだが。

「白崎大尉。いつそのこと、こちらの實力を示威してみては？ 今のままでは我々のことをよく理解できないでしょう」

年若い少尉が三十代の指揮官に意見する。

「まあ待て。できるだけ労力を費やすのは避けるべきだ。せめて保護対象と接触するまではな」

「はっ、失礼いたしました」

そう言って敬礼をするとすぐに引き下がった。

(……猪武者が。面倒事になったらどうする)

内心で毒づくが、彼とてそこまで戦闘を恐れている訳ではない。

仮に圧倒的な武力であの外人達を叩いたとする。それを知った現地住民は自分達を受け入れはするだろうが、同時に過剰な警戒心や畏怖を持たれるのは避けられない。

例えば味方だろうが、強すぎる力が手放しに理解され称賛されることはありえないのだ。

(そうになったら、”いい目”にあえる可能性も無くなるからな)

その昔、外部との接触の乏しい地域社会には、まれびと信仰なるものがあつた。

そこまでいかなくとも懐柔できるならそれに越したことはないし、この様子なら住民の文明の程度も低いだろうから、あわよくば女を宛がわれるかもしれない。

現代の人間が耳にすれば悪習と非難しそうなことではあるが、この男にとっては、当然のように女子供に権利が存在する自身の社会の方がよっぽど醜悪に思えた。

「14:00までには引き払うぞ。できるだけここから距離を取りつつ水源と目標集落を搜索する」

周りの部下が各々の持ち場へ動き出す。

現地人への願望が、都合のいい皮算用だとは自分でも分かっている

る。しかしこの状況、そのぐらいの役得でもなければ割に合わないというのも切実なる本心だった。

妖精とは非常に好奇心が強い生き物である。

そこが山の天狗の領域であつたとしても、踏み込むことに躊躇しない。一方で天狗にとつても妖精をいちいち追ひ払うのは徒労ではない。

そんな事情もあつて、日光の妖精、サニーミルクは天狗の哨戒所近くの林まで足を運んでいた。

「面白い物が見れるかもしれないってのに。スターもルナも心配性ね」

珍妙な人間達の存在を知った彼女は家族同然の仲間の制止を振り切つてここにいる。スターサファリアは何となく危険を感じ取つたため、ルナチャイルドは新聞で最近の騒動を知っていたため反対したのだが。

「そういや、ここには神なんてものがあるらしいな」

「紙？ そりゃ和紙ぐらいはあるだろ」

「違う違う。神、神様だ。あの連中がそんなことを話してたんだよ」

「おいおい。ド田舎だとは分かつちゃあいたが、土人の上に狂信者

かよ……」

「宗教なんて無学な人間の傷の舐め合いだからな。人間の程度が知れるってもんだ」

小銃を担いだ二人の兵士のすぐ前を、息を殺した妖精が横切る。が、彼らから見たら十分不審なこの少女が呼び止められることはない。

光を屈折させて姿を隠す。それが彼女的能力だった。

「ここね。ふふん、やっぱり楽勝だったじゃない」

林を抜けた先で発見したのはいくつかの簡易的な天幕。サニーマルクはその中の一番奥、一つだけ離れたものに忍び込む。

彼女達光の三妖精は人里や外から紛れ込んだ様々な物を拝借して利用している。よって人間の使用する大抵の道具は知ってるし、適当にいじっていれば使い方も分かるだろうと考えていた。

ところが今日はそう上手くはいかなかったようだ。

置いてあったのはよく分からない物や興味を引かれない物ばかり。地味な色をした人の背丈ほどの袋、これは恐らく寝具の類だろう。装飾の無い地味な食器。理解不能な単語がびっしりと並んだ本。

音を立てないよう慎重に、夢中に物色しているうちに、能力を無意識に解いていた。

「ん、ルナだったら喜びそうなんだけど」

そう言って彼女はインスタントコーヒーを手取る。

実際は、いつもルナチャイルドが持つてくるのとは似て非なる物なのだが、あのコーヒー通のように違いが分かるはずもなかった。

「仕方ない。これでも持って帰ってやりましょうか」

とんだ骨折り損だと顔をしかめて出口へ向かう。

しかし小さな手が伸びる寸前に、天幕の入口は開かれた。

「あつ」

「！？ なっ……」

中に入った大尉は目を見開いた。この際羽が生えているのは置いておくとして、陣地の内部に子供が入り込んでいたのだから。

「あわわわわわわ」

彼は慌てふためく少女よりも早く行動に移った。

「おっと、驚かなくてもいい。怒ったりしないから。それより腹は減ってないかな？ お兄さんについてくれば昼食を分けてあげられるかもしれないよ？」

落ち着いた顔を作って片手をゆっくりと少女の方へと差し出す。だがいくら人間の料理に目が無いサニミルクとはいえ、こんなことで丸めこまれるはずはない。というより話を聞いていない。

（かかかか、隠れなきゃ……いやいや、先に逃げなきゃ！）

そうして彼女の意識と視線が出口に向けられたその時、男の態度は一変した。

「こつちに来てって言うてるんだろぅがあっ！」

「いつ、痛っ！ 痛い！」

伸ばした腕でいきなり少女の手を掴み、強引に引っ張り始めたのだ。

急な事態にますます混乱するサニーミルク。彼女は咄嗟に、身を隠す能力を攻撃へと転用した。

「！……っつあっ！」

がみしやらに撃たれた光弾が男の肩をしたたかに打ち付ける。人を殺傷するような威力は無かったが、あまりの痛みに悶絶し蹲ってしまった。

「あ、これはちょっとかなりまずいかも」

いつもの弾幕ごっこは明らかに違う空気に、一目散に飛び出した。

姿を消して陣の外まで逃げだせたのはいいものの、油断して能力を解除してしまったサニーミルク。

幸運なことに、体が小さく空を飛べる彼女は未だ無傷だった。

葉が落ちた林の木々は身を隠すのに不便だが、それでも太い幹やたくさんの枝は銃弾に対する遮蔽物としてよく機能している。

「はっ、はっ、はっ……」

追いかける人間達には躊躇というものがなかった。

『戦闘地域において、子供だからと情けをかけるのは愚かな行為である』

それが経験則なのか建前なのかは定かでないが、確かなことは銃を構える彼らの顔が、悪戯や冗談では済まないと、暗に示しているだけだった。

「はっ、んぐっ、はっ」

つばを飲み込み、叫びたいのを堪えて先へと進む。

しかし盾代わりとなっているこの林にも当然終わりがある。

木々が途切れ、身を守るものが無くなった。前方に樹海があるが、たどり着く前に撃たれる。思い切って上に飛ぶのは………これも狙い撃ちにされるだろう。

へなへなと腰を落とす。

「あああ、きつとルナのカップをうっかり割って、ご飯粒なんかでくっ付けたから罰が当たったんだわ。……ごめんルナ。今度からはボンドを使うから」

万事休す、といったところで唐突にピントのずれた懺悔をする。

実はまだ余裕なのかもしれない。

そうしている間にも後ろから数人の男達がにじり寄る。

十メートルを切ったところで、少女のくせっ毛のある頭に銃口が

向けられたその時、

「止まれ人間！ これ以上、山の領域に争いを持ち込むこと罷り成らん！」

山が動いた。

「状況は？」

「追撃に当たっていた四名がやられました。敵は森に伏せていた者も含めると三十名前後。こちらの歩兵小隊は両方とも迎撃に出ています」

陣の奥、片膝を突き停止している巨人の中で若い少尉が無線越しに報告を受け取っている。

（なし崩し、だな……。だが始まったからには徹底的にやらせてもらおう）

陣への侵入や指揮官への襲撃が計画的なものとは考え難かったが、無視することはできない。相手がこちらの出方を窺っている中でこのような挑発に屈すれば、弱者とみなされますます立場が悪くなる。

妖精と山の妖怪が協調しているか否か、という点は彼らにとって
さして重要ではなかった。

「負傷した大尉に代わって私が戦闘指揮を執る。車両は下げさせる。
装機で前面に出る」

装機 強化装甲機と呼ばれる巨人の体内で機器を操作すると、
頭部の四角いスクリーン、巨人の目となるカメラが点灯。同時に膝
関節の駆動音が鳴る。それに合わせて周りで作業をこなしていた兵
達も退避していく。

そして徐々に苛烈になっていく銃声をバックに、二体の巨人が地
面を踏みしめ、敵を討たんと厳然と立ち上がった。

二十二話 忌々しき信義

地形的に不利な状況に置かれていた外来人の部隊だったが、戦闘が本格化する前に戦況を好転させることができた。

装甲車と輸送車両が後退すると同時に、林から木をなぎ倒しつつ現れた装機が攻撃を開始したのだ。

「国にまつろわぬ賊共……お前達に温情が与えられると思うなよ」

巨大な腕が構えているのは、黒色の厳めしい姿をした巨大な機関砲。その火力がこの場において存分に発揮された。

初撃のただ一発で木製の櫓が消し飛ばされた。

続いて樹海に伏せる哨戒天狗達が、断続的な制圧射撃で身動きを封じられる。着弾と共に、焼夷榴弾の熱と破片が破壊をもたらす。かろうじて砲撃を凌いだ丘の防御陣地と側面の天狗が妖弾を放つも、鋼の体を撃ち抜けず、表面で火花を散らすにとどまった。

「無反動砲！ 前方右、敵特火点！」

機体を先行させている少尉が指示すると、やや後方にいたもう一機の装機が、両腕に抱える大筒を肩にのせる。その狙いは妖弾をばら撒き続ける丘の横穴。数秒の後に、大筒の砲口部に閃光が走った。

だがそれは、砲弾の発射光ではない。

大筒が光の線に貫かれ爆散した光であった。

「光学兵器かつ！」

装機が頭部カメラを向けた光の発射元。日傘を手にした少女が一人、立っていた。

「あれがレティの言ってた機械人形か。幻想を殺す舍密の力、試させてもらおうかしら」

四季の妖怪が地を蹴って、銃火の真っ只中に躍り出る。

砲撃で見晴らしの良くなった妖怪の樹海東入口。

機械の足が進路上に散乱する樹木の残骸を踏み潰す。先ほどのレザーを警戒しているためか、左右へのジグザグ移動を織り交ぜながら動いている。

それに対して山林の中を縫うように低空で飛び、敵の射線をずらすとする幽香。開かれた日傘は持ち主の体を覆い隠す。

「これは、レミリアが自慢するだけのことはある」

パチュリーの手によって生まれ変わった”花”は、着弾で生じた爆風や金属片を確実に防いでいた。幽香の持ち手に伝わる衝撃も前より軽減されている。だからといって、常人が同じことをしようものなら手首と泣き別れになってしまっただろうが。

彼女はそうして守りに徹するだけでなく、空中に光弾を作り機械人形の頭に飛ばしていく。嫌がらせ程度の行為だったのだが、相手はバランスを崩すこともなく軽いステップで避けた。

起伏の多いこの場所でそんな芸当ができるのだ。どうやら図体の割に足回りは優秀らしい。

このように双方決め手の欠けた弾の応酬を繰り返していると、二体の機械人形が互いの隙をカバーし合いながらじりじりと退き始めた。

乱入者の相手にかまけていたが、彼らは味方歩兵も支援しなければならぬ。

ここにきて山の守備隊が反撃に転じていたのだ。当然幽香が黙って見過ごすはずもなく、速度を上げて追撃にかか

すると、大筒の誘爆で両手の機能を潰されていた方が彼女の行く手を遮り、両足外側、膝と足首の間に装着された三本組みの小さな筒を向けた。

気の抜けたような発射音

右側から射出されたのは煙幕弾。白煙を上げ視界を奪う。

左側からは円柱形の物体が放物線を描いて飛んでくる。その物体は空中で破裂すると無数の小型鉄球を撒き散らした。

「ッ！ 小賢しい！」

だが、対人用の近接防衛兵器では時間稼ぎすらできない。煙幕と鉄のシャワーがいとまたやすく突破される。

そこから一気に肉迫した幽香が、敵の懷に潜り込んだ。

いかに人間を模した機敏な動きが可能でも、あまりに接近されてはその巨体故にどうしても死角が生まれてしまう。

それでも敵を食い止め上官の機体だけでも味方の援護に行かせようと、腕を棍棒のように振りまわす。幽香の方も遠慮はしないとばかりに、至近距離から頭部や関節部に光弾を集中させた。

「もういい！ 先に退却しろ！」

弾の尽きた機関砲を投棄した少尉の機体が、幽香を部下から引き離そうと迫る。

「ぐっ、申し訳ない。必ずや、国家の敵に死を……」

傷だらけにされた体を引きずって幽香を振り払い、何とか数メートル距離を取ると、背に搭載したガスタービンエンジンを噴かせた。

そこに好機を見出した幽香。

上空への離脱態勢に入った虚をつき、急接近して肩を飛び越え後ろをとった。機内にいる操者からは、彼女が一瞬で消えたように見えただろう。

そして、構わず上に飛翔した機械人形に対し三発の光弾を放つ。

二発は背中の中の装甲に弾かれ明後日の方向へ。しかし一発は、狙い澄ましたかのようにエンジンの排気口へと飛び込んだ。

機体はそのまま上昇を続け、

空に、季節外れの花火が舞った。

「きつ、貴様あ！」

落ちてきた僚機の残骸を鬱陶しそうに避ける幽香に向かって、少尉はナイフを突き立て突進する。

正面から走り来る巨体を見て、先ほどから抜け目なく妖力を溜めていた幽香が手を伸ばしレーザーを放った。

照射
胸部の装甲が融けはじけ飛ぶ。だが倒れない。

照射
むき出しになった内部の機械が火花を放つ。
左腕を盾にして破滅までの時間を稼ぐ。

そして宙に飛び上がり弾幕を連射する幽香へ、ぐらつきながらも握ったナイフを伸ばす。

その刃は見事に彼女の右腕を捉えた。

左腕から放たれた光の弾に、胸を貫かれるのと引き換えにして。

「撃たれ傷付き、いつかは倒れるための人形、か」

転倒し炎を噴き出す機械の巨人に背を向け、幽香はその場を後にする。

「あの人と関わっていなくても、結局こんな目に遭ってしまうのか……」

嘆く櫛。しかしこうなった原因は彼女にもないこともない。

妖精を追いかけて回すという口実で山に入って暴れられてはたまらないと、人間達を制止しようとしたのは椛なのだ。

とは言え、ここの守備隊長である白狼天狗の青年はその行為に対し、追認するどころか「よくやった！　もっとやれ！」と、言わんばかりにニヤニヤしていた。

それはそれでやりやすいから助かるのだが、いい性格をしているものだと思っ

しばらく木々の隙間を低空で飛んでいると、退却中の装甲車が見えてきた。椛が無言で両脇の仲間に視線を送ると、それだけで意図を理解したのか二人とも左右に散る。

白狼天狗は仲間意識の強い種族だが、その種族特性は社会生活だけでなく戦闘においても恩恵をもたらしていた。

さらに近づくと、こちらに気付いた敵が車体上部のハッチを開けて防楯の付いた機関銃を向ける。

鉄の弾幕が襲いかかるが、椛は速度を落とさず上下運動で難なく切り抜ける。彼らは横に動くものならともかく、縦に飛び回る目標には目がついていけなかったのだ。

そうしている間に、機関銃手の右肩に紅の、牙のように鋭い弾幕が突き刺さる。

短い悲鳴を上げ車内に落ちる軍服の人間。続いて開いたままのハッチへ、左から妖弾がいくつも放り込まれる。それらは狭い車中で散々に暴れ、車のコントロールを奪い大木に衝突させてしまった。

「次に行くぞ。デカブツ以外はできるだけ我々で処理しろと、上はお達しだ」

生き残った乗員に止めを刺した後、勝利の感慨も高揚もなく指示

する椋。

地の利を熟知した彼女達が敵を分断した今、戦闘は掃討戦の様相を呈していた。

彼らは現代軍の例に漏れず、移動手段が自動車化されていた。だが履帯ならともかく通常のタイヤで走る彼らの車両では移動経路を制限されてしまう。

それを狙ったかのように倒木で道を塞がれ、部隊は下車を余儀なくされていた。

その上、彼らにとっての脅威は山の妖怪だけではなかった。

血の臭いに誘われたのか、それとも最初から機会を窺っていたのか、野生の獣達が落ち武者狩りのごとく襲ってきたのだ。外でも見かける獣もいれば過去に絶滅したはずの獣もいた。中には獣と呼んでいいものか、全く見たことのない生き物まで。

追い払う度に、空の葉莢と疲労と焦燥ばかりが増えていった。

（だからこんな任務は嫌だったんだ。何が『経験豊かな精兵達』だ。兵隊は、映画のヒーローじゃないんだぞ！）

森の中を、車両も従兵も失った敗軍の将が痛む体に鞭打ちながら彷徨っている。

もはや任務はおろか身を守ることすらおぼつかない。しかし、そもそもこうなつた原因は……

「こんなことになるのなら、ガキ一人に欲を出すんじゃない……」

後悔しながらも、少しでも山から離れようと足を速める。

そして森を抜け崖の上から目にしたのは巨大な防壁。木製だがそれなりの建築技術が使われているのが分かった。

その壁の内側には街がある。とても集落とは呼べないような大きな街。

「今更……今更見つかつて……」

今の彼に戦力は無い。

無力な現地人達を化け物から守ってやり、崇めさせるための力が。万が一の際に、脅迫して屈服させるための力が。

「すぐそこに鴨がいるというのに……何のために、こんな僻地でっ」

膝がぐくりと傾く。

これからあの街に出向き、口先だけで懐柔する気力が湧かない。だがそれでも、やらなければ待っているのは、死。

体に鞭打ち再び歩き出す。

そこで、背後に気配を感じた。

「……何の真似だ？ 少尉」

「それは私の台詞です、大尉」

自身の部下が立っている。手に握った拳銃をこちらに向けて。

「そんなことのために戦闘になったのか。作戦中に、同胞が死んでいる時に、そんなことを考えていたのか……」

脇腹は真っ赤に染まり、顔は青い。しかしその眼光は未だ死んではいなかった。

（冗談じゃないぞ。お前らみたいな狂信者共に付き合っているのかよ）

こんな任務に何故そこまで尽くせるのか。

「白崎混成中隊は、敵性勢力との交戦で壊滅。士官は全員、戦死……！」

理解はできるが共感とはとてもできなかった。これではまるで、自分達が忌み嫌ってきた宗教のようではないか。

（どうして、女を囲おうと思っただけでこんなことに！ どうして！ どうしてっ！）

山の戦闘に介入した以上、終わった後で厄介なことになるだろう。そんな幽香の予想に反し、白狼天狗の守備隊長は二、三言葉を交わしただけで去っていった。

「紫の言ってた通り、事前に話をつけてたのね。まあ、面倒事は適材適所で任せましょうか」

事後処理で慌ただしい樹海の中、紫からの依頼を果たしたことを確かめて帰路に就く。

（それにしても、紫も抜かりがないわね。式に獣を扇動させるなんて。おかげで私はお目当てのものに専念できたけど）

彼女が興味を持った機械仕掛けの人形。当たり前だが、それは幻想郷の一般的な人形とは色々な意味でかけ離れていた。

「でも、やっぱり人形は金髪か黒髪のオーソドックスなタイプが一番よねえ。変に凝ったものよりも」

人形は意味も無く人の形をとっている訳ではない。祭祀に用いられたり、神社仏閣に持ち込まれたり、そこには何かしらの意図が込められているのだ。

しかし、本来託された役目を最後まで全うできる人形が、この世の中にいったいどれだけいるというのか。

二十三話 境界の社

昨晚降っていた雪が境内や瓦葺きの屋根に薄らと積り、白い化粧を施している。

幻想郷の東の端、厳密には幻想郷と外の世界との境界に位置する博麗神社では、雪かきもそこに切り上げた巫女が縁側で温かい緑茶を楽しんでいた。

博麗神社は結界の要となる場所である。しかしこの巫女、博麗霊夢は、人里とは妖怪退治屋または買い物客といった関係の方が強い。

とは言っても、「最近の神はフレンドリーな方が受けは良い」などと神自ら言ってしまうのが幻想郷だ。この地の宗教の在り方に、あまり決まった形は無いのかもしれない。

「掃除はともかく雪かきはちゃんとしたらどう？」

上からの声にわずかに首を上げる霊夢。

「あー、その内ね」

「その内やろうは馬鹿やろう、よ」

その言葉と共に、軽い手荷物を持った幽香が庭先に軽やかに足を着けた。

そのまますたと歩いてくると、勝手に縁側に腰を下ろして手荷物 バスケットの中身を広げ始める。

彼女は山での戦いで利き腕が使い物にならなくなっていた。しかしその日は不自由したものの、一晚寝たらすっかり元通りに。

吸血鬼には劣るが幽香を含めた他の妖怪達も再生能力を持っている。当然天狗もだ。

とは言え再生、治癒速度には個人差がある。そう何度も重傷者を出す事態になったとしたら、さすがに山の警備体制にも遠からず不備が生じるだろう。

「やつぱり結界の方に問題は無いようねえ」

「そんなこと確かめにわざわざ来たわけ？ 問題なんて無いわよ。藍も時々確認してるみたいだし」

お互いバスケットの中の焼き菓子に手をつけながら、世間話でもしているかのように大事に触れる。

「あんた達こそ、最近派手に暴れ回ってるそうじゃない」

霊夢が横目で見ながら問う。ここで言う『暴れ回る』とはスペルカードによる揉め事、争い事の事を指しているのではない。

「私はやることやってるだけよ。そうね……妖怪同士の詰らない抗争ぐらいに思ってたて頂戴」

「妖怪ねえ」

幽香の言葉はある意味では、幻想郷の人間から見れば的を射たものだった。

幻想郷が明治の初めに外から切り離され百年以上が過ぎた。当然、そこに暮らす人間は国民意識というものとは無縁だ。そのため、外から来たばかりの人間に対して同族意識を持つことは稀である。

その一方で、外来人からすれば人里の昔ながらの光景は”生きた歴史資料”と言っても過言ではない。だが、彼ら外来人が過去の自分達に重ね合わせた場所は、似ているようで全く異なる世界である。

そのような心理的なギャップこそが、目立ちはないが両者を隔てる決定的な要因の一つとなっているのだ。

「それよりもこっつてお茶以外には、紅茶とか珈琲とかは置いてないの？ いや、別に嫌いではないんだけど」

いつの間にか出されていた湯呑みをすすりつつ幽香が尋ねる。

「何よ。冬は熱いお茶と決まってるでしょ」

「貴方一年中似たようなこと言ってるじゃない」

「あのねえ、お茶と言っても茶葉とか淹れ方とかで大違いなのよ。料理と同じことね」

すると、幽香は意味ありげな、深みのある笑みを浮かべる。

「そうね……それは同感だわ、とても。私だって、シャーベットアイスと冷凍お粥ライスが全く別の食べ物だって知らなかったもの……」

その目はどこか遠くを見ていた。

「は？ 冷凍……何だって？」

「ふふっ、聞きたいのね？ そうでしょう」

「あっ、やっぱいいわ」

すぐに興味を失くして立ち上がると、湯呑みを持って部屋の中に入っていく。

「これから里に行くんだから、用が無いならさっさと帰りなさいよ」
「買い物かしら？　ならちようどいいわね」

奥から届く声を聞くと、気を取り直した幽香が縁側を離れ境内に出る。腕に提げるバスケットは買い物かごへと早変わり。

「何がちようどいいんだか。面倒臭い」

八雲の式、藍の一日は多忙だ。
主の代行で結界を監視、調整したり、猫の里に赴き自身の式、橙の妖獣としての修練を陰ながら見守ったりと。

「あー……っ、もうっ！　あんた達言うこと聞きなさいよ！
ほら、マタタビ、マタタビ！」

「ニャ……」

「ニャア……」

「寝るな！　起きろオ！」

「（橙よ……強く生きるのだぞ）」

自分が出ていって何とかしようとするれば、また紫にお置きされかねないので、仕方なく木陰から見ているだけの藍。

そこにあるのは特に何事も無い日常である。

こうしてこの日は早々に午前中の予定をこなし、主の下へと帰還していた。

「……は？ 結界の監視は今週一杯まででいいですって？」

そんな彼女を待っていたのは主の意外な指示。

「ええ。もちろん定期メンテナンスは今まで通りに続けてもらうけど」

畳の上、扇子を開いて口に当てている紫が平然とした様子で方針の変更を伝える。

藍の方はというと、それを聞いて、ほんの一瞬だけ頭の中でぐるぐると思考を行う。そして少しばかり言い淀む。

「水際の撃退は、諦めるのですね」

「あちらが結界自体に興味を持ってるならそれもありだったのだけどねえ。どうやらそうではないみたいだし。ともかく、今後は里を中心に動きなさい」

そう言われると、是非も無い。口惜しさを残しながらも、藍は命令を復唱後、立ち上がって屋敷の外へ出ようとする。山との情報交換に向くためだ。

「そうそう、それから里のお揚げは一日十枚までだからね」
「ぬぐぐつ、分かってますよ！」

「こういふところは何時まで経っても子供扱いなのである。」

「椀、休暇取れたんだって？ 大変だったからね。」

山の上から流れ落ちる滝壺の淵。河童の少女が手にした工具で機械腕をいじっている。普段リュックサックに収まっているそれは、細いながらも強靱で、どうやって畳んでいるのか皆目見当がつかないほど長く伸びていた。

「ん……わたしやもう疲れたよ、にとり」

「何を年寄り臭いことを」

河童から少し離れて、平らな岩のテーブルの上。そこに置かれた大将棋の盤にグダツと突っ伏している白狼天狗。今は対局に興じようという気力も無いようだ。

「でも本当に大変なのはこれからさ。山は土砂を切り崩し土を盛れば取り繕えるけど、緑はそうはいかないからね」

戦いが終わり天狗の仕事が済めば、次は河童達の出番となる。陣地の補修、敵味方の装備の回収、整地等……。壊すのはたやすいが、後片付けにはそれよりずっと多くの時間が浪費されるのだ。

「地位も名誉もいらないから、もつとまどろみが欲しい。時間を増やす機械が自分を増やす機械を作ってよ」

「どうしろって言うんだ……。あ、腕を増やす機械なら」
「のびーるアームは嫌です」

親友には悪いがあれを背負って生活するのは流石に遠慮したかった。

主に見た目の問題で。

すぐ傍の滝から飛び散る水飛沫は乾燥した冬の空気に潤いを与えている。

そんな癒しの空間の、穏やかな時が流れる中で、盤上に肘をつき何となく指先で将棋の駒を立てたり倒したり。柊はこれ以上無いというほどだらけきっていた。

ところが、急に顔を上げたと思ったら鼻と耳を何度も動かし始める。そして傍らに置いていた太刀を掴み立ち上がった。

「柊？」

機械腕の整備を終えようとしていたにとりが不審に思っ手て手を止める。柊はそれに答えず、彼女に背を向け少しづつ後ずさる。その間にも、首を動かさないまま視線をあちこちに向けていた。

二人の距離が縮まると、怖がりなにとりが柊の袖を握って周囲をキョロキョロと。

やがて彼女達の五メートル前の山林に小さな人影が薄らと現れる。

「げえっ！ 妖精！ …… って、何だ妖精か」

白い洋服にくせつ毛の髪を持つ日光の妖精、サニーミルクが木の隣に立っていた。

「え、え」と……」

「はあ、また来たのか悪戯妖精。この前怖い目に遭ったばかりなのに懲りないなあ」

そう言つと太刀を握る手の力を緩める椀。身構えて損したとばかりにとっしりと腰を下ろして胡座をかく。

一方の妖精は少々まごつきながらも近寄っていき

「あの時は助けてくれて、ありがとうございます！」

と、元気よく声を上げ白狼天狗を面食らわせる。

確かにあの時はこの妖精を助ける形になったが、椀としては山に近づこうとする人間を追い払うための行動だった。

だがそれとは関係無く、小銃を振り回して妖精を追い回す者達に嫌悪感を覚えたのも事実。

「別に……礼を言われる覚えは無いよ。私は山の仕事をしただけだし」

素っ気無く返す。

ところがその白い尻尾が微妙に横に揺れているのを目敏く見つめる者がいた。

「おおう？ もみっちゃん、さては照れてるね？」

「な……！ 何言い出すんだよ、にとり！」

「私に隠し事はできないのだよ。ウフフフフ」

椀に肩を掴まれ揺さぶられつつも不敵に微笑む河童娘。漫才みないな二人のやり取りを眺めていると、逃げ込んだ先がここで本当に運が良かったと、サニーミルクは改めて実感する。

が、今回の経験を戒めにしてこの悪戯妖精が自制するかというところ、全くそんなことはないのである。

二十四話 革新

東の端の神社から西へ進むと人里がある。山道を下りなければならず、途中の小道にはたまに妖怪も出没するが、空を通ればさしたる苦も無くたどり着く。

霊夢と幽香もすぐに里に入るつもりだったのだが

「……おかしいわね。私には平坦な土とその上に生えている草しか見えないんだけど。というか、本当にこっちだったかしら？」

「確か、前にもこんなことがあったわ。うん」

着いた場所には里の影も形も見当たらなかった。あれだけ大きな街なら飛んでいるうちに視界に入りそうなものなのだが。

しかしずっとこうしている訳にもいかず、二人はとりあえず地上に下りていく。

「……いいところで来てくれたよ。本当に」

そこは、ちょうど里の中央門があつたはずの整地の上。

「あら、先生」

「ほらやっぱり。ろくでもない事になってるんじゃない」

青い冠を被った少女が出迎える。

「つまり、妖怪の集団にいきなり田んぼを乗っ取られたから里を隠して様子を見ていたと」

「端的に言っとそうだな。急にやって来たから満足な対応ができなかったようだ」

人里の中にも畑はあるが、全員の食糧を賄うだけの農地は到底確保できない。そのため、里から歩いて7、8分の所に農業地区が設けられているのだ。そこには納屋や一時的に保食糧を保管するため、倉庫の他に自警団の詰所も置かれ、農繁期でなくとも人の出入りがあった。

慧音から事情を聞かされる霊夢だが、その間幽香はというと、あちこちを歩き回りうんうんと首を縦に振っている。

「これが歴史喰いつてやつか。ふーん、不思議なものねえ」

「気に入ってくれて何よりだ」

普段目立たない能力だけに、こつとも興味を持たれると少し嬉しい。

「とにかく、妖怪の正体も分からないし人質を取られているかもしれない以上、自警団も下手に動けん。すまないが向こうの様子を探ってきてくれないか？」

霊力の剣を携えた慧音が言う。

「探るだなんてケチなこと言わずに、どうせなら討伐の依頼にしても構わないわよ？」

「それは、頼もしいな。……田畑はまた作ればいい。人死ににだけ気をつけてくれと、里長も言っている」

離れているとはいえ農業地区も里と同じく保護の対象になっている。そこに手を出したのであれば遠慮のいない相手なのだろうと、幽香はそう判断した。

「ざっと二十つてとこね。それも見覚えがあるのばかり」

丘の頂で屈み込み、眼下に広がる水田地帯を見やる幽香。農道の脇、納屋の傍、倉庫の出入り口と、各所に立っているのは灰色の体躯と翼を持った妖怪達。

「どうしたものかしらねえ」

後ろから霊夢がそう言うのと、振り返って答えようとする。

「私に腹案が」

「そのまま腹にしまつてなさい」

「ちよつと」

「どうせここから砲撃とか歩いて行つて砲撃とか空から砲撃とか、そんなところでしょ」

それは当たらずとも遠からず。

「けど、乱戦になったらどの道無駄な被害が出るわよ？ だったらさつさと片を付けるべきね」

「そりゃあんたの誘導弾が下手だからだ。そうね……とりあえず正面から行つてあいつら引き付けて来なさいよ。その間に私が中に入り込むから」

「じゃあそれでいきましょう」

体のいい罔だが、特に不満は無いのか了承する。
そしてそれぞれ別の道から近付くために丘を下りていく。

「いきなりバカス力撃つんじゃないわよ」
「はいはい」

農業地区中央。外周に倉庫と納屋が建ち並ぶ中央広場に人間達が集められていた。農家に自警団員に倉庫の改築に来ていた大工。その数十人。冬には最低限の人間しか置いていない。

彼らは抵抗もせずに地に座り、襲撃者である妖怪に囲まれていた。

「これで全員だ。抵抗もしない」

代表として大工の青年が前に出る。

それを立って見下ろしているのは妖怪の首領。人間………のような者。頭髮や肌は手下の妖怪同様灰色で、尖った耳を持ち、黒の騎士甲冑を身に着けている。

「改めて聞く。お前達の街はどこにある？ 妖怪共の傀儡の街は」
「……なあ、馬鹿な真似は止めないか。剣や銃を振り回して脅しても、ここで思い通りなることなんてありやしないだから」

そんな青年大工に目を細める騎士。

「そうか。飼い慣らされ支配に慣れきった、犬というわけか」
「何だって？」

予想外の言葉にある者はいきり立つ。

「先輩イ！ 何で、こんな奴の言うとおりになんか」
「待て。落ち着け恭牙」

後ろから声を荒げる少年をなだめつつも、視線は相手の意図を測ろうとする。

「……このルールとやらは知っている。人間は牙を抜かれ、人外は自ら牙を捨てた。成長を放棄し停滞を選んだ者など、畜生と何も変わらん」

「それで戦争ごっこ革命ごっこでもやろうつてのか。……すまないが他所でやってくれ。里にはそんなことを望む奴なんて、いないんだよ」

青年の言葉に、籠手をはめた騎士の右手が向けられた。伸ばした人差し指の先には暗く、禍々しい球が浮かぶ。そして一瞬だけ輝きを放つと、

「ぐうつ！？ くつ」

「なかなか丈夫だな。足の一本ぐらい吹き飛ぶと思っただが」

球が太股を打ち、赤い液体を地に垂らす。

「せつ……せんぱあいッ！」
「俺は平気だつ。だから、早まる、な」

青年はずり落ちそうになる体を両腕で支え、声を絞って他の者達を制しようとする。今ここで手を出させる訳にはいけないから。

「言っておくが、これは交渉じゃない。勧告だ。もう一度だけ」

納屋や田畑を越えた向こう側。

空気を震わせる派手な爆発音に、その場の全員が気を取られた。

農村入口。荷車が通れる程度には広い農道に、すり鉢状の穴がぽっかりと開いている。その後ろには農道を守る妖怪が三。

「さて、こっちに集まればいいのだけれど」

穴を挟んで幽香と対峙する者達。これで二度目となるが改めて近くで見ると、硬質の肌は爬虫類に、嘴と翼は鳥類に、そして見方によつては西洋の竜にも似ていると感じられた。

幽香は三発ずつ二組、計六発の光弾を目の前に作ると、前方に向けて射出する。

三つ固まっていた弾の軌道は宙を翔けるうちに段々と横へ広がっていく。

そして農道に陣取る三つの目標にそれぞれ迫っていき、

「……………」

すんでのところでかわされてしまった。

時間差を置いて到達した後続の弾も結果は同じ

（これは、個体差なんてものじゃない。前より強くなってる……）

穴を飛び越え、そのまま低空を滑空し襲ってくる妖怪達に、幽香が気合を入れ直す。

「同じ顔だから期待してなかったけど、嬉しい誤算だったみたいね」

そして前に大きく跳躍した後、落下しながら灰色の頭に手刀を振り下ろすと、滑空してきた敵は急制動を掛けた。

妖力の込められた斬撃を、頭上で交差された腕が受け止める。地を踏みしめた妖怪の足がじりじりと後ろに下がる。数秒で制止しこのまま膠着するかと思われた矢先、「ニヤリ」と、幽香の端正な顔が歪んだ。

密着した状態で外へと溢れだす手刀の妖気。

田園風景に再び空気の爆ぜる轟音が鳴る。

辺りには土煙が噴き上がり見通しが利かない。だが遮る物のない上空の様子ははっきりと分かった。

仲間がバラバラにされたのを見るや、二体の妖怪は空高くに飛び上がる。そして見上げた幽香に隙を与えず妖弾を撃ち放った。

ビー玉大の小さな弾がばら撒かれ、土を打つ様はあられのよう。

幽香は弾を避けながらも、頭上を大きく旋回する敵を叩き落とそうと機会を窺っていた。ところが、農業区各所に居た妖怪達まで空に上がっていることに気付くと、反撃を中止し左手の日傘を開く。

「おっと、撒き餌の仕事があっただった。……………さて、これからどうするのやら」

時を同じくして、中央部から外れた納屋の一つ、農具小屋に霊夢の姿があった。地上も空も監視の目があるというのに誰にも気付かれてはいない。

「人質の方は大丈夫みたいだから、次は……」

遠目で見た限り、人間達は一箇所に集められているものの、捕縛されてもいないし盾にされる様子も無い。

しっかりとした籠城設備があるならともかく、このような場所ですぐに人質をとっても重荷になるデメリットの方が大きいと判断したのだろうか。

中央部から離れ、農道を進む霊夢が空を飛び回る者達に目標を定める。

幽香に弾幕の雨を降らせる妖怪。その数、十に増えていた。傘を差して防御に徹していたらだんだんと弾の数が増えて身動きとれなくなった、というところか。

「まあ、このぐらいか」

霊力で作られたお札を片手に五枚ずつ持つと、上に向かって適当に放り投げた。すると、札が大きく曲線を描き、一番近くを飛んでいた妖怪の横っ面に直撃する。

予期せぬ奇襲に残りの者は散っていく。

左右に小刻みに旋回し、宙返りし、後を追って来る札を振り払おうとするが、それでもしつこく食らい付いてくる。そこで、振り向

きざまに光弾をぶつけて相殺し、ようやく難を逃れられた。

その直後、背中に一発の直撃弾を受けて叩き落とされてしまう。

その場を動かず作業的に札を放ち続ける霊夢。地上に待機していた妖怪が彼女を見つけると背後から近寄り掌をかざす。

だが、そこから弾が撃たれる前に巫女の姿はかき消える。

敵を見失った時の定石通り、妖怪は自身も身を隠そうと近くの納屋の裏に回り込む。

そこに待っていたのは宙に走った亀裂。

亀裂から突き出された木製の棒、大幣が眉間を打ち据え灰色の体を吹き飛ばした。

亜空穴 ” こちら側 ” とは異なる空間の抜け道。

この零時間移動によって、霊夢は敵の懷に侵入していたのだ。

（意図せずして、最も効率良い退治を成す。これが博麗の性質の一端……。いや、もしかして私の効率が悪いだけかしら？）

巫女の射撃で妖怪の動きが乱れると、幽香は弾雨の拘束から抜け出した。アミユレットの追尾と悪戦苦闘する敵を無視して先に行く。

「残りは広場よ。あいつらの親玉もいるかもね」

すれ違いに掛けられた巫女の声に従い更に先へ。

中央部に着くと、眼下には残りわずかとなった監視の妖怪を追いつまう人間達。

そこから田畑を越え農業区の際をも越えたところで、ようやく親玉らしき者に出会えた。

「わざわざ待つてくれるなんて、助かるわ」

長剣と五角形の小盾を構えた、澄んだ青空には不釣り合いな装い。自身の到着を待っていた敵を前にして、幽香はわざとらしい台詞を吐く。

彼女の言葉を意に介さず、騎士紛いの男が剣を水平に振るうと五つの黒球が生み出された。一つ一つが電光を纏う黒球は、一度四方に散らばった後、幽香の周りを囲むように飛ぶ。

それらは独立した意思があるかのように不規則に、縦横無尽に接近と離脱を繰り返しながら、発光と共に電撃を放出してきた。

「幻想郷は、断罪されなければならない」

球を放った本人は元いた位置で盾を前に突き出したまま。

視界の内外から襲ってくる移動砲台に、幽香は光弾の速射で迎え撃つ。しかし彼女の弾幕が大したダメージを与えられない一方で、相手の電撃は満足な回避も防御も許さない。

「怠惰で、お遊びにうつつを抜かしてばかり。ここには進歩も成長もない」

幽香の移動を牽制していた五つの球が、やがて彼女の真上と前後左右に陣取り停止した。

いつそう強く輝く雷光。

そして五つ全ての球体から同時に伸びた稲光が幽香を中に閉じ込めた四角錐を形作っていく。外に抜け出そうとすると、その都度絶え間ない雷が周囲に流れた。

「愚かの極みだ。生き物の向上心は智の証明。成長を止めた存在に、知性を持つ資格など無い」

空中に現出した不可視の檻が裁きを下す。

「成長して得た結果がそれなら、とんだくたびれ儲けね」

電撃で焼け焦げた服の袖。そこから伸びる手の上に黄色い花が咲いている。妖力で構成されたそれは、幽香から離れて檻の面に達すると瞬時に雷に打たれてしまう。

しかし、

「これは一体、何の手品だ？」

「さあ、何かしら？」

最初は手に納まる程度だった花が、雷を浴びる度に膨らんで、その直径はあっという間に人の背丈を超えていく。

そうして一軒家ほどの大きさになった途端、吸収の限界に達した花は破裂した。

強風と衝撃に耐え切れず吹き飛ばされる黒球。

檻は自ら発した雷を養分に利用され自滅したのだ。

破裂と同時に、花についていた花弁も飛び散っていた。そのうちの一つが正面から縦回転しながら向かって来たため、騎士は長剣を一振りし妖力の塊を打ち消す。そして剣を振った勢いのまま、体を90度左に回転させると手に持つ盾を光弾の衝撃が襲った。

花の崩壊に乗じた幽香が側面から切り込んできたのだ。

首を狙った切り払いを屈んでかわし懐に入る。横から決るように拳を叩きつけ、金属の甲冑を強烈な振動で揺さぶる。

騎士は顔が苦痛で満ちながらも、盾で幽香の肩を強かに打った。

「がはッ！」

口から空気を吐き出し高度を落としそうになる。

しかし持ちこたえて再度同じ場所に拳を放つ幽香。

「怠惰でありながらこれだけの力……。これが、天賦の才だともいうのか」

騎士の中で、屈辱と羨望と感嘆が緋い交ぜとなる。

満足に剣を振れない至近距離、腕を掴んで盾の動きを封じた後に、幽香は三度目の殴打を脇腹に飛ばした。

「自分自身の脆弱さを才能のせいにはしない方が良く。余計に、見苦しく見える」

体中を襲った衝撃に気を失い落下していく鎧の男。それを目で追いながら、伸ばした右腕を動かしゆっくりと狙いをつけていく。

そして手に光が灯った直後、眼前に開いた”隙間”に思わず腕を下げた。

「そう、それでいいわ。せっかくの情報源なんですもの」

その胡散臭い声に熱気を失い、幽香はいつもの調子を取り戻すのであった。

二十四話 革新（後書き）

敵のオリキャラの台詞を考えるのは楽しいのですが、あまり熱中し過ぎると馬鹿っぽくなってしまうのが難点です。

番外編 魔界島土佐渡

時は遡って秋の中頃。

外の世界、本土から北に34キロ。南北の山地を中央の平野で結んだ、ひょうたん型の離島がある。

佐渡島

科学全盛の時代において、今もなお幻想の残滓蠢く神秘の地。その北部中央に位置する島内最高峰の山、金北山に、一人の女性が訪れていた。彼女は山頂からレトロな丸眼鏡越しに、視界に広がる連峰を見渡している。

「暫く空けていたが、さて」

彼女、ニッ岩マミゾウは妖怪である。それも、外の世界と幻想の世界を自由に行き来できるという特異な妖怪の一人だ。

「何やら珍妙な違和感を感じるが……とりあえずは、あそこじゃない」

港湾地区に面した佐渡東部警察署は島の東半分の治安を預かっている。

大層な凶悪事件など滅多に起きない佐渡ではあるが、ここに勤める警察官達は今、非常に頭の痛い案件を抱えていた。

始まりは市民からの「高山植物が荒らされている」という通報だった。そのようなことに警察が本腰を入れるなど、普通は考えられない。

問題は、山林を見回っていた朱鷺保護センターの職員が何者かに襲撃され重傷を負った、という事件である。

万が一にも特別天然記念物、野生絶滅種の朱鷺が人に襲われるようなことがあつてはならない。佐渡の沽券に関わる。

そんな訳で彼ら佐渡警察は、市をはじめ様々な方面からせつつかれているのであつた。

「後頭部を一撃。声も聞いていないし顔も見えていない、か」

刑事課強行犯係のデスクにて、椅子にもたれ掛かる40過ぎの男。どこかたびれた印象のあるスーツを着てうだつの上がらなような表情をしている。

「あまり考えたくはないけど、地元の間人かもしれないね。かなりの土地勘がある」

若い刑事がそう言うと、低い声で唸り、少しばかり白髪が交じり始めた頭をかく。

「とにかく、早いとこ資料をまとめとけ。飯食ったらずくに現場だ」
「分かってますよ、おやつさん」

それから少しして部屋の扉が開かれる。昼食の出前、蕎麦が届けられたのだ。配達にやって来たのは彼らの顔見知りだ。

「ああご苦労さん。久しぶりだなあ、窪田さん」

「なあに、ちょっと野暮用で本土までね。旧友に会いに行つてたんじゃよ」

そう言つて慣れた手つきで配膳を始める。

マミゾウは変化の術と偽名を使用して昔から人間社会に紛れ込んでいた。この時代になつてもこのようなことを続けている妖怪というのはやはり珍しい。

ちなみに今は飲食店の経営などに手を伸ばしている。

「さてと、用が終わつたらとつと帰るとするかね。刑事さんお勤め頑張つてくれよ。商売がやり易くなるようにね」

「あまり期待されてもなあ……いや、市民の安寧のために全力を尽くす所存であります！」

「署の中で何てこと言おうとするんだい」

「俺よりも若いのにしつかりしてますよねー。低金利で金貸しなんかもやってるんでしたっけ」

「そうだな。口調もそうだが、うちのカミさんと同じくらい貫禄があるぞ」

「しかし何だつてここには自分で配達にくるんでしょうかね？ ……

…もはや！ 俺に気があるとか」

「寝言は布団の中で言おう、な！」

部屋を出たマミゾウ。彼女に帰る様子は無く、未だ署内に留まっ

ていた。警察官の姿に化けた状態で。

「山を荒らす不心得者、か」

彼女が警察に出入りしている目的。それは情報であった。

警察署には犯罪を犯した者や行方不明者に関する雑多な情報が集まってくる。そういった人間の恐怖の感情は妖怪にとっての好物。

彼女はここで化かす対象を選定しているのである。

（朱鷺に含むものはないが、ちょっとこいつを調べてみようか。ここに着いた時から山が気になってたしのう）

為すべき事を終えて無人の部屋に入ると、彼女の体は白煙を残して忽然と消えた。

事件の現場となった山林では木々が紅葉を帯び始めていた。近くには切り立った断崖があり、その上ではごく稀に放鳥した朱鷺が羽を休めるに來ることがある。

可能な限り自然を残そうとした結果なのか、登山道から少し離れたと、慣れぬ人間には相当な難所となるだろう。故に何がしかの痕跡が残っているはずなのだが。

「手掛かりゼロかい」

警察署の門に背中からもたれ掛かる「おやっさん」。山から下りて戻って來た時、既に日は傾いていた。

聞き込みをしようにも周囲の人家の数はたかが知れている。そうになると、次は現場の”物”に聞くことになる。

「次から範囲を広げるか…… つつても、このちんまい署で山ん中ガサ入れするなんざ、無理があるだろ」

溜め息の後、空のコーヒー缶をゴミ箱へと放り投げる。

これから署内で楽しい楽しい書類業務が待っている。役所勤めの身としてはむしろこちらがメインと言ってもいいだろう。そうして門を潜ろうとした時

「すまない、少しよろしいか？ 道を尋ねたいのだが」

背後から声を掛けられた。

「ハルトマンさん…… ドイツの方ですか。それにしても日本語が上手ですな」

「ええ、この国に来てから長いので」

バス停への道を聞いてきたこの金髪の男性、どうやら観光客のようだ。

「しかし、ここはいい所だ。緑は多いし、人はそれなりに信心を持っている」

「……そうすな。私も本土から渡って来て五年。開発に取り残されている、なんて言われることもあるが、結構気に入りますよ」

もちろん田舎が無条件で暮らしやすい、ということはありません。

自分から溶け込もうと行動しないと、まず馴染むことはできないだろう。

もっとも、刑事は”お役人さん”でもあるので、彼の場合そこまでの苦労は無かったのだが。

（五年……五年か。その割に、島にはまだ俺の知らないことがゴロゴロしてるんだよなあ……）

とある山林の奥深く。

日の落ちた今、辺りに人間の気配は無い。

「陰の気が、濃い。人食い妖怪が好みそうな空気じゃ」

闇の中、一人目を閉じて神経を研ぎ澄ますマミゾウ。

彼女にとって、ホームグラウンドである佐渡の異変を見つけることは造作も無い。しかしそれとは別に、困った問題が残っていた。

（どうやって下手人の居場所を知らせるべきか）

単に脅かして、恐怖を与えることは簡単かもしれない。だが、それだけやって後は放っておく、という訳にもいかなかった。自棄になって山の中で暴れられても迷惑だからだ。

（……奴さん達には悪いが、少々強引にやらせてもらうかね）

目を開くと、またも白煙に包まれ消え去った。

向かうは山の麓。

これから起こるであろう捕り物の、お膳立てをするために。

「おやっさん。ここ、どこですか？」

「……………知らん」

「何で一本道で迷うんですかー！」

「ええい！ それも知らんっ！」

山道をのろのろと走る覆面車両。

もうすぐ昼になろうとしているが、彼らが署を出たのは朝の9時。同じく事件現場を目指していた同僚達の車とはいつの間にかはぐれていた。

「だから運転代わろうって言ったのに……。疲れてるんですよ」

「疲れてなんぞないわ！ そこまで年じゃない！」

実際体力はまだ有り余っていた。捜査が本格化するのはこれからなのだ。

「ちっ、しょうがない。降りて様子を見てくるか」

車から出たその先は何の変哲も無い森の中。だというのに、体が強張るのは職業病のせいなのだろうか。

秋の涼風を浴びつつ車道を進んでいくと、脇に一人が通れる程度の獣道が目に残まる。二人の刑事はしばらく立ち止まった後、無言のまま、当然のことのようにそこへ入っていった。

それから5分、彼らは開けた土地に出た。

「ここって、例の廃工場じゃないか」

「あの幽霊が出るって噂の？ またとんでもない所に出ましたね…。どうしたらここまで迷うんですか」

その抗議の声を無視し、スッと工場跡に近づく。

「？ 油売ってないで、さっさと戻らないと」

視線で「静かにしろ」と促すと、工場の壁に沿って更に奥へと歩を進めていった。

「これはひよつとして当たり、なのか？」

ひび割れた窓ガラスから見えたのは二人の、若年とも中年とも呼べそうな男。それなりの登山装備に身を包み傍らには猟銃が。

「禁猟区に銃。猟師でもなさそうだし、ヤバそうな臭いがぶんぶんしますよ」

朱鷺の放鳥が行われたこの地域は全面的に禁猟区に指定されていた。猟はおろか猟銃の持ち込みすら禁止するほどだ。

これを始めとした保護政策は、一部の人間の市政への強い反発を招いているとか。

「連中ここを引き払うつもりか。応援は、待ってられんな」

「はあ……仕方ないですね。銃の所持規制が緩んで、俺らの発砲基準も緩んで。幸なのか不幸なのか」

刑事達は声を潜めて段取りを立てていく。内部にいる被疑者（候補）達は奥に座り込んでいて外の様子に気付いていない。そして話を終え、それぞれ入口の両脇に立つ。

「しかし、もし他に仲間がいたらどうするんです？」

その問いに頭をわしゃわしゃとかき、

「そんときゃあ、あれだ。二つ岩大明神にでも祈るんだな」

惘然とした顔で答えて中へと踏み入る。

「東部警察署の者だが、ちょっと話が聞きたいんだがね」

放置された資材の横で荷をまとめていた不審人物達は、不意に聞こえた声にハツとなる。顔を上げるよりも先に立てかけていた猟銃に手を伸ばすが

「そいつから離れろ！」

銃口を向けられ硬直する。

刑事二人が慎重に近づくと、男達の顔がはつきりと分かってきた。どちらも署で調べた、前科のある島民の顔とは一致しない。

「ここいらを荒らしていたのはあんた達だろ？ その物騒な物で何しようっていうのかも含めて、説明してもらわないとなあ」

そう言つて「おやつさん」は前へ出る。

出たところで、背中を冷たいものが流れた。

先ほど獣道を通つた時のような漠然とした感じではあつたが、勘に従い体を大きく横に反らす。

すると、天井の高い構内に乾いた音が響いた。

「うおっ！」

すぐ横を、弾丸が通り過ぎていったのだ。弾は後ろの方に積み上げられた鉄骨にぶつかかり火花を飛ばした。

窓の外には走り去る三人目の男の後ろ姿。外は念入りに確認したはずだったのだが。

「……そいつら押さえてろ」

「分かりましたよ。でも、深追いはほどほどにしてくださいよ」

この島は貧しい。

二次、三次産業の育成が進まず、本土に比ベインフラの整備も大きく遅れている。

力を尽くした競争の結果ならそれでも納得できるだろう。だが島の発展を妨げているのは、あろうことか”鳥”なのだ。

たかが鳥

数の少ない鳥の生態を守るといふ、愚かな自己満足のために人間が貧苦に喘ぐ。

これほど馬鹿げたことが他にあるのだろうか。

これほど馬鹿げた政策が何故まかり通るのだろうか。

（絶対に許してはならない）

深い森の中、足を止めた男。

その口は耳の付け根まで裂けていた。

「何が憑いているのかと思えば、牛蒡種とは。どつりで縄張りも分からん訳じゃ」

真横に立っていたのは妖獣。変化の術を解き、背後に大きな尻尾が見え隠れしている。

「妖怪……………貉あ」

「ああそつじや。理解したならさっさと去ね。おぬしのやり方は、ちよつとこの島には合わんからの」

そんな言葉に”それ”が耳を貸すはずもなく、腕をマミゾウに向けて叩きつける。

だが、そこに彼女の姿は無く、代わりに人の背丈ほどの岩があるだけだった。

”それ”はめり込んだ腕を引き抜くと、顔を上げ睨みつける。マミゾウは大木の太い枝の上に足をつけていた。

「過ぎた憎しみに付け入ったのか。……おぬしには無理やりにも出ていってもらうぞ」

挟まれた岩の岩塊を掴み、砲弾のごとく投擲してくる男目掛けて、靄のような白色の大きな弾を放る。

弾は飛んでくる岩塊をすり抜け、憑かれた体に覆い被さると、途端に男が苦しみ始めた。

「ッ！　ッ、アアアッ！」

声にならない声を上げ男の中の憑き物が悶え苦しむ。滅茶苦茶に暴れているにもかかわらず、周囲の草木に炎が広がる様子はない。やがて体から青白い炎が吹き出すと、短く小さな断末魔を発して膝をついた。

「幻術の炎。低級霊にはちときついじやろっ」

牛蒡種とは人の情念から生まれた憑き物。人間の体を借りずに物質に影響を及ぼすことはできないが、普通の手段で退治されることもない。

「ふーむ、後の始末は任せるとするか」

「動くな！ 銃を……………捨ててるな」

程なくして逃げた男に追いついてみると、猟銃を放り捨てて天を仰いでいた。後ろから慎重に近寄り顔を覗くと、何とも間の抜けた、茫然とした表情で固まっている。

ところが手錠を掛けようと肩に触れると

「離せ、離せええッ！」

腕を振り回し狂ったように暴れ出した。

なので右腕を掴んで後ろに捻り、顔と上半身を地面に押し付ける。

「ううつ……………この、環境派の、犬め……………」

「勘違いしてるみたいだが、お前さん達は動物を襲おうとしたから捕まるんじゃない。法を犯したから捕まるんだよ」

森の中には、連絡を受けた警察車両のサイレンが木霊していた。

「そこ被疑者通るよー！ 道あけて！」

「撮ってんじゃねーぞ！ マスゴミがあっ！」

先に捕まった二人は本土から来た人間だった。

主犯の男に「希少な高山植物をその道に売りさばけば金になる」と誘われたらしい。朱鷺はあくまでついでのつもりだったそうだ。調べれば本土での余罪が出てくるかもしれない。

一方その主犯格の、島出身の男だが

「人間の活動も自然の一部だ。我々が自然に遠慮する必要なんてない。それに動物だって必要のない殺しをすることもあるじゃないか。なのに、どうして人間が動物を殺して罰せられるんだ」

「……政治家でも目指した方が良かったんじゃないか？ まあそれは置いといて、保護センターの人間を襲ったのはなあ。一歩間違えてたら、死んでたんだぞ？」

すると男は、何を言っているんだと、鼻で笑う。

「そのことか。あれは、仕方ないことだった。あんな所で働いてるような、道理の理解できない人間には体で分からせるしかないだろう？ 子供の躾と同じ」

「そんな理由で……………お前は人を、殺すつもりかあッ！」

取調室の机をひっくり返し、思い切り床に叩きつける。

そこには昼行灯を決め込んでいる、いつもの不景気そうな顔はなかった。

「ヒイツ！ 官憲の分際で市民に暴力……ガアアアアアア！」

翌日、デスクで新聞を広げている刑事。記事では早速事件の詳細について書かれていた。

「全国紙に載ったのか。大したもんじゃないか」

「そりゃあ天然記念物が狙われたんだからなあ。動機はちやちなもんだったが」

後ろで新聞を覗いたマミゾウが感心するが、本人にとってはそう喜ぶような話でもない。

「けど、死人が出なかったから、それに関しちやあ上出来だったな」

警察官になって二十年以上も経つが、犯人を射殺する覚悟があるのかというと、偉そうに断言することは未だできなかった。

「それより窪田さん、また本土に行くそうだな」

「ああ。当分佐渡には帰らないじやろうなあ」

「ふーん。仕事が忙しいってのは順調ってことなのかねえ」

「その辺は想像に任せるよ」

そうしている間にも、仕事を終えたマミゾウは部屋を去ろうとする。だが出入り口の前まで行くと、ゆっくりと振り返った。

「余裕を持つのもいいが、これからもしっかりやってくれよ。刑事

さん達はこの佐渡の、英雄なんだから」

「ハルトマン少佐、休暇はいかがでした？」

「なかなか有意義だったよ。春でないのは少し残念だったがね」

「あそこは開花シーズンの山がウリですからねえ」

「まあいいさ。……ところで、我々の次の配属先はどこだったかな？」

「松本基地」

「長野県です」

番外編 魔界島土佐渡（後書き）

タイトルに深い意味はありません。

マミゾウが使っていた偽名は元ネタに出てくる医師から。

外の人間との共闘はこのぐらいが限度でしょうか。人食いなどの設定がある以上、外の世界からすれば、幻想郷との馴れ合いは本来許し難い行為でしょうしね。

二十五話 幻想郷史

幻想郷を覆う結界には性質を異にする二つのものがある。

一つは五百年以上昔、「妖怪拡張計画」に基づいて構築された物理的な結界で、世界各地の妖怪達を結界内に呼び込む効果を持つ。

もう一つは百年ほど昔に張られた論理的結界であり、こちら側の常識とあちら側の常識によって幻想郷と外を隔てる役割を果たしている。

ただ後者の結界に関しては順調という訳ではなく、当時の妖怪間で一悶着起きたのだった。

「 以上のように西洋との本格的な交流や武家体制の崩壊に伴い、外の世界との境界をより強固なものとするべく再び結界を張る計画が持ち上がった。しかし、これに異を唱える妖怪達が妖怪の賢者を中心とした推進派に反旗を翻すことになる。その中でもとりわけ凶悪だったのが、がしやどくろという妖怪だ。彼らは最終的に妖怪の賢者達の手で討ち取られることとなり……ふむ、今日の授業はこれまでとする」

教壇で弁を振るっていた少女が教室内に掛けられた柱時計を確認すると、歴史の講義は終わりを迎えた。

「先生、さよーなら！」

「はい、さようなら。前を見て歩くんだぞ」

十余人の生徒達がガヤガヤと声を上げながら学びの舎を後にする。それを見送ると、教材であるお手製の歴史書をしまい、一息ついてから寺子屋を出た。

あんな事件が起きたばかりだというのに、否、あんな事件が起きたばかりだからこそ、寺子屋はいつも通りに開かれていた。

幻想郷の人間にとって人里が一番安全であることに変わりはないし、守護者である慧音が居るのだから、生徒の親としては家にずっと置いておくよりは安心できるのだろう。

慧音が里の通りを歩いていると、見覚えのある大工の青年と少年が会釈をしてきた。

「やあ、どうも先生」

「もう出歩いても大丈夫なのか？」

足に包帯を巻き松葉杖をついている青年にそう尋ねると、彼はあっけらかんとして答えた。

「なあにこのぐらい、薬つけて寝てりゃあ治るさ。……さすがに自警団の方はまだ無理だが」

「当たり前だ。そんな足でのこの顔を出していたら追い返されるぞ」

慧音は呆れたように言った後、近況を簡単に聞いてから彼らと別れた。

「先輩」

「あん？」

「どうしてあの時、戦わずに降服したんですか？　少しぐらい抵抗したって……」

「そりゃあ、お前さんに偉そうに叱っておいて、その俺があそこに居た人間を危険にさらすなんてできないだろ。それにあんなことが上手くいくはずがないって、分かっていたしな」

「予定調和ってやつですか」

「そんなもんだ。……気に入らないか？」

「昔の俺なら意味も無く喚いてたかも。今はよく、分かりません」
「そうかい」

商業区の中央通りはある程度除雪が行われており、路面状態はそれほど悪くはなかった。

その上を、白い吐息を吐きながら進む慧音。彼女は一階建てのレング造りの建物に着くと、ドアを開けて中に入っていく。

建物　カフェの広々とした空間の中は、昼を大きく過ぎたためか人がまばらだ。そのためちよつと見回しただけで、待ち合わせていた人物を見つけることができた。

壁際の一番奥の席。服の上に白いカーディガンを羽織り、いつものナイトキャップの代わりに後ろの髪をゴムで一つに縛っている。その様子は普段の眠たそうな格好よりも幾分理知的に見えた。

慧音が席に近づくと、彼女、パチュリーは読んでいた分厚い洋書から少しだけ目を外す。

「すまない。待たせてしまったか」

「貴方は遅れてはいないわ。時間より五分ほど早かったけど」

椅子に腰を下ろす慧音に対して、パチュリーは時計も見ずにそう言った。

「早速だけど本題に入ってくれないかしら？」

「ああ、分かったよ」

少しの間の後洋書が閉じられる。

すると慧音が口を開き淡々と語り始めた。その内容は、パチュリーに依頼されて調べていた幻想郷の過去に関して。

「五百年前の結界が作られる際に幻想郷を出た人間の術師は、一人いた。”トヤマ”と呼ばれていた男だ」

「薬売り？」

「……いや、薬草学を修めてはいたが、関係はないと思うぞ？ 信濃の出身らしいから」

小首を傾げたパチュリーの言葉に少しだけ調子を崩される。冗談で言っているのか本気で言っているのか、非常に分かり難い。

「その人物は優れた妖怪妖怪退治屋で、神仙術、魔術、妖術を自在に使いこなしていたそうだ。それと、普段は温厚な性格だが、仲間が傷付けられたら容赦しなかったとか」

「何だか……絵に描いたようなヒーローね」

たかが一個人について、随分突っ込んでいるようにも思えるが、慧音が語っているのはあくまで歴史。ある面から見たら事実であっても、厳密な意味で真実であるとは限らない。

「結界のことを知ると、『狭い片田舎で停滞するのは嫌だ』という理由で幻想郷を出たようだ。その後の足取りは不明。ただ、彼の後継者が歴史の表舞台に出た、なんて話はないな」

「……そう」

話し終わると、一息ついて注文したコーヒーに口をつける慧音。

一方のパチュリーは半目になって思考を巡らせ、ぶつぶつと小声で一人呟く。

「全くの外れ、ではないはずよ。こちら側の関係者が何らかの形でメイスンに関わってるのは確実。今になって手を出してくる理由は分からないけれど」

侵入者達の使用していた技術からそう考えて、慧音に調査を頼んだのであるが、これ以上は推測の域を出ない。

「あまり役に立たなかっただろうか」

「そうでもないわ。手詰まりだったし、アプローチを変えてみることは無駄とは限らない。成果が挙がるとも限らないけど」

そこまで言うとな再び洋書を開き、その中に意識を向けた。

彼女は調査の結果よりも調査という行為自体に、その過程に関心を寄せているのかもしれない。

読書しながら追加の紅茶に手をつけ始めた魔女を前に、慧音が肩をすくめて席を立った。

農業区占拠事件の際、比較的里に近い命蓮寺は直接介入することはできなかった。里の人間達が、殺生を禁ずる寺の教義に遠慮して頼らなかったことが理由の一つである。もちろん余程の事態になれば、そんなことも言えなくなるだろうが。

そんな命蓮寺も事件解決後の農場の補修、整備には協力していた。この日はその作業も完了し、通常業務に戻ったところであつた。

「……………」

寺の敷地上空数メートルに、入道雲が浮かんでいる。

雲居一輪の相棒、雲山。

彼は一輪が寺務所で写経に集中しているため、邪魔をしないようにと外へ出ているのだった。

そんな時、敷地の隣、里に続く道を二人の男性が歩いてくる。猟の帰りなのか、金属製のボルトがついた猟銃を肩に担ぎ、息絶えた鴨を紐で吊るして持っている。

彼らは空に居る雲山に気付くと

「雲山さん、こんにちは」

「お疲れ様です、雲山さん！」

すぐに挨拶をしてきた。

「……………」

雲山の方は、地上の彼らにギョロリと両目を向けると、黙したまま「コクリ」と頷いた。

傍から見ると彼の様子はとても厳めしいと感じるだろう。だが決して怒ってる訳でも睨みつけている訳でもない。これが雲山の素なのだ。

二人も慣れているためか、怯みもせずに頭を下げ去っていく。

意外なことに、この入道雲は里の男達から結構な人気があったりする。頑固で無口で、実は心優しい彼の気性が尊敬されているからだ。

幻想郷における男から見た理想の漢の姿。それが雲山なのである。

一方こちらは寺の中。僧房の中央に位置する八畳居間の中で腕組みしている妖怪が一人。中性的な容姿、金と黒が入り混じった髪を持つ彼女は寅丸星。

正座して目を閉じていたが、背後の障子動くと同時にそちらに振り返る。

やって来たのは星の思った通り、二本の棒ロッドを抱えた部下の妖怪鼠だった。

「ナズーリン、今日の新聞がどこにいったか知りませんか？」

「何言ってるんですかご主人様。自分で戸棚の一番左にしまったんじゃないですか」

「……おっと、そうでしたね。失礼」

立ち上がって部屋の端の棚に向かう星。

それを見ながら、言おうか言うまいか、少しの間逡巡していたナズーリンが口を開く。

「疲れているのでは？」

身体が、ではなく精神が、である。

多数の妖怪を擁しながらも人里の人間に教えを説く命蓮寺は元々微妙な立場にある。

そこに、妖怪がルールを逸脱して引き起こした事件。普段から妖怪の保護を掲げてきた者達にとっては複雑なところだ。その妖怪が幻想郷で見たことの無い余所者だったからまだ良かったが。

「疲れてる……。そう見えますか。それは気を付けなくてはいいけませんね」

「いや、見える見えないの問題じゃなくて」

自身の頭をかくナズーリン。

星は柵から新聞を見つけると、背を向けたまま話を続ける。

「いいえ、重要な問題ですよ。隙というのは不必要に見せるものではない。特に大勢の前では」

「……ふむ、それには同感だ。分かった、と言っておきましょう」

ナズーリンから星の顔は窺い知れないが、彼女がいつも以上に冷静であることは、その声色や雰囲気から感じ取れた。

彼女達の頭を悩ませるのはそのような妖怪のことだけではない。命蓮寺が抱える最大の懸案事項の一つ。それは外来人の扱い。

幻想郷の人妖の平和は彼らが食料となることで保たれている面があるのだ。これはある程度の地位にある者や、頭の回る者なら大抵が理解していることだろう。

そのような平和を甘受している自分達

人食い妖怪達もそうでない者も、結局は運命共同体なのである。
ナズーリンは思案する。

毘沙門天が今の命蓮寺を見たら、何を思い、どんな判断を下すのか。

（また、黙認するだけなんだろうね。あの時のように）

確かな根拠はないが、彼女にはそう思えてならなかった。

カフェを出ると、慧音は雪が静かに降っていることに気付く。まだ降り始めたばかりなので地面の状態は悪くないし、すぐにでも止みそうなほど勢いが無かったので、今の内に我が家に帰ることにした。

吐く息は、雪に劣らず真っ白に。

「少し、寒いな」

大抵の妖怪は人間と比べて寒暖に強い。
しかしこうして声に出すと、心なしか本当に寒いと感じるようになっってくる。

そんな慧音に

「冬の寒空に懐炉はいらんかね」

よく聞き知った声。

人の少なくなつた通りの脇に、赤いリボンが何個も結ばれている
真つ白な長髪。

「！……妹紅、来てくれたのですね」

「退治屋が、戦える者が必要なんでしょう？」

藤原妹紅は竹林に居を構え、そこに訪れる者の案内兼護衛役を請
け負っている。

そんな彼女が里にやって来たのは、きな臭い事態に備えて力を求
められたから。里の者は詳しいことまでは知らないが、妹紅の妖怪
退治の実績は生半可なものではないのだ。

もっとも、慧音はそれ以前から里に誘っていたみたいだが。

「別にそんな理由が無くとも……いや、今はいいか。先に私の家へ
向かいましょう」

妹紅は放っておいたらだんだんと自身の生活をおざなりにしてい
く。本人は健康マニアを自称しているが、それも怪しい。少なくと
も慧音はそう認識していた。

故につい小言みたいになつてしまふのだが、里に居るならその心
配も不要だろう。

慧音は優しげに目を細め、妹紅の片腕を抱き寄せて歩き始める。

「ちょっと、歩き難いわよ、慧音」

「おや？ 妹紅が懷炉になつてくれるんじゃないのですか？」

「あれは言葉の綾というか、私が懷炉を作るっていうか……」

「ふふつ、知りません」

炎を操る少女。その力とは関係なく、彼女の体は温かい。

互いに傍で触れ合っていると、雪の零れ落ちる下でも慧音の頬は緩むのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8329v/>

掃除屋幽香

2012年1月12日19時51分発行